天上の国

空色小鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天上の国

【Ｎコード】
Ｎ１０４９Ｄ

【作者名】
空色小鳥

【あらすじ】
神の手で分かたれた地とされる、空に浮かぶ大陸『ムージェン』。かつては栄華を極め、神の代行者としての権勢を誇っていたが、ある時襲った大災厄により多くの民と王族のほとんどを失う事となる。《大災厄》から十数年後――関係の途絶えていた地上から、即位したばかりの王へ即位を祝う使節が送られてくるが…。

序章

――　もし、君がこの青を愛せるならば。
天はきっと…君を祝福する事だろう。
そして私も祈ろう。

君と君が愛する者と。
そしてその行く末に幸いあらん事を。

＋　＋　＋

神の手で分かたれた地とされる、空に浮かぶ大陸『ムージェン』。
過去、ムージェンは地上を支配する立場にあったと伝えられている。ムージェンを治める王族は、そのまま神の代行者として采配を振るった。
歴史書を信じるならば、数百年以上は彼等によって理想的な世界が育まれたという。
だが、彼等はいつしか自らを『選ばれた民』と称し、その行いは次第に差別的で非道なものとなって行った。
地上の人々に、天に住まう彼等へ直接歯向かう手段など皆無に等しい。
天の民と地上の民の間に軋轢（あつれき）が増え、その度に天は無体な仕打ちを重ね――　世界は徐々に乱れて行った。

そして…天罰は、下ったのだ。

それは神の怒りだったとも嘆きだったとも伝えられる。
まず最初に、異常気象がムージェンを襲った。
長く続く大雨。それによって氾濫する河川、地崩れを起こす山々。

根腐れを起こす作物。
それが去ったと思えば、何日も何日も日照りが続いた。芽吹いた若葉もすぐさま枯れ、大地はひび割れる。
緑多く美しかった大地は、その二つで実り乏しい、貧しい土地へと変化してしまった。
そして再び雨が訪れた時――　最後の災厄は訪れた。
何処からともなく発生した病魔。空に孤立しているが故に、その病が国中に蔓延するのにさほど時間はかからなかった。
一人、二人…三人、四人。一人からその家族へ、その家族から隣家へ。そして村中に。
病は何処からともなく忍び寄り、村々を滅ぼし、やがて王都にまでその魔手を伸ばす。
王族だからとて、その手から逃れられる理由はなく、一人また一人と命を落としていった。
当時の王には三人の子がいた。
王子が二人、王女が一人。
最初の子が死んでも、王はムージェンの非を認めなかった。
二人目の子が死んだ時も、王は神こそが間違っていると主張した。
そして――　末の王子が死ぬ前に、自らがその病に倒れても、王はまだ認めなかった。
すでに民の大半は命を失い、王族も一握りしか残っていない。病床の王の周囲には、もう彼に付き従う臣もほとんどいなかった。

「父上、これはきっと天罰です」

唯一生き残った末の王子は、死に行く王をそう諭した。

「どうか、間違っていた事を認めて下さい」

涙ながらに訴える息子へ、王は言った。

「そんな事を認めて何になる。それで余の病が治るとでも言うのか。愚か者め。愚かな臆病者め。これは呪いぞ！　地上の虫けらどもの呪いぞ！！」

やがて王が息絶え、末の王子がその後を継ぐ事になった。彼しか、その後を受け継げる存在がいなかったからだ。

猛威を振るう病を前に、年若き王は出来る限りを尽くした。

一人でも多くの民を救おうと、生き残っていた医師を集め、もてる資材を全て投げ打ち、病と闘った。

一年が過ぎ、二年が過ぎ――。

不思議な事に、若き王は病に罹（かか）る事がなく、その事実は多くの民の心の支えとなり、王族から離れていた人心が少しずつ戻っていった。

明確な治療法が見つからないままに、気がつくといつしか多くの人々の命を奪った病魔はなりを潜めていた。

――　最初の大雨から、十数年。

その悪夢のような出来事は、《ムージェンの大災厄》と呼ばれる事となる。

それが結局神罰であったのか、あるいは呪詛（じゅそ）であったのか、それは定かではない。

だが、ムージェンがその出来事で弱体化した事により、世界が大きな転機を迎えた事は事実である。

ムージェンの人々が病で苦しんでいる時、遥か地上でもまた大きな戦争が起こっていた。

もはや、ムージェンに天の采配を下す力はない。

いくつもの国がそれぞれが滅亡や吸収を繰り返す事で、最終的には実力が拮抗する五つほどの大国へと姿を変えていった。

その争いが落ち着く頃――　ムージェンが地上を統べる時代は完全に過去の物になっていた。

＋　＋　＋

即位した時はほんの少年に過ぎなかった王も、病魔が消える頃には立派な青年となっていた。
彼は妻を迎え、やがて王妃は子を身ごもった。
国はまだまだ安定したとも言えず、多くの民が命を失った結果、大地もまだ恵みを取り戻しきれずにいた。
先の見えぬ未来。それでも彼等は王と王妃、そしてやがて生まれるであろう子に希望を見ていた。
誠実で懐の深い王と慈悲深く慎ましい王妃の下、過ぎ去った苦難は拭われ、穏やかな時代が訪れるのだと――。
しかし、王が子の顔を見る事はなかった。
身ごもった王妃を残し、あまりにも呆気なく彼は死んだ。

――　死因不明の、突然死だった。

第一章　帝国からの書状

「…はあ……」

思わず、ため息が零れた。

耳聡くそれを聞きつけた宰相の眉がぴくりと持ち上がるが、彼は気付かない。

目を向けた窓の外は、これ以上とない快晴。時折部屋へと入る風は爽やかで、正に行楽日和である。

（なんで、こんないい天気に俺は机に噛（かじ）り付いているんだろう…？）

ぼんやりとそんな疑問を天に問う。

問わずとも答えはわかりきっているので、明らかに現実逃避である。

「――　手がお留守ですよ、ソファル様」

穏やかなのに、何故か刃を思わせる声が容赦なく現実に引き戻す。

「書類に目を通して印章を押すだけの単純作業ですよ。これくらいちゃっちゃと済ませて下さいませんかね」

「は、はい…！」

その言葉は一歩間違えば不敬にも取られかねないが、宰相は王族の縁戚関係にある人であり、また彼にとっては教師のような存在である為、彼は焦ったように返事を返した。

単純作業だからこそ集中が鈍りやすいのだが、その言葉に間違いもないので慌てて作業を再開する。

――　そう、この程度で音を上げてはこれから先やって行けない。

彼の名はソファル。ソファル＝タミウ＝ムージェン。

ムージェンの名を持つ意味は一つしかない。その名を持つ以上、性に合わない仕事でもやらねばならない。

何故なら、彼こそがこのムージェンの国王。

齢十五にして即位したばかりの新王であり、同時に今もなお民から深い敬愛を払われる前王の忘れ形見。

十五年に渡る王の不在を支えた、賢妃エラージュと前王の親友にして右腕だった宰相モランによって育てられた彼は、物心着く頃にはすでに次代の王としての責任を課せられていた。
幼い子供に無体な、と言う者もいた。だがそれは仕方のない事だ。ムージェンはまだ《大災厄》の傷跡から完全には抜け出せておらず、国と民を守る指導者は必要だった。
先月、長く空の王座を守り続けていた王妃エラージュが病により帰らぬ人となり、喪が明けたつい数日前に戴冠式が行われたばかりだが、だからと言って仕事の手を抜いていい理由になるはずもない。
再び小さくため息をつきつつも、ソファルは書類とのにらめっこを続ける。捌(さば)く速度は決して早いとは言えないが、それでも先程よりは押印する速度は上がっていた。
そんな彼を見つめる宰相の目は厳しくも暖かい。
王の子として――　しかも父親が賢王と誉れも高い人となれば、どうしても周囲の期待は大きくなる。
そんな過度の期待を受けながらも、真っ直ぐな心根のまま育ってくれた事にモランは安堵していた。
子供っぽさはまだまだ抜け切れないが、彼が精神的にも肉体的にも成熟すればきっと良い王になる――　モランはそう確信していた。
だが同時に、少しの不安も感じていた。
心の拠り所とも言えた母の死を、ソファルは予想外に早く乗り越えた。
母の遺志を継ぐ、と言い切ったその顔に決意はあっても偽りはなく――　だからこそ不安は増す。
何処かで無理をしているのではないかと。
責任感の強さは亡き父譲りか。だがソファルの性格を考えるに、母の死は簡単に消化出来るような事柄とは思えなかった。
単に哀しみから目を背けているだけではないのか、自身を誤魔化しているのではないかと思わずにはいられないのだ。
だが現在の国の要であり、教師的な立場にあるモランには、ソフ

ァルの心を開かせる事は難しい。
国王と臣下の間にある一線を自分から越えては、ソファルの意志を無駄にする。けれど……。
強く優しく、そして美しかった王妃・エラージュの存在は、国民だけでなくソファルにとっても大きかった。
母の死を知り、人目につかないような場所で小さな子供のように泣いていた姿をモランは知っている。
けれどその哀しみを引きずる様子も見せず、数刻後には涙の気配など完全に隠して母の葬儀の準備に奔走していた。
…心を偽る行為は本人の意思とは関係なく、大なり小なり心身を蝕(むしば)む。
弱音を吐ける相手が、哀しみを受け止めてくれる存在が、今のソファルには必要だ。かと言って、簡単に見つかるようならこんな不安など感じる必要もないのだが。
ソファルの心が育つのが先か、それとも彼の心を理解する存在が現れるのが先か――。
どちらにしても、モランにはその日が出来るだけ早く訪れる事を祈るしかなかった。
「…ん？」
比較的順調に書類を捌いていたソファルの手が止まったのは、それからしばらくしての事だった。
「どうされましたか」
「これ…どういう事？」
怪訝さを隠さずにソファルが持ち上げた書類を受け取ったモランは、その内容に目を通すと軽く目を見開いた。
「レサイア……。帝国からの書状のようですね。どうやら仕分けた際に紛れたようです」
《大災厄》が去り、地上とのやり取りも少しずつ戻り始めたが、まだ国単位としての付き合いはない。
地上には現在四つの国が存在する。

その中でも特に実力と国土を誇るのがレサイア帝国。元々は二つの国だったのが、それぞれの世継ぎの婚礼により一国になったという変わった背景も持つ。
そんな国から一体、この廃れた国へ何の用件があるのか――。
書状には新王即位を寿ぐ言葉と、祝いの品を献上したいという内容が書かれていた。
「…レサイアと何か特別な関係とかあったっけ？」
ソファルが首を傾げるのももっともだった。モランですら、何事かと思ったくらいである。
レサイアの現皇帝と言えば、遠く離れたこのムージェンにも野心家である事が伝え及んでいる。
――単純に好意から、などと思えるはずもない。
「今まで一度も関わりはなかったはずです。レサイアとなる前にならば多少はあったかもしれませんが…」
しかしそれも、《大災厄》より以前の話だ。
「これ、どうしたらいいのかな」
国王としての必要最小限の仕事は理解していても、国情が国情の為、外交的な知識も経験もほとんどない。
それはモランも同様だった。今までムージェンと自ら関わりを持とうとする国などなかったのだから。
空に浮かぶムージェンに、地上の民が来ようとすればたった一つしか方法はない。
ムージェン側から任意の場所へ《道》を繋いでもらうのだ。
過去はムージェンの各地に《道》を開ける特殊な術者がおり、地上とのやり取りに利用していたものだが、民の大部分を失った今、その術者の数も数えるほどしかいない。
民の中には親族が地上にいる者もいない訳ではないので、不定期にだが《道》は地上の主要な場所に繋がれている。だが、その回数も多くはないのが現実だ。
この書状もおそらく個人的なやり取りなどに乗じて届いたのだろ

う。
あちらからは望んでも来られないのだから断ろうと思えば断れる。だが、これを断った事で今後、何処で影響が出るかわからない事が不安だった。
なにしろレサイアは地上でも一、ニを争う実力を持った国。
ムージェンの復興が進み、いつか地上と正規にやり取りする必要が出た時、かの国との関係は無視出来ないものとなるだろう。
（――　それに、過去の事もある）
生まれていなかったソファルの知らないムージェンの暗い歴史を知る身には、どんな意図が含まれていようとその書状を無視する事は出来なかった。
これが『歩み寄り』であるのなら、ムージェンは何らかの形で応える義務がある。
かつて地上を我が物顔で支配していた過去を持つ限り――。
結局、ソファルとモランはその申し出を受ける方向で話を進める事にした。
純粋な好意とは到底思えないが、かと言って過去の栄華も昔話になりつつあるムージェンに、地上の大国が欲するほどの物は何もない。
あるのは災厄によって実りの乏しくなった痩せた大地、そして完全に復興しきれていないいくつかの街、疲弊（ひへい）から抜けきれていない民――　それくらいだ。
ソファルの返答に、レサイアはすぐに返事を寄越してきた。
曰く――　過去の悲しむべき歴史は忘れ、新たな関係を築きましょう。
かつてならこんな文面を送って寄越せば、すぐさま使者の首が刎（は）ねられただろうが、今のムージェンにその言葉を拒否する理由はなかった。

地上の大国であるレサイアとの国交が樹立すれば、物資の乏しさ故に滞りがちなムージェンの流通も改善されるかもしれない――ソファルは呑気に喜んだのだが。

彼も宰相であるモランさえも、知らなかった。

建国からして一風変わったかの国が、あらゆる意味で破天荒である事を――。

第二章　思いがけない贈り物

ソファルの即位を祝うレサイアの使節団がムージェンの地を踏んだのは、最初の書状が届いてから半月が過ぎる頃だった。

《道》の性質上、人数こそ百に満たない少なさだったが、むしろその程度の人数でソファルもモランも胸を撫で下ろした。

今まで国交が絶えていた地上から、即位して初めて公式の使節を迎えるのだ。

まったく経験のないソファルは何をどうすれば良いのかさっぱりであったし、モランに至っても国交が正常であった頃などろくに知らない。

それ以前にこの人数の使節をもてなすだけの予算もぎりぎりの貧乏宮廷である。

使節が宿泊する部屋は王宮の使用人だけでは足りずに、王都の主に主婦層から有志を募って必死に整えたほどだ。

元々は豪華にして絢爛（けんらん）であった来客用の部屋も、大災厄の際に前王が民を養う為に装飾品をほとんど売り飛ばしてしまったせいで見る影もない。

それでも寝具などは新品を用意したし、絵画や彫刻がない代りに季節の花々を飾った。

かつての栄華を知る者ならそのあまりの素朴さに涙を流したかもしれないが、ソファルには知った事ではない。

――　そして今、ソファルは着慣れない正装に辟易（へきえき）しつつ、謁見（えっけん）の間に向かっていた。

「モラン…なんかこの服大きい気がするんだけど」

成長期を見越して作ったにしては、少々肩や袖の辺りがもたつく気がしてソファルが尋ねると、斜め後ろに控えるモランは平然と言い放った。

「でしょうね。それは前王が成人の時に着た衣装ですし」

「……」
ムージェンの男児の成人は十六歳。顔も知らない父は二十歳の若さで亡くなったが、その人の成人の時に作ったという事は――。
「…お古って事？」
しかも二十年近く前の。
いくら貧乏でも、正装の意匠が時代に関係のないものでも、それはあんまりと言うものだった。
しかしモランはやはり平然と言い切ってしまう。
「物持ちが良いと言って下さい。心配せずとも虫食いなどはございません」
そこまで言われたら、そうですか、としか言いようがない。
ソファルも別に父のお古が嫌という訳でも（少し切ないが）、大きさが合わない事が気に入らないという訳でもない。単純にこの正装というものが苦手なのだ。
かつて、神の代行者として地上を支配する立場にあったとされるムージェンの王族の正装は、無駄に布を使った上にやたらと時代かかったものだ。
普段は身動きしやすい短衣だが、今着ているのは足首まで届きそうな長衣。
ムージェンにおいて神聖な色とされる青に染め抜かれ、鳥の翼を想わせる銀糸の刺繍（ししゅう）が施されている。
帯は通常の皮のものではなく、太さの違う糸を縒り合わせ、ところどころに金の飾りがついた飾り帯。それは歩く度に擦れて涼やかな金属音を立てる。
確かに少々大きさが合わないように見えなくもなかったが、母から明るい金の髪を、父から空色の瞳を受け継いだソファルにその衣装はとても映えた。
…が、自身の外見に無頓着なソファルにそんな自覚がある訳もなく、まだまだ衣装に『着られている』感じは否めない。
（まあ…この上、貫禄（かんろく）まで求めてはあまりに酷だろうな）

複雑そうなソファルの背を眺めつつ、モランは苦笑する。
つい先程まで、正装を着る着ないのと揉めた挙句になんとか丸め込んだのだ。
ソファルとしては見苦しくなければ問題がないと思っているようだが、相手はレサイア帝国の使節達である。
国の代表として来ている彼等に対し、普段着と変わらない格好で会うのは流石に失礼に当たるものだろう。
生まれた時から質素倹約、自給自足上等、無駄を省く事が当たり前の節約生活をしていれば、価値観が庶民と変わらなくなるのは仕方がないだろうが……。
見た目が良い分、この貧乏気質は近い将来持ち上がってくるであろう、ソファルの結婚問題にも影響しかねない気がする。
早めに何とかしなければ、とモランは決意を心に刻んだ。

＋　＋　＋

謁見の間にソファルの入室を知らせる声が響くと、広い部屋の半分ほどを占める人の一団が一斉に頭を下げた。
（す、すごい…）
角度と言い、下げる速度と言い、一糸乱れぬその様子に感心するよりもむしろ気圧されかける。
かつては地上を支配していた国の国主に対するものとしては文句の付け所がなかったが、国王となって一月にも満たない上に元々堅苦しいのが苦手なソファルには重いだけだった。
…だが、この場に来てしまった以上、国王として彼等と接する義務がある。
ソファルは覚悟を決めると、通路を挟んで二手に分かれている彼等の間を、教えられた通りに出来るだけゆっくりと歩いて上座へと向かった。
かつては父が座していたであろう玉座にソファルが腰を下ろすの

は、まだ数えるほど。
居心地の悪さを感じつつ腰を下ろし、未だ頭を下げたままの状態を完璧に維持し続ける一団に目を向けた。
（…あれ？）
面を上げる許可を出そうとして、使節団の最後尾に不可解なものを見つける。
おそらくレサイアからの書状にあった『祝いの品』なのだろうが、片方はそれっぽい包みなのに、もう片方は何だか布を被せられた籠（かご）のようなもので中身がわからない。
そういや昔、モランにかつて地上からやって来た商人や王侯からの貢ぎ物には、珍獣なども含まれていたという事を聞いた気がする。
籠の大きさはかなり大きい。子供一人くらい入れそうだ。
（…でっかい肉食の獣とか猛禽（もうきん）だったらどうしよう）
ぼんやりとソファルはそんな事を心配した。
（うちにはそんなもの養えるような財力はないんだけどなあ）
しかしその心配は、やはり変に庶民的であった。
ソファルはひとまず謎の籠の事を横に置き、やるべき事を為す為に口を開いた。
「私がムージェンの国王、ソファル＝タミウ＝ムージェンである。レサイアの方々、長の旅ご苦労であった。皆、面を上げるが良い」
必殺・偉い人口調。
若いソファルが口にすると貫禄のない分、妙に芝居染みてしまうが、相手は大国からの客人。侮られてはならぬと思っての事だった。
言い馴れない為、うっかりすると舌を噛みかねない諸刃（もろは）の剣でもある。
レサイアの使節団はソファルの言葉に、下げるのと同様の完璧さで同時に顔を上げた。
黒や焦げ茶の髪、肌の色も濃い人々が目立つ。瞳の色こそ様々だが、やはり大地を想わせる暗い色調の方が多い。
付け焼刃で頭に叩き込んだレサイア帝国の知識を思い返す。

かの国は地上の三つの大陸の内、最も大きな大陸の南半分を占める国だと言う。北に平野部を、南に海と平野を流れる大河によって作られる実り豊かな三角州を有し、気候も温暖だという話だ。
（うちとは大違いだ）
ソファルは少年らしい好奇心で彼等を眺めた。
国からの正式な使節であるからか、その表情はみな取り澄ましたように硬い。その中の一人、モランよりも少し年嵩と思われる男が一歩進み出た。
ソファルを前に深く一礼すると、朗々とした声で口上を述べ始める。
「神ましますムージェン国・国王陛下、ソファル様におかれましては、この度の即位のことお喜び申し上げます。我が国レサイアが皇帝、ロジアム陛下よりささやかながら御祝いの品々をお預かりして参りました。どうぞ、お受け取り下さいませ」
男は目録と思われる封書を取り出すと、ソファルに直接ではなく、側に控えるモランへ向けて捧げ持つ。
帝王の使者であっても、下々の者が王に直接関わる事を良しとしないその行動におかしな部分はないのかもしれないが、その回りくどさにソファルは心の中でため息をついた。
そう思っているだろうと予測していたのか、目録をソファルに手渡すついでにモランが鋭い視線を向けてきたが、ソファルはしらばっくれて何事もなかったかのように目録を受け取り、その封を開いた。
直接物を渡すのではなく、その一覧を書き記した目録を渡すのも、昔からの伝統的なやり取りの一つらしい。
かつては一国どころか無数あった国々から、何かあっては物が送られてきた上に量も半端ではなかったらしいから、ある意味能率的な方法ではあった。
開いて中を改めるのも、ほとんど儀式的なもので実際に仔細（しさい）を見る必要はない。目録を受け取った時点で所有権はソファルの物とな

るので、気になるのなら後で直接確かめれば良いし、仮に受け取る意志がない場合はそれを突き返せば良い事になっている。
最初から拒否する理由もないし、何よりあの籠の中身が激しく気になっていたソファルは、その目録からそれらしい物を見つけ出そうと視線を走らせ――。

「……！？」

目録の最後辺りにそれらしい記載を見つけ、衝撃の余りに呼吸を止めた。
「…ソファル様？」
大きく目を見開いて固まってしまった主に、一体何事かと小さくモランが声をかけるが、それは左から右へと簡単に抜けてしまう。
ぎ、ぎ、ぎ、という擬音（ぎおん）がつきそうな様子で視線を目録から無理矢理に上げたソファルを、レサイアから来た使節の男が感情を読ませない目で見ていた。
「――　聞けば、まだソファル様には正妃がいらっしゃらないとか」
唐突な男の言葉に、モランも嫌な予感を感じて男を注視する。
その口元によく見なければわからない程の冷笑が浮かび、そして消えた後、男は再び口を開いた。
「我が王より、この度の縁をを切っ掛けに、両国の距離が縮まる事を願うと言葉を賜りましてございます」
ばさり、と乾いた音を立てて、籠を覆っていた布が落とされる。
その中にいた『貢ぎ物』を目にし、モランもまた固まった。
――　そこにいたのは、暗い瞳をした一人の少女。
「第十三息女、ルシカ様でございます。どうぞ、妾妃（しょうひ）としてお側に置かれ下さいませ」

第二章　思いがけない贈り物（後書き）

空色小鳥です。第二章更新にあたりまして、序章・第一章の難読（常用外）と思われる熟語等にルビを振りました。他にもございましたらお気軽にご指摘下さい。

第三章　十歳の妾妃

レサイア帝国第十三息女の名を、ルシカ＝ナターラといった。
目録の中にもしっかりとその名が書かれていた――　他の献上品と同じように。
まるで物のような扱いだが、他国に自国の王の血を引く娘を送る事は、地上では割と普通にある事らしい。
ルシカ＝ナターラという名、そして第十三『息女』という言い回しが少女の身の上を語っていた。
帝王の血を引きながらレサイアの姓を名乗る事が許されず、『王女』でも『皇女』でもない『息女』という表現はすなわち妾腹（しょうふく）である上に、母の身分が低い事を事を示す。
故にレサイアも、正妃ではなく妾妃としてルシカを使わしたのだろう。

――　もっとも、当事者にとってはそんな背景はどうでも良い事であったが。

＋　＋　＋

一体その後どうやって受け答えしたのか、いつ謁見（えっけん）が終わったのかもわからないままに、気がつくとソファルは自分の部屋にいた。
服はまだ正装のままだったが、見慣れた部屋にいる自分にほっとする。
（…な、なんだ、夢か……）
そうだよな、そうに決まっているとソファルはぎこちない笑いを浮かべたものの、視線を向けた先、書き物机の上に見てはならない物（＝目録）を見つけて再び固まった。
ごくり、と咽喉（のど）が鳴る。

（ま、まて…落ち着け俺。いくらなんでも、あれは有り得ないって。だって俺、まだ十五だし…じゃなくて！）

ソファルも健康な男子である。そして思春期まっさかりである。

自分が国王である以上、世間一般でいう恋愛が出来るとは思っていないが、夢を見たいお年頃だ。

何より、彼の両親が亡くなった今でも人々の間で語られるほどの相思相愛ぶりで、そんな夫婦関係に密かな憧れを抱いてもいた。

父は母以外に見向きもしなかったそうだし、母は父の死後も次の夫を持とうともせずに女手一つでソファルを育て上げた。

自分で見つける事は無理でも、将来妻になる人を誰よりも大事にしようと密かに思っていたのに――　それを見事に打ち砕かれて、ソファルの心はちょっと傷ついていた。

（結婚もしてないのに先に愛人って有りなのかー！？）

大人って汚い、とソファルは心の中で泣いた。

だがしかし、レサイアが『貢ぎ物』であると言い張る以上、そしてその目録を受け取ってしまった以上、ソファルの手にあの少女の人生は委ねられてしまったのだ。

そう――　問題というか、謎はもう一つあった。

妾妃という名目でソファルの元に送られきたはずなのに、ルシカという名の少女の年齢は十歳だと言う。

現在十五歳のソファルから見ても、妾妃というよりむしろ妹と思った方がしっくり来る。

確かに年の差のある夫婦は実際にいるし、五歳なら差は小さい方だろう。

お互いにあと五年くらい年を取っていて、こういう話になっていたのならまだ納得出来る。

だがしかし…十歳の少女相手では、いくら年が近いと言っても手を出したら（出すつもりも勇気もないが）犯罪ではないかとソファルは思った。

実際問題、普通なら婚姻はその後に子を儲ける事を前提にしてる

訳だし、王の妻ならなおさらである。子を為せる為せない以前の問題ではなかろうか。
それとも、妾妃だからそれでもいいと言うのだろうか……。
（レサイアの民って、幼女趣味でもあるのか……？）
そろそろ混乱も頂点に達しかけていたソファルは、口にしたら国交問題にも発展しかけない不敬甚だしい事を考えつつ、予想外に降って沸いた問題に重いため息をついたのだった。

＋　＋　＋

ソファルが着替え終わった頃に、モランがやって来た。
その服装は礼装のままで、どうやらあの後、使節団の代表者辺りと会合があっていたようだ。
難しい顔に、どうやら話し合いは良くない結果に終わった事を悟りつつ、ソファルは話を促した。
「レサイアとの話はどうだった？」
「百戦錬磨という感じですね。こちらの話をのらりくらりとかわして、なかなか核心に触れさせようとしない。ある意味勉強になりましたが…」
「…それで、あの子は？」
「ルシカ様の事は取りあえずリヨに任せる事にいたしました。流石に無碍（むげ）な扱いは出来ませんしね」
「そっか…」
一時的だが自身の乳母でもあった女官の名を聞き、ソファルは少し表情を和らげた。
「だよな、あの子に恨みとか思う所とか何もないし」
遠目でよく見えなかったが、十歳にしては小柄だったように思う。ただ一度だけこちらに向けられた暗い瞳が脳裏に焼きついていた。
こんな異邦の地に、しかも妾妃として連れられてきては、どんなに心細いだろう。周囲の連れも味方のようには見えなかった。

（…思えば気の毒な身の上じゃないか。もし俺が女で、父親の命令で知らない国の王の妾妃になれなんて言われたら――　うう、絶対に泣く）

衝撃が去り、ルシカの身の上を知って、ソファルは素直に同情した。

「俺も…後で様子を見に行く」

その発言にモランは少し驚いた顔をしたが、やがて軽く肩を竦めた。

「モラン？」

「あれだけ固まっておいて、一体どういう心境の変化なのかと思いましたが…あの方の身の上に同情なさいましたか」

「え、…うん。だって、可哀想だろ…まだ十歳なのに」

「そういうあなた様もまだ十五なんですがね…」

十五の若さで一方的に妾妃を押し付けられるのも、モランにしてみれば十分気の毒だと思うのだが――。

自分の事よりも相手の事を思いやる心根の優しさは、多くの民の命運を預かる一国の王としては甘いと評価される可能性もある。だが、その優しさこそがソファルたる部分に違いなかった。

「あなた様の性格を考えれば、そう思うのも当然な気がしますが――　忘れてはなりません。ムージェンの…いえ、あなたが思う常識が世界の常識と同一ではないという事を」

「…何が言いたいんだ、モラン？」

宰相の釘を刺すような回りくどい言葉に、ソファルは眉を顰（ひそ）める。

モランは重くため息をつくと、あえてゆっくりとした口調で口を開いた。

「妾妃とは言え…あの方を受け入れるならば、レサイアからの干渉を避ける事は出来なくなるという事です」

言外に受け入れるべきではないと言わんばかりの言葉に、ソファルは怪訝（けげん）に思った。

こと、政（まつりごと）に関してモランは確かに厳しいが、情けのない人ではな

い。その人がここまで言う理由が思いつかなかった。
確かに本当にあのルシカという名の少女が自分の妻になるのなら、縁戚関係となるレサイアからの申し出を頭ごなしに拒絶する事は出来ないだろう。
だが、ムージェンは一度滅びかけた国だ。しかも地上と何処とも繋がってはいない。
たとえレサイアがムージェンに対して属国化を目論んでいたとしても、それだけの価値はないように思われるのだ。
そんなソファルの考えを見透かしたのか、モランは言いにくそうに続けた。
「どうも、ルシカ様は話す事が出来ないらしいのです。代表者の方からの話では、生まれつきとの事ですが…実際、何処まで本当か怪しいものです」
「話せないって…」
予想もしていなかった事に、ソファルは素直に驚きを表した。
まさかそんな事情があるとは思ってもいなかったが、それ以前にそれが事実かどうかを疑わねばならない状況について行けない。
「実際に皇帝の息女であるかさえはっきりしておりません。あの方を疑う訳ではありませんが…帝国の意図が見えない状況では、同情心だけで受け入れるのは認めかねます」
苦い物を口にしたかのような口調のモランの言葉を、ソファルはどう受け止めるべきか悩んだ。
モランも出来る事なら疑いたくはないのだろう。
相手は十歳の少女だ。ただ、その背後に繋がるレサイアという国がそれほどに油断のならない国という事なのだ。
今まではムージェンの事だけを考えていれば良かったが、今後かの国と繋がりを持とうと思うのなら、慎重に行動しなければならないだろう。
しばらく考え込んだソファルは、やがて結論を出した。
「俺、これからルシカに会って来る」

唐突とも言える言葉に、モランは眉を寄せた。
「会ってどうなさるのです」
「疑うだけじゃ埒が明かないだろ？　モランが言うように、相手の意図がわからない以上、何か理由をつけて断るのがいいのかもしれないけど…まずは本人の意志を確認してからが良くないかな」
言いながら、そういや話せないなら意志確認のしようがないんだったと思いつつ、ソファルは気付かなかった事にして更に言い募った。
「ここまで来て、『気に食わないからいらない』って突き返すのって…何か人を物扱いしてるみたいじゃないか」
それではレサイアとやっている事は同じだ。
言わんとする所は納得したのか、モランはそれ以上否定的な事は言わなかった。
「…そこまで仰るのなら止めはしません。ですが、わかっていますか？」
「何を」
「――　あの方を妻に娶るのは、あなたなんですよ」
「……」
何らかの手段で意志を確認出来たとして、本人がここにいたいなんて言った日には、相手の思うように妾妃として受け入れるという事になりかねない。
しまったそうだった、と思っても今更後に退けるはずもなかった。
「そ、その時はその時で考える！　取りあえず行って来るから！」
正に行き当たりばったりとしか言い様のない言葉を言い残して、ソファルは逃げるように部屋を出て行く。
その背を見送って、モランはやれやれと肩を竦めた。

第四章　疑惑

ソファルはルシカの部屋に向かう前に、モランが世話を任せたという女官、リヨの元に立ち寄った。
「リヨ、ちょっといい？」
「あらまあ、ソファル様。わたしに何か御用が？」
かつてソファルの乳母を務めた事もあるリヨは笑顔で応じる。
にこやかな笑みには何の裏もなさそうだが、事情を知っていて『何か御用』と言う辺りが彼女の人となりを示している。
見かけこそふくよかな外見も手伝って人畜無害そうに見えるが、それに騙(だま)されてはならない。
伊達に賢妃と呼ばれたエラージュの側仕えを長くしてきた訳ではない。中身は一癖もニ癖もあるのだ。
「…用があるから来たに決まってるだろ。ええと…――」
そこまで言いかけてソファルは困った。
まだ受け入れると決めた訳ではないのだが、ルシカの事を気安く名前で呼んで良いのだろうかと今更ながらに思い至った。
『ルシカ殿』というのはなんか時代かかって嫌だが、かと言って妾腹筋の彼女に対して『姫』と呼んでも問題がないかどうかも悩む所だ。
皇帝の息女、という肩書きで呼ぶのは何だか失礼な気もするし、第一呼びにくい。
「…ええと、レサイアからの客人の事なんだけど」
結局、良い呼び方を思いつけずにそう口にすると、リヨはころころと笑った。
「ほほほ、客人なんて水臭い表現ですわねえ。レサイアからの客人なんてここには百人近くいらっしゃいますのよ？　はっきりルシカ様の事だと言って下されば良いのに」
「え、だって、…なんて呼べば」

「お名前を呼び捨てでも良いのではありません？　だってあの方、ソファル様の――」
「待った、それはまだ決定事項じゃない！」
「あら、そうでしたの。わたしはてっきり…」
楽しげに笑いながらも、心の底では信じていないのは明らかだった。どう見ても自分をからかう事を楽しんでいる。
ソファルは憮然としながらも話を先に進める事にした。
「その件を含めて本人に確認を取りたいんだけどいいか？」
「すでにお召し替えも終わりましたし、問題はないと思いますけども」
頷きながら、リヨはソファルに顔を寄せた。そのまま周囲を憚るように小声で尋ねてくる。
「…ルシカ様のお声の事は聞かれました？」
「ああ…」
言われて先程モランから聞いた言葉を思い出す。
「喋れないんだって？」
「ええ。しかもそれだけではありませんの」
「え？」
リヨの珍しく見せた暗い表情に、ソファルは驚く。
それは困惑を隠せないような表情だった。一体何がと思っていると、リヨは小さくため息を漏らすと迷うように唇を開いた。
「話せないならばと、付き添った別の女官が筆談を申し出ましたの。けれど……」
「…まさか」
「その、まさかです。どうやら…ルシカ様は話す事だけでなく、文字を書く事も出来ません」
「……」
その言葉は俄かには信じがたい事だった。
レサイアは地上でも一、二を争う国だという。使節が携えてきた品々からも、文化水準の高さを想わせた。

その国の――　たとえ妾腹であっても――　皇帝の娘ならば、読み書きくらいは普通身に着けさせるのではないだろうか。
十歳という年齢は確かに幼いが、文字の読み書きを理解出来ない年ではない。
しかも一国の妾妃として差し出す娘ならばなおさらだ。レサイアの姫は文字も書けないのかと、本人を通して母国が侮(あなど)られる可能性もあると言うのに――。

『実際に皇帝の息女であるかさえはっきりしておりません』

モランの言葉が甦った。リヨの言葉が真実ならば、モランの言葉も説得力を帯びてくる。
何か理由があるのかもしれないが、もしルシカがレサイアが用意した偽の息女なのだとしたら――。
(…だとしたら……って、でもそんな事をわざわざする必要は何処に)
偽の妾妃なんて明らかに策謀くさいが、今のムージェンにそんな手段を講じる必要性をソファルは見出せなかった。
リヨもおそらくそう思うからこそ、困惑しているのだろう。
まだソファルがレサイアに対して『嫁を寄越せ』と言って、『可愛い娘を貧乏国にやれるか』という理由で偽者を仕立てたという流れならば理解出来る。
だが、ソファルは成人もしていないし、正直、婚姻などする必要はあるだろうとは思っていても、まだまだ先の話だと思っていたくらいである。
「…リヨはどう思う？」
「わたしに聞かれましても困ります」
「……だよね」
無駄な足掻きだった。
「取りあえず会ってみる。こちらの言っている事は通じてるんだろ

？」
「ええ、そちらは大丈夫のようですわ。ですが……」
何かを心配しているような表情に、ソファルは笑った。
「大丈夫、いきなり面と向かって『お前は何者だ』なんて事は聞かないよ。どんな事情があるかまだわからないけど…さっきはあまりに吃驚(びっくり)して声とかもかけられなかったし、一度本人にちゃんと会っておきたいと思っただけなんだ」
「左様でございますか。それにしても、帝国は無体な事をなさるものです。あんな幼い方を……」
リヨの瞳に微(かす)かな怒りが宿る。
リヨは昔、生まれて間もない娘を亡くした事がある。生きていれば、ソファルにとっては乳姉弟となった人だ。
その事を思い出し、彼女の怒りが何に向けられているのかがわかるような気がした。
「リヨ、モランからも言われているかもしれないけど、他の客人の動向にも注意しててくれ。それと…こんな事はしたくないけど、あの子の身辺も警戒を」
「畏(かしこ)まりました。警備に関してはうちのドラ息子によーっく言って聞かせておりますわ。何かあればすぐお耳に」
再びいつもの笑顔に戻り、力強く頷いてくれるリヨにソファルも頷き返す。
「トラムが警護についてくれてるのか。わかった、頼む」
ソファルより五つ年上のリヨの息子・トラムは、ソファルにとっては兄代わりの存在だ。
母のリヨにして『ドラ息子』と呼ばれる位に少々素行には問題があるが、腕は確かだし気心の知れた信頼の出来る人間である。
モランがいてリヨがいて、トラムがいる。他にも多くの人がソファルを助けてくれている。
『みんなに感謝を忘れては駄目よ』
それは亡き母が繰り返し口にした言葉。

王であるからこそ、支えられている事を忘れてはならない。その言葉は今も心の中に息づいている。

他の国は知らないが、自分は幸せな国王だと思う。そう思う一方でソファルは思った。

ルシカ――　帝国から一人送り出されてきた彼女には、こんな心を許せる『味方』が一人でもいるのだろうかと……。

第五章　ルシカ＝ナターラ

ルシカの滞在する部屋は、離れの最上階、客室の中でも一番良い部屋が急遽充（きゅうきょあ）てられた。

もっとも一番良いとは言っても、一番広くて一番日当たりが良い事以外に、他の客室との違いはあまりなかったりもするのだが。

何しろ、こんな事態をまったく想定していなかったのだから仕方がない。

リヨから他に聞いた話では、ルシカは特に側仕えの女官もなく、一人で部屋にいるらしい。

仮にも皇帝の血を引く人物に、身の回りの世話をする者が全くいないというのも奇異だ。いくらソファルにでも、その不自然さ位はわかる。

――　だからこそ、モランはルシカを疑っている。

否、ルシカ自身と言うよりは、ルシカを妾妃として差し出してきたレサイアの思惑を、と言うべきだろう。

年齢的な事を考えてもルシカは単に目くらまし、利用されているだけと考える方が自然だ。

そんな事をつらつらと考えている内に、ルシカの部屋の前に辿り着いた。

他の使節団の人間とは階が異なるせいか、廊下は静まり返っている。少し離れた所に警備を担当するムージェンの衛兵の姿が見える程度だ。

月日に磨かれた暗い飴色の扉を叩こうとして――　ソファルは何と呼びかけていいものかと持ち上げた拳を寸止めした。

（うーん…一応初対面みたいなもんだし、ここは国王と友好国（予定）の姫の挨拶という事で『ルシカ殿』がいいかなー…）

客室の前で手を持ち上げたまま思案する姿は間抜けの一言に尽きたが、彼は至って真面目だった。

相手は十歳の子供だが、子供と侮(あなど)って良い理由はないし礼儀は大事だ。
よし、と心を決め、止めていた手を扉に向かって下ろそうとした時だった。
ソファルの手が扉を叩く前に、まるで気配を察したかのようにすうっと静かに扉が内側に向かって開いた。
その隙間から顔を出したのは見るからに幼い少女。
（う…あ……）
人間関係は初対面が大事だと言うのに――　行き場を失くした手のやり場に困る羽目に陥(おちい)るとは完璧に予定外だった。
（きょ、挙動不審者と思われたかも…！）
心の中の動揺がダダ漏れの現状こそ、挙動不審そのものだったが、ソファルはそんな事にまで気が回っていなかった。
出鼻を挫(くじ)かれてしまった事で頭が真っ白になった彼は、それでも涙ぐましい努力で口を開いた。
「や、やあ！　俺はこの国の王で、そのーあのー…ええと……」
「……」
ルシカはそんなソファルをじっと見つめる。
決して軽蔑(けいべつ)されている訳でも、警戒されている訳でもないようだが、ソファルの努力はその真っ直ぐな視線であえなく撃沈する事となった。
黒目がちの大きな瞳の色は、底が見えない闇の色。そこにソファルの顔が小さく映っている。
くせのない、肩より少し長めに切りそろえた髪は暗い灰色で、白いというよりは青白いと表現した方がしっくり来るような肌とあいまって無機質な印象を与えた。
顔立ちは十歳の年齢にしては幼く見える。目に見えて整っているという感じではないが、何処となく儚(はかな)い雰囲気があった。
それはおそらく、その顔に一切の表情がないからだろう。せめてその口元に笑みがあれば、また印象が変わっていたに違いない。

ルシカは無表情のまま、ソファルをじっと注視した後、まるで中へと招くように更に大きく扉を開く。
そして、床に長いスカートが直接触れるのにも構わずに、その場に跪(ひざまず)いて頭(こうべ)を垂れた。
それはムージェンとは少々やり方が異なっていても、見るからに最高の敬意を示す挨拶(あいさつ)だとわかるもので、ソファルははっとする。
（――　この子は、ただの子供じゃない）
自分が十五の子供であっても、国王として振舞わねばならないように、目の前の少女も皇帝の息女として振舞っている。明らかにソファルが何者か理解した行動だ。
可哀想だと単純に同情していた自分をすぐに恥じ、ソファルも姿勢を正した。
「…顔を上げていい。俺は、ソファル。ソファル＝タミウ＝ムージェン。君に聞きたい事があって来た」
ソファルの許しを受けてルシカは顔を上げる。
恐れや怯(おび)えもない代りに、見知らぬ土地へきた興奮や喜びもない表情はまるで人形のよう。
「リヨから話せない事は聞いてる。だから、俺の聞く事に対して、頷くなりして答えてくれればいい。でもその前に…ルシカって呼んでいいか？」
ルシカはこくりと素直に頷く。
敬称もなく、いきなり呼び捨てにされても嫌そうな顔をしない所を見ると、レサイアにいた頃にもそう呼ばれていたのかもしれない。
流石に扉を挟んで立ち話するのは気が咎(とが)め、ソファルは室内に足を踏み入れるとまだ跪いたままのルシカに手を差し出した。
その手の意図がわからないのか、不思議そうに瞳が見上げて来る。
ソファルは苦笑し、口調を和(やわ)らげた。
「そんなに畏(かしこ)まる必要はないよ。突然来て驚かせてごめん。ほら、立って」
無理矢理手を掴(つか)んで立ち上がらせると、ルシカは軽く首を傾げた。

ようやく年相応に見える仕草を目にして、ソファルの緊張も解ける。
聞きたい事は山のようにある。だが、何よりも先に聞くべき事、それは。
「…ルシカ、もし望むなら俺は今回の話を蹴る事も出来る。君が国に帰りたいのなら、無理にここにいる必要はない」
「……」
「レサイアの使節団が滞在するのは五日――　五日後には、答えを出さないとならない。国には家族とかいるんじゃないのか？」
ルシカは神妙な顔でソファルの言葉を聞いている。言葉を発さない代わりに向けられる視線に、ソファルは何となく居たたまれなさを感じてきた。
それもそうだ。家族とか国とか言っても、これじゃ体(てい)のいい厄介払いをしているようにしか聞こえない。
言いたい事はこんな事ではなくて――。
「もし、ルシカがここにいたいなら……その、妾妃とかそういうのを抜きで、ここを気に入ったのなら、俺は…ムージェンは、ルシカを受け入れる」
そう、本当に言いたい事は国に帰す事ではない。ルシカ自身の意志を確かめたいだけだ。
ここに留まるか、否か――　ただ、それだけを。
ソファルの言葉に、ルシカは驚いたようにその目を軽く見開いた。ルシカにしてみれば、選択肢など与えられる予定ではなかったのだろう。
嫁ぎ先に送られてしまえば、相手が自分をどう遇(ぐう)しようとその地に骨を埋(うず)めるものだと思っていても、まったく不思議ではない。
モランの懸念(けねん)もわかる。レサイア側がどのような思惑を持っているのかわからない今、簡単に受け入れるような事を言うべきでもない事も。
ただ――　同時に思ったのだ。
確かにルシカを拒絶する事で、国交が断絶する事と引き換えに、

ムージェンは守られるかもしれない。
…でも、そうなった時にルシカは？
「ルシカは…レサイアに帰りたいか？」
それでもルシカが故郷に帰りたいと言うのなら。
そこに受け入れる家族が、待っている人がいるのなら――　どうにかして出来るだけ良い形で帰してやりたいと思った。
このままムージェンに残れば、下手したら二度とその人達とは会えなくなるのだ。
…大事な人と二度と会えない。その苦しさと哀しみは、ソファルもよく知っていたから。
ルシカはまるでソファルの意図を推(お)し量ろうとするかのように、しばらく彼を見上げていた。
その視線を正面から受け止め、ルシカの反応を待つ。やがてルシカは、こくりと一度頷いた。

第六章　警告

「…そっか。やっぱり帰りたいよな」
それは半ば予測していた答えだった。
ソファルにとって、ムージェンが何よりも愛する故郷であるように、ルシカにとってもレサイアは離れがたい故郷なのだろう。
十歳の年若さなら、まだ親が恋しくても不思議ではない。
「わかった。何とかルシカの立場が悪くならない方法を考えて、きっとレサイアに帰す」
どうやる気です、とモランに後で問い詰められるのは確実だが、これがルシカに対するソファルなりの誠意だった。
明確な方法はまだ思いつけないが、何となく思いついた事はある。…モランを筆頭に周囲の人間の協力が必要不可欠の為、まずはそこから攻略しなければならないに違いないが。
ルシカはやはり無表情でその言葉を聞いている。果たして国に戻れる事を喜んでいるのか、それともソファルの言葉を疑っているのかもわからなかった。
だが、一方的な言葉のやり取りでありながらも、何故か居心地の悪さを感じない。全てを言葉にしなくてもわかってもらえるような――　不思議な安心感を感じた。
思い返せば、今まで常に自分より年上の人間ばかりに囲まれ、年下の者に直接接するのは初めてである事に気付いた。
肩肘（かたひじ）を張っているつもりはないが、『国王として恥じない自分でなければ』と無意識に気を張ってきた気もする。
ムージェンの民でもなく、自分より年下のルシカには（本当はむしろそう振舞わなければならないのだろうが）そんな事をする必要がない。
…だから肩から力が抜けるのだろうか？
「ルシカは当然、ムージェンに来たのは初めてだよな？」

こくりと首が縦に振られる。
《大災厄》以後のムージェンはまだまだ復興の途上で、皇帝の娘であるルシカに渡せるような土産などろくにない。
――　だからせめて。
「レサイアみたいに栄えてはいないだろうし、一度滅びかけたような所だけど、花も咲くようになったし、ここ十年で割と景色は戻ってきてるんだ。時間があったら俺も案内する。帰る前にあちこち見て行ってくれな」
…せめて、思い出を。
ソファルの言葉に、ルシカの目が丸くなり――　やがてその首は、ゆっくり縦に振られる。
心なしかその硬い表情が柔らかくなったような気がして、ソファルは何となく嬉しくなった。
問題は具体的には何一つ解決しておらず、むしろ自分で増やしたようなものだったが、やはり直接会って良かったと思う。
「話はこれだけだ。旅で疲れてる所にごめんな」
ルシカはその言葉に小さく首を横に振る。その小さな手がきゅっとソファルの手を握った。
自分より少し体温の高いその手に驚きつつ、言葉を持たず字を知らないルシカが気持ちを伝えるには、このような手段しかないのだろうと思い当たった。
言葉がなくてもわかるものはある。気にしてない、そう言いたいのだと推測し、ソファルは微笑んだ。
（…妹がいたら、こんな感じなのかな）
そんな事を思いつつ、ソファルはルシカの部屋を後にした。

＋　＋　＋

部屋の外に出、モランがいるであろう執務室へと足を向けかけたソファルは、ふとその足を止めた。

（……？）
今、何か聞こえたような気がした。
「なあ…今、何か聞こえなかった？」
通路の端に控える衛兵に尋ねれば、男はいいえと否定する。
（ん～？　じゃあ空耳か……）
首を傾げながら、ソファルは再び足を動かし始める。確かに聞こえた気がしたのだが。
何かこう――　訴えるような『言葉』が。

＋　＋　＋

その頃、ソファルが消えた扉をルシカはじっと見つめていた。
先程までと変わらない凍りついた無表情の中、瞳だけは何処か悲しげな光を帯びている。
（…優しい、ひと……）
直接会ったこのムージェンの国王を思い返す。
闇を閉じ込めたようなその目が、窓の外に向けられた。そこに見える青は、その人の瞳の色と同じ。
地上よりも近く、それ故に澄みきった汚れなき青。触れた手から感じたのは誤魔化しのない誠意。
――　彼は間違いなく、天に加護を受けた人間だ。
言葉を紡げない唇が小さく動く。

『…キヲツケテ……』

声としては発する事のないその呟きは、誰の元へも届かないまま空へ消える。
口にしつつも、ルシカは己を恥じるように唇を噛み締めた。
直接会った、決して長いとは言えない時間の間にわかる事は多くはない。けれど彼が天に愛され、光に愛され、人に愛される人なの

は間違いなかった。
どう贔屓(ひいき)目に見ても招かざる客である自分は厄介者に違いないのに、彼はわざわざ自ら自分の意志を確認しに来たのだ。
一国の王とは思えない『お人よし』だとも言えるが、ルシカにとってそれは何より眩しい長所だった。
…生まれて初めて、『人』として扱われた気がする。
ルシカは今は遥か下界にいる、『父』を思い返した。かの人ならば――　意志確認の猶予(ゆうよ)も与えずに命を摘み取ってしまった事だろう。
疑わしきは殺せ、利用出来るものは全て利用せよ…そうやって、今まで生きてきた人だ。
そうやって父が『皇帝』となった事とは対照的に、彼――　ソファルはきっと、民と臣を愛しそして愛される良い国王となるだろう。
(…でも……)
ルシカの瞳が闇の色を深め、冷たく光る。
(それも、生き延びたらの、話……)
凍りついた表情からは、ルシカの感情は決して見えない。
『レサイアに帰りたいか？』
ソファルの問いが耳に甦(よみがえ)る。ルシカは頷き、ソファルはならば帰すと約束した。
けれど彼は知らない――。
ルシカが『レサイアに帰りたい』のではなく、『ここにいられない』から頷いた事を。

第七章　忍び寄る毒

荒れ果てた大地。見渡す風景の中、世界は枯れた大地の色をしていた。

「でもね、昔、この国は…この大地はとっても美しかったのよ」

自分の手を引きながら優しい声が過去を語る。

「あなたのお父様はそれを取り戻そうと頑張っていたわ。自分で土を耕したりもしたのよ。…ほら、見てご覧なさい」

手を繋いでいない方の白い指が、大地の一角を示す。よくよく見なければわからないほどの変化が、そこにはあった。

「…かあさま、これはなんですか？」

灰色を帯びた黒い土から、無数の緑色が伸びていた。ひょろひょろとどれもが頼りなく、ちょっと強い風が吹いたら飛んでしまいそうだ。

ようやく言葉を操れるようになった幼い子供の質問に、母は誰もが慈母の微笑みだと讃える優しい笑顔を浮かべた。

「そうね、ソファルは初めて見るのよね。これはね、芽よ。何の芽か、よく見ておいて後で母様と一緒に調べてみましょうね」

――　覚えている。

幼い頃、母・エラージュは時折こんな風に自分を連れて城の外へと出ていた。

ムージェンの現実を自身の目で確かめ、いつかそれを引き継ぐであろう自分に守るべきものを教えようとしていたのかもしれない。

覚えている限りでは、一度として怒った事のない人だった。

そして、ソファルが知っている限りでは、母が泣いたのはたった一度きりだった。

窶れ衰弱し、高熱の為に現実と夢の区別がつかなくなって、ようやく母が見せた弱さ。

『――　ルフトさま…』

父の名を呼び、涙を零した母は、今は死者の国で父と出会えているだろうか。そうだったらいいと心から思う。
「あなたが大人になる頃には、きっと元通りになっているわ。お父様の夢は、結局あなたに直接渡す事は出来なかったけれど…代りに母様が果してみせる」
優しい声音に秘められているのは確固たる意志。
その頃の自分は、そんな事を言われても何一つ重要性など理解していなかったけれども。
前王――　ルフト＝スライ＝ムージェンが愛した王妃は、その優しげな外見とは裏腹に強靭（きょうじん）な意志を持った女性だった。
父の死の原因は今も謎のまま――　前夜まで兆候（ちょうこう）らしきものもなかったのに、翌日の朝、寝台の上で冷たくなっていたのだと言う。
その頃、身ごもっていたエラージュは突然の哀しみに流産しかけたらしいが、その精神力で哀しみを乗り越え、ソファルを産んだ。
「あなたが大人になった時、あなたの手に恵みを取り戻したこの国を渡してみせる。だから…早く大きくおなりなさい。あなたが大人になる日を私はとても楽しみにしているのよ」
――　結局、その言葉は半分果たされ、半分果されずに終わった。
エラージュは結局ソファルが成人する姿を見る事が出来ず、ムージェンも完全に復興したとは言えない状況だ。
だが、前王ルフトが種を蒔（ま）き、芽吹いた芽を守り育てたのは確かにエラージュだった。
エラージュは己の誓いを果し、ソファルの手にムージェンを手渡した。育った芽が花開き、どんな実を結ぶのか――　それは引き継いだソファル次第だ。
思い出の中の母の姿に、ソファルは誓いを新たにする。
母が死んだ時、ソファルもまた誓ったのだ。母が受け継いだように、自分もかつて父が目指したものを受け継ぐのだと。
かつて神に愛されたと謳（うた）われたこの国を、かつてのように…いや、かつてよりもより良いものにしてみせるのだと。

――と、不意に視界がぐにゃりと歪んだ。
（…なんだ？）
エラージュの姿はたちまち、亡くなる寸前の痩せ細ったものへと変わった。驚く間もなく、その痩せた指が恐ろしい力で手首を握り締めてきた。
「…受け継ぐの、そう、受け継ぐのね……」
紡がれる声は母のものとは思えない、枯れ果て、毒を含んだものだった。
「母上……？」
こんな場面は知らない。
死ぬ間際まで、病に苦しみつつもエラージュは不思議と穏やかだった。こんな禍々（まがまが）しい表情と口調などした事もない。
「お前がムージェンの王ならば、…過去の罪悪も受け継ぐべき。お前はそれをどうやって贖うのかしら……？」
ギリギリと、人の物とは思えない力で掴まれる手首は、すでに鬱血し、指先が白くなるのを通り越して赤黒くなりつつあった。
だが振り払う事もできず、ソファルは苦痛に耐えつつ、母の――母の姿をしたモノの言葉を聞く事になる。
「罪…悪……？」
「知らないとは言わせない…忘れたとは言わせない……！　その血ある限り、罪は消えない……！！　あはははは！！！！！」
言葉は終いには耳を塞ぎたくなるほどの哄笑となる。戸惑ったのは一瞬。すぐにソファルは自分を取り戻した。
これは違う、母ではない。ソファルの瞳に怒りが宿った。
「母の思い出を汚すな……！！」
――エラージュが亡くなったのはほんの一月前。
まだ色濃く残る思い出を、土足で踏み躙られて平気でいられるほど、ソファルは冷めてはいなかった。
その怒声を受け、エラージュの姿をしたそれは、にたりと笑ってその顔を近付けて来る。

「忘れるな忘れるな、罪を忘れるな……！！」
「…ッ、消えろッ！！」
力任せに母の姿をしたものへと殴りかかった瞬間、ブツリと意識が切り替わる。
「…ッ、ハァ…は……」
見開いた目に映るのは、夜の闇に染まった見慣れた天井。
荒い息をつきながら、ソファルはのろのろと身を起こした。
「…なんだ、今の…夢、なのか……？」
首筋や背に、嫌な汗が流れる。耳にはまだ、あの哄笑がこびりついているようだ。
軽く首を振り、咽喉（のど）の渇きを癒（いや）そうと、灯りを求めてテーブルの上に置かれたランプに火を灯（とも）した。
ささやかなものながらも、ランプの暖かいオレンジの光は強張（こわば）った心を解きほぐしてくれる。
呼吸を整えながら水差しに手を伸ばしたソファルは、そこでぎくりと身を強張（こわば）らせた。
――　水差しに向かって伸ばした腕の先、先程掴まれた手首の部分に赤黒い痣（あざ）があった。
ぞくりと背に悪寒が走る。まさか、と思いながらもソファルは視線を周囲に走らせた。
…不審者の気配はない。だがしかしこれは――　。
「冗談きつい……」
怖がらせる目的での怪談には怯（おび）えずとも、実際の怪現象を前にしては流石に参る。
頭を抱えつつも、けれどソファルは確信していた。
…これはきっと、これから起こる事の始まりに過ぎないのだと。

第八章　トラム＝イルマース

結局、その後も熟睡（じゅくすい）する事が出来ず、いつもより早く起きてしまった。

ソファルはのろのろと起き出すと、寝不足の気だるさを引き摺（ず）りつつも、夜明けの庭を散歩する事にした。少しでも滅入（めい）った気分を変えたかったのだ。

見上げた空は澄み切っている。今日も天気は良さそうだ。

ムージェンは空にあるからか、それとも他に原因があるのか、一年を通じて天候が崩れる事は少ない。だが今の心理状況では、曇り空でない事が妙にありがたかった。

早朝の静謐（せいひつ）と清々しい大気は、昨夜の悪夢を洗い流してくれる気がする――　それが夢でない証は、今もまだソファルの手首に残っていたけれども。

着替える時、痣（あざ）を気にしてソファルは長い袖の服を着た。

最初は包帯かなにかで巻いて隠そうとしたのだが、それだと逆に目立って周囲を心配させかねないと思ったからだ。

特別寒くもないのに長袖を着ている事は不審に思われるかもしれないが、真夏という訳でもないから誤魔化しもきくだろう。

（…多分、無関係じゃないよな……）

ぼんやりと考えながらソファルの目が向かうのは、使節団が宿泊している離宮。

いかなる手段を用いてあのような悪夢を見せたのかも、腕に痣を残す事が出来たのかもさっぱりわからないが、状況を考えれば彼等以外に怪しい存在はいない。

…その中には、昨日会ったルシカも含まれている。

あまり考えたくはない事だが、使節団に関係する人々でソファルと直接の接触があったのはルシカだけなのだ。

無意識に手を持ち上げる。ルシカが触れたのは、痣が刻まれた手

とは逆だった。
ソファルもまだまだ成長期で決して大きいとは言えないが、ルシカはソファルから見ても小さく、そして頼りなく見えた。
（疑いたくないな…）
だが、心の内面とは裏腹にソファルも理解している。
どんなに幼くても犯罪を犯す者はいるし、むしろ善悪の判断が甘い分、大人よりも迷いなく行動を起こせる事を。
外見や印象で人を判断するのは危険だ。ただでさえ無表情で言葉を発する事の出来ないルシカは、何を思っているのか掴みにくいのだから――。
…などと考え込んでいたソファルは、次の瞬間、はっとその目を見開いた。
ほぼ同時に、シュッと空気を何かが切り裂く音が背後でする。
半ば反射だけで身体を動かし、自分目掛けて振り下ろされてきた『何か』を間一髪で避け――　きれずに、不意に速度を落としたそれにポコン、と頭を叩かれた。
「よっ、ソファル。随分と早いな。何やってんだこんな所で」
仮にも国王の頭を、手にしたソファルの身の丈はある杖で叩いたのは、見慣れた顔の人間だった。
「トラムか……」
赤い髪に緑を帯びた煉瓦色の瞳。ソファルより頭一つ半くらい高い身長と比較すると体格的には細身だが、長い腕や肩にはしっかりとした筋肉がついている。
そこにいたのは紛れもなく、リヨの息子のトラム＝イルマースだった。その顔を見た瞬間、ソファルは安堵と共に怒りを覚えた。
この微妙な時に紛らわしい真似をされて、怒らずにいられるほど大人ではない。
「なんだ？　そのがっかりした顔は。オレだと何か問題あるのか？」
わかっていてそんな事を言う辺り、確実にリヨの血を引いている。にやにや笑う綺麗に日焼けした精悍な顔に、ソファルは冷めた視線

を送る。
「がっかりしてない。…人の事を途中まで本気で殴ろうとしておいて、言う事はそれか？」
まだ頭の上に乗っている杖は木製だが、非常に密度の高い、水にも浮きにくい特殊な木材で作られており、使い手の力量と使い方次第では人も殺せる。
ムージェンの王宮に詰める衛兵は、流血を禁じられた場所故に、武器に類したものは所持出来ないように定められている。代りに持つのが特別製の杖である。
木製である以上、基本的に相手を打ち倒すと言うよりは、捕らえ押さえるといった護衛に特化したものだ。
逆に言えば、それを『武器』として使いこなせるという事は、それだけの手練（てだ）れという事である。
長い杖を手足のように使いこなすトラムは、若いながらもその一人だ。
ひゅんっと軽い音を立てて、ソファルの頭の上から杖を回収すると、トラムは軽く首を傾げた。
「だからちゃんと寸止めしただろ。…本気でどうした？　やけにピリピリしてねえ？」
トラムの顔からにやにや笑いが消えた。
やたらと勘がいいトラムは（とある人物はそれを『野生の勘』と称する）、心配そうにソファルの顔を覗（のぞ）き込んでくる。
「…そ、それは……」
実際、トラムの言い分に間違いもなかった。
トラムがこんな風に絡んで来るのは毎度の事だし、いつもは文句は言っても喧嘩腰で受け答えたりはしない。
何より、普段と違う行動を取った自分にも非がないとも言い切れない。
「――　夢見が悪かったんだよ」
結局何処まで話して良いのか迷った挙句に、そんな答えを口にす

る。嘘ではないけれど、全てでもない。
「夢？」
「それで早く目が覚めたから、気分転換に庭をちょっと散歩してたんだ」
「ふーん…そういう事か。ったく、普段起こされるまでは起きないお前がふらふら歩いてるから、よもや夢遊病かと思わず殴りかかっちまったじゃねえか」
「…そんな理由で殴りかかるなよ」
第三者であるレサイアの使節団が宿泊している離宮はすぐそこだ。
ソファルとトラムの間柄を知らない人間が見れば、トラムは国王に向かって殴りかかる狼藉者以外の何物でもない。
トラムの事だから周囲に人気がない事は承知の上なのだろうが、状況を考えて欲しいものである。
「トラムこそこんな所で何を？　また朝帰り？」
「またって…お前、オレを何だと思ってるんだ。仕事明けに決まってるだろう」
「え？　あ、そうか」
そういやトラムは離宮の警備担当だ。普段、仕事以外の朝帰りが多いものだから、リヨから聞いていたのにうっかり忘れていた。
「今頃戻ってるって事は…昨日は不寝番だったんだ。お疲れ」
「おう」
トラムは手にした杖で軽く肩を叩きつつ頷いた。確かに少し眠そうだ。
仕事に入る前に休息は取っていただろうが、普段寝ているべき時間に起きているのは結構疲れるものだ。
口にはせずに感謝の気持ちでトラムを見ていると、トラムの目が不意に鋭く眇められた。
「…おい、ソファル」
「何？」
「その腕…どうした」

反射的に痣の残った手首を見る。袖で隠れきれない部分が僅かに見えていたが、普通なら気付きそうにない程度だ。
その目ざとさに、ソファルは内心舌打ちした。
「何でもない」
「何でもない訳があるか。ちょっと見せてみろ」
有無を言わせない口調に、ソファルは一歩後ずさる。
普段はトラムが子供の頃と変わらない態度で接してくれる事を嬉しく思うが、今日ばかりは歓迎出来なかった。
こんなものを見られたら、昨日の悪夢から全て話す必要が出て来る上に、トラムからリヨを通じてモランにまで話が及ぶのは目に見えている。
「ほう…隠すとはいい度胸だ」
トラムの目がまるで獲物を見つけた獣のように物騒に光った。
「いや、これにはいろいろと深い訳が……！」
「問答無用！」
「うわ！？」
ほとんど本能的に逃げようとするのを、ひゅんと風を切る音と共に投げられたトラムの杖が足元に突き刺さって退路を塞ぐ。
たたらを踏んでそれを避けようとするところに、トラムの手が伸びてきた。
身体能力は明らかに相手が上だ。あっさりと捕まったソファルは、そのままトラムに袖を捲くられた。
「…なんだ、これは」
見るからに普通ではつきようのない痣に、トラムの声に険が混じる。
「――　詳しく聞かせてもらおうか？」
ドスのきいた口調とは裏腹の爽やかな笑顔に、ソファルはもはや逃げられぬと覚悟を決めた。

第九章　奇行

「…という事なんだけど」
場所をソファルの私室に移し、昨夜の夢から手の痣がついた経緯までを話すと、トラムはなるほどな、と呟いた。
まじまじとソファルの手首を眺め、顔を顰める。
「どうみても手形だよなあ…昨日の警備はどうなってんだ」
「トラムは侵入者がこれをやったって思うのか？」
「それが一番現実的だろ。夢が現実にまで影響を残すなんて聞いた事もねえ」
「…それはそうだけど」
だが、本当に侵入者がこれをやったとして、その意図がいまいちわからない。目覚めたソファルに気付かれずに、どうやって部屋を出たのかも謎だ。
国王であるソファルには、衛兵の中でも腕利きの者が警備についている。それ等の目を掻い潜れるとしたら相当の人物だ。
「でも…俺に危害を加えたいのなら、その場で襲ってると思うし。わざわざ痣をつけるって、何か意味深な気が……」
「――『罪を忘れるな』？」
「…そういう事なのかな」
直接は知らないが、ムージェンが《大災厄》以前に地上に対して非道の限りを尽くしたという話は知っている。
エラージュの姿を借りてまでソファルに忘れるなと告げたあれは、過去のムージェンに何か恨みがあるというのだろうか……。
トラムはため息をつくと、顔を曇らせるソファルの頭をくしゃりと撫でた。
「お前が生まれる前の事だ。直接関わってもない事に文句を言われる筋合いはねえよ」
「…うん」

こういう時、ソファルはトラムの存在のありがたさを感じる。
もはや即位し一国の主となった身では、子供の頃のように気軽には頼れないし、弱音も吐けない。
トラムも特別に甘やかすような事はしないが、いざという時は必ず味方になってくれる。それがどんなに心強いか。
「でも、俺はムージェンの国王だ。自分がやった事じゃなくても、この国の歴史に対して責任がある。…相手もきっと、そう思ってる」
手首の痣は、おそらくその意志の表れなのだ。
ソファルの言葉に、トラムは仕方がないなと言うように苦笑した。
「まったく…ただでさえ前途多難なのに、余計な面倒まで抱えやがって。どうせもてるなら厄介事(やっかいごと)じゃなくて女にもてろよ」
「うるさい。そういうトラムこそ、女癖少しは改めろよ」
確かにソファルは女性にもてた事はないが、まだ十五の上に、すでに国王となれば気軽な出会いなど期待出来るはずもない。
第一、ソファルはトラムの『来る者拒まず、去る者追わず』という態度もどうかと思うのだ。
「オレは女限定で博愛主義なだけだ。第一、今はうるさいアレがいないんだぞ？　鬼のいない間に羽を伸ばして何が悪い」
トラムはしゃあしゃあと言ってのける。
この点に関してのみ、ソファルはトラムの意見に全面的には同意出来そうになかった。
「ふーん…鬼、ねえ。…あ、言ってなかったけど、その『うるさいアレ』、近々帰って来るかもしれないから」
「ナニッ！？　な、なんで…あと一月は戻って来ないって、お前言ってたじゃねえか！」
『うるさいアレ』の効果は絶大で、トラムの顔はたちまち青ざめた。
大抵の事には動じないトラムが、どうしてそれをこれほど恐れるのかソファルにはいつも謎だ。
「その時とちょっと状況が変わったんだよ」

ディネア＝ドゥジニ――　それがトラムをして鬼と呼ばせる人物の名だ。
年はソファルの二歳上、トラムから見ると三歳年下の十七歳。ちなみに宰相モランの一人娘である。
現在は王都を動けないソファルとモランの代りに、母であるフィリーと共に地方へ出張中だ。
「…前から疑問だったんだけど、女限定で博愛主義なのに、なんでディネアだけ『鬼』扱いなんだよ？」
以前からの疑問をぶつけると、トラムはふ、と暗く笑った。
「…お前、あれがオレに恋愛感情を持ってると思うのか」
「――　…思わない」
トラムとディネア、そしてソファルは年齢が近い事もあり兄弟のように育った中だ。
だが、子供の頃は仲が良かった気がするのに、いつの頃からかトラムとディネアの中は険悪になっていた。
ディネアは女にだらしがない、とトラムを毛嫌いしているし、何かあると説教されるトラムはディネアを避けている始末だ。
「だろう。オレもあれが女なのはわかっているが、口説こうとは思わない」
「な、なるほど……」
わかるようでわからない説明に、ソファルはそれ以上聞く事は出来なかった。取りあえずこれ以上は突っ込まない方が良さそうだと判断し、ソファルは話題を変える事にした。
「ディネアとフィリー大叔母上には、こういう時だからこそ地方に留まって欲しかったんだけど…ルシカをレサイアに良い形で戻すには、二人に協力してもらった方がいいだろうってモランと話して決めたんだ」
「ルシカ…？　ああ、レサイアの姫様か。という事は断る事にしたんだな」
ある程度は予測していたのか、トラムは驚かなかった。

「それがいいとオレも思うぜ。あの姫様、ちょっと得体が知れないからな」
「…どういう意味だよ」
女性限定の博愛主義者とは思えない言葉に、ソファルは気色(けしき)ばむ。
確かにルシカは一般的な十歳の少女と比べると落ち着いているし、無表情で一度も笑顔らしきものを見せないが、直接知るはずのないトラムから『得体が知れない』とまで言われる筋合いはない。
ソファルの表情から失言だったと気付いたのか、トラムは慌てて口を開いた。
「怒るなよ。お前、あの姫様と何かあったのか？」
「…別に何もないけど」
ただ、何となく腹立たしかっただけだ。
「オレも理由なくこんな事言わねえって。…昨日、オレが離宮の不寝番だったのは知ってるだろ？　その時、見たんだよ」
「見た…？」
トラムの思わぬ言葉に、ソファルは何となく嫌な予感を感じた。
それはきっと、良くない事だ。
何となくそれ以上を聞くべきではない気がした。だが、それよりもトラムが何を見たのかの方がずっと気にかかった。
「見たって、何を？」
しかして、トラムは彼が昨夜見たままを語った。
「その姫様が夜中に一人で部屋を出て、さっきお前がいた庭からじっと王宮の方を見てたんだよ」
「……」
「結構長い事そうしてたぞ。声をかけるべきか悩んだが、何か思い詰めたような顔をしてたから見守るだけに留めたけどな」
「…そうか」
無意識にソファルは手首の痣に触れていた。
夜中にルシカは一体何の為に庭に出たというのだろう。
故郷を恋しがっていただけかもしれないし、何よりルシカはソフ

ァルより後に生まれているのだから《大災厄》前のムージェンとは無関係だ。
――けれど。
ソファルの直感は告げる。
ルシカには何かがある。言葉も話せず、文字も知らない――そんな彼女に何があるのかソファルにはわからないけれど。
だがソファルが悪夢に襲われていた可能性のある時分に、ルシカがそんな行動に出た事は何か意味があるように思われた。
「わかった。教えてくれてありがとう」
トラムに礼を言いながらも、ソファルは自分で自分に疑問を抱いた。
謎の行動といい、素性すらも定かではないというのに――何故かルシカを完全に疑いきれないのだ。
思い出すのは、闇を閉じ込めたような暗い瞳。
無表情の中、視線だけは真っ直ぐだった。心の奥底まで見通すようなその視線には、嘘を感じなかった。
（…その程度で、って言われそうだよな）
それでも何故か信じたかった。自分でもわからないから、そうしたい理由を説明する事は出来そうになかったけれど。

第十章　苦し紛れの秘策

使節団がムージェンを訪れて、二日目。
もてなす側の国主として、今日もやるべき事は山積みの予定だ。
今日の打ち合わせをするべく執務室に向かいながら、ソファルは昨日モランと交わした会話を思い返していた。
ルシカをレサイアへ戻すと言ったソファルに対し、予想していたのかモランは驚かなかった。
だが『出来るだけ良い形で』と付け加えると、当然ながら難しい顔をした。

＋　＋　＋

「それが難しい事を理解した上でそう仰っているのですか？」
突っ込まれるだろうとは思っていたが、モランの厳しさの滲む言葉にソファルも表情を引き締めた。
「もちろん、わかってるよ」
「…一つ間違えれば、あの方の一生を大きく狂わせかねないのですよ」
「でも、一方的に拒絶したらルシカの立場はもっと悪くなる。そうだろ？」
言いながら、ソファルはモランから視線を外さなかった。
宰相であるモランを味方につけなければ、ルシカとの約束を果すのは限りなく難しくなる。
はっきり言って、ソファルがモランを言葉だけで納得させるのは不可能だ。
人生においても、政の世界においても、モランの方が圧倒的に経験が上なのだから当然である。
ソファルが国王であっても、理に適っていなければモランは決し

て頷かない。だからこそ、国の要である宰相を担(にな)うのだ。
そんなモランを説得するには、自分を偽る事無く、正面からぶつかって行くしかない。
モランはソファルの言葉に、しばらく考え込むように沈黙し――
やがて、小さく吐息をつくと口を開いた。
「…そこまで仰るのでしたら、詳しく伺(うかが)いましょう。何か考えがおありなのでしょう？」
譲歩の言葉に、ソファルは思わず表情を綻(ほころ)ばせた。
状況はまったく改善されておらず、具体的な方策すら定まっていないが、モランという心強い味方を得た事で僅かながら可能性が見えてきた。
「考えって程じゃないけど…そもそも、今のムージェンには後宮ってものはないに等しいから、その事が理由に出来ないかと思うんだけど」
「まあ、確かにそうですね」
一応、この王宮にも王の妃達が住まう為の場所はある。かつての栄華を極めた時代の名残で、現在は閉じられて久しい。
正妃以外にも幾人もの妾妃を持つのが普通だった頃なら、今回のレサイアの申し出も当たり前のように受け入れられていたのかもしれない。
だが、今のムージェンには何人もの妃を養う経済力ははっきり言ってないし、ソファルもわざわざ廃れたものを復活させようとは思っていなかった。
「着眼点は悪くないかと思いますが…それでは正妃に、と言い出す可能性はありますな」
「うっ」
自分でも弱いと思っていた部分を容赦なく突っ込まれ、ソファルは返答に困った。
「…やっぱり、そう来るかな？」
「私がレサイアの皇帝で、ムージェンとの繋ぎをあくまでも求める

のならそうするでしょう。その場合、ルシカ様をレサイアへ戻すには、あの方のご身分を理由に拒絶するしか道はなくなります。…それは嫌なのでしょう？」
　長年の付き合い故の、心の内面を見透かしたような言葉に、ソファルは苦笑する。モランは何でもお見通しのようだ。
「うん…出来ればそれは避けたい」
　ルシカが正妃の子でないという理由は、ルシカ本人の資質とは無関係の上に周囲の理解を得られやすいのはわかっている。
　だが、それではソファルの知らない過去――　地上を支配していた頃のムージェンの行いと同じ。その時代を知らないからこそ、ソファルは身分を理由にするのは間違っていると思う。
　生まれた場所、両親の身分で人を括る――　それは国を平らかに治めるには、王政を敷く以上、ある程度は必要な事だと理解しているけれども。
「ならば、別に正妃候補となる人物が最低必要となるかと」
「う……」
　ルシカの身分を理由とせずに相手を納得させるとなると、確かに言葉だけでは無理に違いなかった。
　ソファルに正妃以外を娶る意志がない証に、実際にそのような相手がいる事を示さねばならないだろう。
「レサイアの息女を退けるだけの女性となると、ある程度の身分は必要となるでしょう。…そうなるとかなり限られてきますな」
「…うーん……もしかして、やっぱりかなり難しい？」
「もしかしなくても難しいです」
　気休めを口にしないモランの言葉に、ソファルはがくりと肩を落とした。
　有り得ない事だが、こんな風にソファルが困る事をわかってルシカを差し向けたのだとしたら、レサイアという国はとんでもない国だ。
「最初にお聞きすべきだったのかもしれませんが、何故そんなにも

ルシカ様の事を気にかけなさいますか。直接会って情でも沸きましたか？」
「情って…確かに最初は単に可哀想って意識があったけど……」
モランの言いたい事もわかる。自分の行動は、きっと不自然に見える事だろう。
そもそも、レサイアの方が一方的に持ってきた話だ。
ムージェンの現実を考えても、ルシカの年齢を考えても、本人の意志などないのは話さずともわかりきっている。
それでも直接会ってみたいと思ったのは――　きっと、最初に見た時の印象のせいだ。
「…何だか、当たり前のように受け入れているように思えたんだ」
物のように見知らぬ土地へとやられる事も、その結果歓迎されないであろう事も。
弱冠十歳にして全てを諦めたかのように見えたルシカの、本心が知りたいと思った。
多分、あの時にルシカが年相応に泣いてたり怯えていたりしてたら、そこまでの興味を持ったかもわからない。
「単に流されているだけなら、可哀想だと同情はしても、普通に断っていたと思う。でも…」
「違っていたと？」
思い出すのは、ソファルに向かって最高の敬意を示してみせたルシカの姿。
「ルシカにはレサイアの皇帝の血を引く者としての自覚がある。ただの可哀想な子供じゃない。ルシカは『レサイアの息女』だ。…なら、俺はムージェンの国王として、それに恥じない誠意を示したいと思ったんだ」
そしてルシカは、ソファルに『レサイアに帰りたい』と意志を示した。彼女の命運を握る自分には、その意志を尊重する義務があると思った。
「ルシカがもし、いろいろ納得した上でムージェンにいたいって言

ったら受け入れてもいいかと思った。…正直、妾妃とかそういうのはまだ考えられないけど、レサイアに帰る場所がないのなら、それしかないかなって」
「――　甘い上に考えなしの判断ですな。ある意味、傲慢(ごうまん)です」
「うん…自分でも思う」
モランの容赦ない言葉に、ソファルは苦笑する。
ムージェンに残る事がルシカにとって幸福であるのかも、わからないのに。
多分、自分の選択で誰かが不幸になる事が嫌なだけなのだ。それが避けようがないのなら、せめて自分の手の届く場所で起こって欲しいと思う。
――　不幸になるかどうかなんて、その時にならなければわからないけれど。
やがてモランは呆れたようにため息をついた。
「甘さを自覚しながら治そうとしない所は、父君にそっくりです」
「そうなのか？　じゃあ、これはきっと遺伝だ」
あはは、と他人事のように笑うソファルに、モランの冷たい視線が向けられる。
「…治す必要はありませんし、そんなあなただからこそ、皆が助けようと思うのは事実です。ですが、その甘さはご自身の首を絞めかねない事を理解して頂きたい」
「…はい……」
現に、後先考えない約束で自分の首を絞めつつあるソファルは、すぐさま笑顔を引っ込めた。
「致し方ありません…かくなる上は……ディネアに助力を求めましょう」
「ええ！？」
あからさまに苦肉の策と言わんばかりの言葉に、ソファルも飛び上がった。
「まさか…ディネアに正妃候補になってもらうって事…？」

「はい」
「そ、それは…あ、後が怖くないか？」
「…ですが、年齢的に釣りあいが取れて、ムージェンの王族の血を引いています。血筋的に見ても文句はつけられないでしょう」
「…言われてみれば確かに…いや、でも……」
モランの言葉は的確だったが、ソファルの顔色は蒼白だった。
そういう対象として考えた事もないばかりか、最初から対象外とみなしていた存在である。
「確かに最適な人選かもだけど…――　どうやって説得するの」
ソファルの問いかけに、流石のモランも言葉に詰まった。
心なしかこちらも顔色が悪い。実の父である上に、ムージェンの要である宰相ですら二の足を踏む人間、それはディネア＝ドゥジニ。
「この場限りの話という事で納得して貰うしかないでしょう。説得は…私がやりますので、ソファル様はご心配なく。取りあえず、早速帰還するよう手配致します。三日後の晩餐会までには戻れるでしょう」
「う、うん…頼む……」
何処となく悲壮感が漂う宰相に、ソファルは心の中で手を合わせた。

＋　＋　＋

（…本当になんとかなるのかな……）
ディネアは決して人の意見に耳を傾けない人間ではないが――こと、結婚問題になると、過剰反応をする人物である。
一応お年頃なのだが、本人は一生結婚はしないと公言して憚（はばか）らない。
父親のモランも、母親のフィリーも、その辺りは本人の意志を尊重する事にしたのか、それとも触らぬ神に…とばかりに傍観（ぼうかん）を決め込んだのか、何も言わないらしい。

モランに言われて初めて気付いたというのも間抜けな話だが、確かにディネアとソファルの間柄は、普通に考えるとこれ以上はない良縁な気がする。今までそういう話にならなかった事の方が不思議だ。

ソファルもディネアが嫌いではない。トラムを兄のように思っているように、ディネアを姉のように思っている。

――　近すぎて、裏も表も知っているから、恋愛対象にはなりそうにないけれども。

おそらく、逆にディネアもソファルを弟のように見ているだろう。これは断言出来る。

ソファルが知る限りで、ディネアと対等にやり合えるのはトラム位だ。

顔を合わせれば一触即発だが、何だかんだとトラムは負けていない。これがソファルなら言葉の拳で即時に撃沈だ。

そんなディネア相手に、モランは説得は任せろと言ってくれたが…内容が内容だけに、ディネアが応じてくれるか怪しい。

本当に秘策と言うよりは、苦肉の策という言葉が適しているような状況だ。

ソファルは長袖に包まれた手首に視線を走らせた。

そんな時にさらに考える事が増えてしまった。口止めをするだけ無駄だと諦めたので、おそらくすでにモランの耳には簡単な報告のような形で届いているだろう。

こちらは自分の行いのせいではないが、詳細がはっきりしない分、性質が悪そうである。モランにはさらに心労をかけそうだ。

（あー…なんだかなー…）

トラムではないが、どうせもてるのなら本当に厄介事ではないものにもてたいものだ。

――　レサイアの使節団が帰還するまで、あと四日。

何事も起こらない事を祈りつつ、だがおそらく何らかの出来事が起こるであろう予感を感じ、ソファルは重いため息をつくのだった。

第十一章　悪夢再来

二日目も、通常の仕事と使節団が来た事によって増えた仕事をこなしている間に、文字通りあっと言う間に終わった。

一日の流れがこれほど早く感じたのは初めてだった。それも、楽しくてではなく、目が回りそうに忙しくて、でだ。

これまで、机に向かい続けるのをソファルは苦手に思っていた。

だがこの一日で、腹に一物もニ物も抱えているような人間相手に、笑顔を絶やさず歓談する方が余程疲れるものである事を知った気がする。…出来れば一生知らずにいたかった。

（…あと三日…耐えろ、俺）

今夜は使節団の中でも位が高い人々と、共に夕食を囲む機会があった。

レサイアの食文化がどれほどのものか知らないが、幸いムージェンには歴史だけはある。当時のものそのままは無理だが、その頃に開発された調理法は健在だ。

何より、食材の鮮度には自信がある（何故なら、どれも王宮の裏の畑や山で取れたものを、農夫やら猟師が直接持って来てくれているからだ）。

いつも以上に趣向を凝らして食事を準備してくれた料理人のお陰もあって、レサイアの使節団の人々から賞賛の言葉を貰った。…もっとも、本心が読めないのでその言葉は表向きだけなのかもしれないが。

いつも以上の豪華な食事にソファルも驚いたが、そんな状況では味わうだけの余裕があるはずもない。

交わされた内容はと言えば、ソファルの知らない地上の現状を背景にした経済やら流通やら、どこそこの某が何かを発見したがその利権関係を巡って問題がとか、某国と某国の間が緊迫しているとか――　最初から最後まで政治一色のものだった。

未来の国王として即位までに相応の事は学んできたが、それが好きかというのは別問題である。
結果として、込み入った内容に関してはモランに任せ、わかる範囲で受け答えする事となった。
中心になって会話を進めるのは使節団の最高責任者で、初日に代表として口上を述べた人物。名をアルノーン＝パラバ。
レサイアにおいては皇帝の補佐官の一人として働いているが、元々は歴史学者だったらしい。
アルノーンは以前からムージェンに来たいと思っていたそうで、自ら使節団に志願したと言う。
昔から戦乱が絶えず、国が興(おこ)っては滅んでいた地上にはないもの――歴史と伝統がこのムージェンにあるからだろう。
アルノーンから感情を見せない目を向けられ、話を振られる度に、ソファルは居心地の悪さを感じた。
その視線が言葉にせずともソファルの未熟さを嘲笑(あざわら)っていた。
年若く経験の乏(あなど)しい国王と侮る気持ちはわからなくもないが、すぐさま立派な王になれるのなら誰も苦労はない。
これから先、レサイアを筆頭に地上の国々との国交を再開するならば、今後このような事は幾度となく繰り返されるのだろう。
ソファルは今の自分に最も足りないものが、あらゆる意味での『経験』である事を理解している。
それがわかっているから、ソファルはその場に居続ける事を望んだ。この程度で逃げては、他国と渡り合えはしないと思ったからだ。
逆に考えれば、父である前王は大災厄によって滅びかけたムージェン国内だけに目を向ければ良かった訳で、そういう意味では苦労はなかっただろう。
その代わり、自分の目の前で国民が次々に命を落とす姿を見続けた。どちらが良いのかと問われたら、ソファルは今の自分の方が恵まれていると思う。
目に見えず、対抗する手段も手探りの病を相手にするより、目の

前の人間を相手にする方が対処を選べるだけ良い気がするのだ。
だからソファルは無条件に父であるルフトを尊敬しているし、だからこそ弱音は吐けない。
…四日目の夜には使節団全員を相手に晩餐会が催される予定だ。
それが終われば、翌日には彼等はレサイアへと帰還する。
――せめてそれまでは。
だが、それでも慣れない事の連続による精神的疲労が減る訳ではない。
自室に戻るや、寝台の上にばたりと倒れた姿には、一国の王としての威厳など欠片もなかった。
敷布からは安眠を誘う香草の香りが微かに漂う。
その優しい香りにつられ、ソファルは着替えるのも忘れて、そのまま夢の世界に旅立っていた。

＋　＋　＋

周囲は夕暮れのような赤で染まっていた。
…いや、実際にそれは夕暮れだったのだろう。大地と空の境目に赤い光を放つ太陽が見えた。
（なんだ、ここ…？）
それはソファルの知る大地ではなかった。
荒涼とした大地が延々と広がり、草木もまばらなそこに、何かが焦げたようなきな臭い臭いが漂う。
――戦場だ。
戦場など知るはずもないのにそう思ったのは、ぐるりと見回した大地の上に数え切れない数の人間が転がっていたからだ。
すでに息絶えているのか、どれもぴくりとも動かない。
ある者は剣を身体から生やし、ある者は首や手足を失っている。
そんな凄惨（せいさん）な有様を前にしているのに、不思議と恐怖は抱かなかった。

心が麻痺(まひ)したかのように、ただじっと魅入られるようにその光景を眺(なが)める。

「――　よく見るがいい、ムージェンの王」

不意に背後から聞き覚えのない声がして、ソファルは反射的に振り返えり――　そこに立っていた人物を目にして息を飲んだ。

人物と表現したのは、それが頭部と手足を持っていたからで、実際は人とは到底言えない姿だった。

頭から足の先まで全て黒で塗りつぶされた――　影そのもの。

「お前は……？」

「名乗る名など我にはない」

影はにべもなく答えると、その手を持ち上げて空を指し示した。釣られるように視線を向け、ソファルは目を見開く。

天高きその場所に、不可解なものが見えた。自然現象を凌駕(りょうが)し天に浮く、巨大な大地――。

そんな物はこの世界に一つしかない。

「…ムージェン……？」

「そう、あれこそが神に選ばれた民の地」

影は吐き捨てるように答える。まるでその言葉が汚らわしいものだと思っているかのように。

ムージェンに生まれ育ったソファルは、一度も地上に降りた事はなく、当然ながら地上からムージェンがどのように見えるのか知らない。

ソファルが知るのは、一度は滅びかけながらも、少しずつ緑が甦りつつある美しい大地の姿だけ。

だが――　今、目にしているのは、それとはまったく別の姿だった。

おそらくそれもまた、ムージェンの姿。

地上から見えるのはムージェンの大地を支える基となる部分。

無骨な巨石が絡まり合い、部分的に突出しているようなそれは、大陸と言うよりはまるで宙に浮かぶ要塞のようだった。
「…我が故国は、『天の裁き』に滅ぼされた」
「え…？」
影の言葉に我に返り、再びそちらに顔を向けると、いつの間にか影は至近距離に立っていた。
すぐにも触れられるような位置で、影は繰り返す。
「ムージェンに、滅ぼされた」
その瞬間、ソファルの脳裏に昨夜の夢が思い起こされた。
母の姿を使い、手首に痣（あざ）を刻んだ者と、目の前の影が頭の中で重なり合う。
「それで…『忘れるな』って言うのか？」
無意識に昨夜掴まれた手首に触れながら、確信を込めて問えば、影が声もなく笑った気配がした。
「――　否」
否定の言葉と共に、信じがたい速さで影の手が伸びた。今度は手首ではなく、首へ――。
「！？」
意図を察し、振り払おうとしても間に合わない。そのまま温度のない手に首を絞められる。
「く…ぁ……っ」
「忘却は最大の罪なれど、それでは罪は雪（そそ）がれぬ。死者は戻らず、故国も還らない。――　なれば」
ぎりぎりと容赦なく力が込められ、夢の中だと言うのに耳鳴りがして、意識が遠のく。
果たして本当にこれは夢なのかと思いながらも、ソファルは影の言葉を聞く。影の言葉は静かに、けれども奇妙な熱を帯びてソファルの耳に届いた。
「なれば――　滅び、絶えろムージェン。…我が国のように」

第十二章　月明かりの庭

ソファルが眠りに就いた頃、トラムは今日も離宮に詰めていた。
前夜が不寝番（ふしんばん）だった為、今日は元々休息日だったのだが、昨夜の事が気になって同僚に交代してもらったのだ。
（…もし、使節団に刺客がいるのなら何処からか外へ出ているはずだ）
刺客である以上、正面玄関からばか正直に出るはずもないと思うが、昨夜はそれらしい動きはなかったし、他の同僚にもそれとなく聞いた限りでは異変らしき事はなかったようだ。
いくらトラムが人より感覚が鋭かろうとも、それなりに広い離宮の全てを把握は出来ない。それはわかっているが――。
思い出すのは、ソファルの手首に残された痣（あざ）。
あれが人の手によって為されたものであって欲しいと思う自分がいる。
相手が人なら、どんな相手だろうと恐れる事はない。この自分の手でソファルを守ればいい。だが……。
（超常現象相手じゃ、オレに出来る事なんて何もねえからな……）
幼い頃に聞いた寝物語の悪い魔女や魔法使いが人を呪うような話を、トラムは今までは作り話でしかないと思ってきた。
ムージェンには異能の力を生業にした人間がほとんどいない。
数少ないその例外が地上へ《道》を渡す人々――　渡し守とも呼ばれる――　だが、それも今となっては一握り。
その能力は遺伝するらしく、大抵は親から子が受け継がれるようだが、道を渡す事以外に能力を使えるという話は聞いた事がないから、調べてもおそらく役立つような情報は出てこないだろう。
――　対して地上はムージェンより広い。
元々、三つの大陸には大小様々な民族が存在していた。繰り返された戦乱の果てに四つに統合された今も、その中に異能を使う民族

がいる可能性はある。
数々の国が滅んだ背景に、暗殺や毒殺の他、それこそ呪いによって人を殺すような事が隠れている事も有り得るのだ。
もし実在するのなら、ソファルの腕に夢を介して痣を刻めるような人物がいても、何ら不思議ではない。
にも関わらず、その人物が使節団に紛れ込んでいるのだとしても、こちらからはわからない上に、対抗する手段すらない事が痛かった。
（何かあってからじゃ遅いってのに……）
後手にしか回れない自分に、トラムは歯噛みする。
ソファルの部屋の周囲を今夜担当するのは、トラムの先輩に当たる人々だ。その中心となる人物は腕も一流だし、非常に真面目な人だけに信頼出来る。
事情が事情だけに詳細は語れないながらも、その人にだけは離宮へ詰める前にいつも以上に警戒してもらうように頼んできた。
自分が直接警備する事も考えたが、動きがあるとしたら王宮よりもこの離宮だ。小さな物音一つ聞き逃すまいと、トラムは心と耳を澄ます。
夜も更け、早い者はすでに寝ている時分。離宮内はしんと静まり返っている。
百人もの人間がいれば多少は騒がしいだろうに、この静けさはかえって不気味でもあった。
――　まるで獣が息を潜（ひそ）めて機会を窺（うかが）っているかのようで。
ムージェンの不寝番はその役目から、半刻単位で配置が換わる。
長時間同じ場所に何もせずに控えているのは、緊張を保てずに気が緩むし、何より疲れる。
軽い気晴らしと小まめに場所を移動する事で、うっかり寝てしまうような事も防ぐ、一石二鳥の方法だ。
幾度目かの移動を経た頃、ついに動きがあった。
場所は最上階、レサイアから来た妾妃候補――　ルシカの部屋。
まるでトラムがその場所に来る事を予測していたかのように、ト

ラムが最上階へ移動して間もなくの事だった。
音もなく扉が開き、そこから夜着姿の少女が姿を現す。飾り気のない白い夜着と灰色の髪は、夜の闇に浮いて見えた。
（今夜もか……）
不寝番がいる事はすでに気付いているだろう。
その目につく事を恐れる様子もなく、足元を照らす灯りもないのに、ルシカは迷いのない足取りで廊下を進み、階段を下りてゆく。
その後を追いつつ、トラムは目の前を進む少女に対する疑惑を深める。
一晩ならばさておき、連夜離宮を抜け出すとなると、疑わずにいる方が難しい。何らかの意図があると考えるのが普通だ。
そのまま呼び止め詰問（きつもん）したいが、相手は幼くとも客人、しかも王族に連なる人物だ。幼馴染で、兄弟のように育ったソファル相手とは勝手が違う。
結局、その行動を見守るより出来る事は他になく、トラムはその小さな背を追いかけた。

＋　＋　＋

空には僅かに欠けた月。
青白い月明かりの下、ルシカは昨夜と同じように庭へと向かった。
その姿を近くの木陰から様子を見つつ、トラムは手にした杖を握り締める。
使うような事はおそらくないだろうが、何か不審な行動を取るようなら、場合によってはそれを使う機会があるかもしれない。
出来ればそんな事態にならなければいいが――　そんな事を考えつつ、ルシカの動向を見守った。
ルシカは見られている事に気付いているのかいないのか、離宮と王宮の中間辺りに辿り着くと足を止める。
昨夜はじっとそこから王宮を見つめていたが、今夜は王宮に目を

向けた後に離宮の方へ視線を向ける様子が見えた。
（…何かあるのか？）
ルシカの視線を追うように離宮に目を向けるが、いくつかまだ起きているらしい部屋の明かりが見えるだけで、特に変わったものが見えている訳ではない。
（何なんだ）
首を傾げながら視線を戻すと、ルシカが月を仰(あお)ぐように顔を持ち上げる所だった。
――一瞬、その目がトラムを射た。
可能な限り気配を絶ったつもりだっただけに、トラムは驚く。普通の少女なら気付くはずもない。
すぐに反らされた視線に気のせいかと思ったが、トラムの勘は告げる。確かに今、ルシカは自分を認識していたのだと。
不寝番の目を気にしていなかったくらいだ。後を追って来る事くらいは予測の内だとしても、一度意識して気配を絶って身を隠した自分を迷う事なく見るなど、偶然出来るような事でもない。
果たして最初からそこにいると気付いていたのか、それとも本当に偶然気付いただけなのか――　どちらかわからない。
だが気付いてなお、ルシカはトラムの存在を気にせず、その腕を持ち上げ、天に掲(かか)げた。
掌(てのひら)を上にしたその姿は、まるで月の光を受けようとしているかのようにも見える。
（何を……）
――　けれど異変はその時すでに始まっていた。
穏やかに凪(な)いでいた風が、少しずつ強まってゆく。
（風が――？）
最初は庭の花々を軽く揺らす程度のそれは、トラムの目の前で強さを増し、やがて梢を揺らすほどになる。
ざわざわと音を立て、葉を揺らす木を見上げ、トラムは信じられない思いで再びルシカに視線を戻した。

薄い布地の夜着が強まった風を受けてはためく。
肩の下辺りで切りそろえた髪が風に乱されるのを気にした様子もなく、ルシカは手を掲げたままそこに立っていた。
…否。
風が、ルシカを中心に生まれているのだ。
まるで糸を縒(よ)り上げるように風は徐々に強さを増し――　やがて天に掲げた掌に、青白い燐光(りんこう)を纏(まと)った何かが姿を現した。
（…！　あれは？）
それは――　一羽の鳥。
ルシカの小さな掌に乗るほどのそれは、夜の闇の中、風を切り裂くような高音で一声鳴くと、その翼を広げて夜空へと舞い上がった。

第十三章　呪詛

天へと舞い上がった小鳥はたちまち夜闇に紛れる。それと同時に風も凪ぎ、再び穏やかな風がその場に満ちた。

その一部始終を見届けたトラムは、姿を隠していた木立から足を踏み出していた。

目の前には、まるでトラムが姿を見せるのを待っていたかのように佇む少女――　ルシカ。

トラムの目にはもはや、その人物はただの妾妃候補でも無力な少女でもなかった。

その目前にまで歩み寄り、その杖の先をぴたりとその咽喉元に突きつける。

「――　何をした？」

おそらく、普通の少女ならその時点で怯えて泣き出すであろう状況ながら、ルシカは表情一つ変えなかった。

ただ真っ直ぐに、その闇を閉じ込めたような目でトラムを見つめるばかり。

「まさか、あんたが――」

――　ソファルに危害を与えたのか？

言葉の後半は声にならずにトラムの口の中で消えた。その言葉を封じるように、ルシカがその手を持ち上げたのだ。

つい先程目の前で起こった情景を思い出し、反射的に杖を戻し距離を取る。

だが、攻撃してくるのかと思いきや、ルシカはそうしなかった。ただ、無言のまま、王宮の方へ指先を向ける。

釣られるようにその指先に視線を向け――　その方向に何があるのかを悟った瞬間、トラムは表情を強張らせた。

指差したのは王宮の最上階。そこは王族が生活する場所として充てられている。

王妃エラージュ亡き今、ソファルが一人そこにいる。正に今この時も、そこにいて眠りに就いているはずだ。
その時トラムは、ルシカの声にならない『言葉』を聞いた。

『――　タスケテ』

その『言葉』を認識した瞬間、トラムの脳裏に映像が浮かんだ。
寝台に横たわるソファルと、まるでその上に覆いかぶさるような影のようなものを。
「…ソファル！？」
それが目の前の少女が見せる幻である可能性もあった。けれどトラムの直感は、その可能性を否定する。
ルシカを置き去りにして、弾かれたように駆け出したトラムの背を見送り、ルシカは再びその目を王宮へと向ける。
闇に沈んだ王宮に、一見変化らしいものは見えない。けれどルシカの目には見えていた。
今まさに、ソファルが死地にある事が――。

＋　＋　＋

滅び、絶えろムージェン――　その言葉を耳にした瞬間、ソファルの胸に湧き上がったのは純粋な怒りだった。
「…冗…談……っ」
過去のムージェンの行いは、確かに多くの人命を奪い、苦しめたのかもしれない。
被害を受けた者がそれを罪だと言う限り、ムージェンを受け継いだソファルには、彼等の怒りと哀しみに対して応える義務があるとも思う。
だが――　それはソファルが払うべきものであって、『ムージェン』が払うべきものではない。

「滅ぼさせ…るものか……！」
――《大災厄》によって、たくさんの民が失われ、大地も荒れ果てた。
それから十五年以上の月日をかけて、ムージェンは少しずつ復興の道を歩いてきたのだ。
決して楽な道ではなかったはずだ。その道半ばで倒れた父と、それに代わって守り導いた母の苦労、そしてそれに応えた民達をソファルは誇りに思う。
責任を取れと言うのなら、その怒りを向けるべきは王である自分だ。今、ムージェンで必死に日々を生きている人々まで含まれていはずがない。
綺麗事なのはわかっている。青臭い正義だと言われても仕方ない。それでも民を守る事が『国王』の第一の仕事だと思うから。
（だから…そんな事、認めない……！）
夕暮れの光だけでなく、窒息間際で赤く染まった視界の中、ソファルは影を睨みつける。
ムージェンの汚れなき空の色が、影の姿を真正面から捉えた。その刹那、影が気圧されたようにその手の力を緩める。
その僅かな隙に、ソファルは渾身の力を込めて影の胴へ攻撃を仕掛け――突然、呼吸が楽になった。
「…？」
影はまだ目の前にいる。だが、その腕が二本ともいかなる理由でか消失していた。
急に取り戻した呼吸にゴホゴホと噎せながら、ソファルは距離を取る。影は呆然としているように微動だにしない。
「――ばかな……」
やがて影が信じられないといった調子で呟いた。
（なんだ…？）
状況が読めず、ソファルはただ影を注視する。
特別な事は何もなかったと思う。ソファルの攻撃は実行に移す前

だったし、やった事と言えばただ怒りを込めて睨みつけた事位だ。
「…貴様、何をした……？」
困惑と怒りを隠さない言葉が尋ねてくるが、それはソファルこそが聞きたい事だ。
両の腕を失いながらも、痛みを感じてはいないのか、紡がれる言葉に苦痛はなかった。見た目通り、実体ではないのかもしれない。
実体ではないのに、首を絞める事は可能というその無茶苦茶さに、ソファルは少し理不尽な気持ちになった。
「知るか……。そっちこそ…コホッ、人の首、いきなり絞めるなよな！」
突然降って沸いた災難を前に、普通は怯えたり半狂乱になったりするのかもしれないが、幸か不幸かソファルはこんな時でも前向きだった。
すなわち――　開き直ったのである。
「人を何と思ってるんだ。首なんて絞めたら苦しいし、下手したら死ぬだろ！？」
生まれて十五年、超常現象とはまったく関わりのない人生だった。
確かに国王という肩書きが付き纏(まと)いはするが、生活も一般人と大して変わらないし、自分が特別偉いとも思っていない。
…生きる事に貪欲で素直な人々と、何一つ変わらない。
だからこそ、ソファルは怒る。そんな当たり前の権利を無理矢理奪おうとする者に対して。
「過去のムージェンが何やったか知らないのは、確かに勉強不足かもしれないけど、少しは話し合おうという考えはないのか！？」
ほぼその場の勢いで切った啖呵(たんか)に、影は呆気に取られたように沈黙する。
そもそも、話し合いで解決しようなどと考えるような相手なら、こんな手段でソファルを襲うはずもない。
冷静に考えればそれくらいわかるものだが、何かが吹っ切れてしまったソファルには見えていなかった。

「俺は逃げも隠れもしない。言いたい事があるなら、正々堂々言え！」
――　それはある意味、怖いモノ知らずの子供らしい発言で。けれど、それはだからこそ至極真っ当だった。
「…なるほど」
影は暗い声音で呟く。そこに籠もるのは、隠しようのない憎悪と嫌悪――。
「ではムージェンの国王よ。我等が正々堂々とその死を望んだなら、それを叶えるとでも？」
嘲笑(あざわら)うような言葉は、燃え滾(たぎ)るような怒りに満ちて。
――　ソファルの言葉は、影の逆鱗を逆撫でにしてしまっていた。
「出来もしない事をよくも言えたものだ…！！」
「！？」
その瞬間、影の肩の辺りがずるりと伸び、腕が再生する。その指をソファルに突きつけ、影は呪詛(じゅそ)を吐く。
「直接手を下すまでもない…呪われてあれ、ムージェンの王よ。我の呪いはすでに御身に宿りたり！」
「…！？　う、あ…あああ…っ！」
毒の籠もった言の葉が、意志を持っているかのようにソファルの胸を抉(えぐ)り、ソファルは絶叫した。
首を絞められた時よりも何倍もの苦痛が襲う。
耐え切れずに膝を突き、両手で身体を支える。その左腕――　痣が刻まれた手首から、黒い光が溢れ、腕を伝うようにじわじわと昇ってくる。
「天の祝福が真にその身にあるのなら、その死の毒を跳ね返してみせるがいい。その毒は我等が同胞の恨みよ……！」
「――…ッ！」
光が昇り進めてくる程に、苦しさは増す。
ふと、ソファルは思った。
生まれる前に死んでしまった父も――　もしかしたらこんな風に

殺されてしまったのだろうか？
苦しさで朦朧（もうろう）とする中、影の哄笑（こうしょう）だけが聞こえる。
このまま、誰にも知られずに死んでしまうのだろうか…そんな事を考えながら、ソファルは迫り来る黒い光をじっと見詰めた。

第十四章　光の鳥

ソファルは夢の中で死を覚悟していた。
左手首からじわじわと伸び進む黒い光は、すでに肩の辺りにまで到達している。
身体の芯から貫くような苦痛に、ソファルはもはや腕で支える事も出来ず、己の身体を抱くように地面に転がり、気を抜くと口から飛び出しそうな悲鳴を必死に噛み殺した。
そんな不様な姿を、影は見下ろしている。
表情どころか顔自体がないから、影が今の自分の姿にどう感じているかは判断がつかない。
ただ、影が自分の死を望む以上、今の状況を喜んでいるだろうと苦痛に苛(さいな)まれながらもぼんやり思う。
自分を殺そうとしているというのに、不思議と影に対しての憎しみは沸かない。ムージェンの滅びを求められた時はあれほど腹が立ったというのに。
幾度となく襲う苦痛の中、ソファルは天を仰(あお)いだ。
その目に飛び込むのは、地上を焼くような赤い空。そこにソファルはムージェンを包む青空を重ねる。
一日の終焉を告げるその赤が死を象徴しているのなら、その青はその反対――　生を象徴しているように思えて。
（もう一度、見たかったな……）
ただ、そう思っただけだった。けれど、その願いは思わぬ方向で叶う。

ゴオッ！

不意に突風が吹きつける。
驚いて目を丸くするソファルの目の前で、信じがたい光景が広が

りつつあった。
（――　空だ）
赤く染まった夕暮れを切り裂いて、そこには先程思い描いた青があった。
「…何……！？」
それが影の望んだ事でない証に、その声は隠しようのない動揺に満ちていた。
青空はたちまち夕暮れを押しのけるように広がって行く――　そして。

ばさ…っ

空を叩く羽音がしたかと思うと、その青空の裂け目から何かが舞い降りてきた。最初は小さかったそれは、たちまち大きくなりその全貌（ぜんぼう）を明らかにする。
――　それは燐光を放つ、光の鳥だった。
大きさはソファルとそう変わらない。巨大な鳥は庇（かば）うようにソファルと影の間に降り立つと、無造作にその片翼をばさりと振り上げた。
その羽から生み出された風は、いかなる威力を秘めていたのか、影を弾き飛ばそうとする。
「…何故、だ！　術は、完璧だったはず……！！」
言外に有り得ないと言いながら、影はその場に留まろうとする。だが、鳥は容赦（ようしゃ）しなかった。
今度は両の翼で力強く、大きく羽ばたく。
威力が二倍になった風に耐え切れず、影が紙切れのように宙に舞う。それでもなお、こちらへと手を伸ばそうとする影に対し、鳥の姿をしたそれは攻撃を仕掛けた。
光を帯びた弾丸と化し、一直線に飛んだそれは正確に胴を貫き、影の身体は弾け、千切れ飛ぶ。

止めとばかりに鳥の身体から光が放たれ、呪うような苦悶(くもん)の声をあげながら、影は光に焼き尽くされるように一片の欠片も残さず、ついに消え失せた。

その光景を、ソファルは呆然と眺めていた。いや、そうする事以外何も出来なかったのだ。

それほど、その攻防はごく僅かな時間で起こった。

後に残ったのは地面に転がるソファルと、それを見下ろす巨大な鳥、そして青空に切り裂かれた赤い空だけだ。

影が消えてしまったのと時を同じくして、その周辺に転がっていた骸の山も消え失せていた。

あれほど身体を苛んでいた苦痛は、いつの間にか消えて、腕に絡みつくような光も見えない。

まさに救いの神とも言える存在だが、ソファルにはその鳥が何処から来たのかもわからない。

よろよろと起き上がり、鳥と対峙(たいじ)する。

何か言わなければと思ったその時、ソファルは遠くから自分を呼ぶ声がするのを聞いた。聞き覚えのある声――　トラムだ。

そう認識した瞬間、赤い世界は砕け散った。

＋　＋　＋

静まり返った廊下をひた走り、トラムは最上階を目指す。

修練の賜物(たまもの)で足音こそほとんどしないが、内心の焦りは隠せない。

（急げ……！）

先程脳裏に映し出された光景がいつまでも離れない。

直感的にソファルに覆いかぶさっていた影のようなものが、『よくないもの』だと感じ取った。

どのようにしてルシカがトラムにその映像を見せたのか、そもそもルシカが何者なのかも不明だが、その点に関しては信じてよいとトラムは判断した。

もちろん、それが何らかの『罠』である可能性も消えてはいないけれども。
一息に登りつめた階段の先に、見慣れた顔の人物の姿。トラムの先輩であり、今日の護衛の責任者だ。
「…トラムか？　どうした、離宮で何かあったのか？」
本来なら離宮にいるはずのトラムが鬼気迫る様子で現れたからか、訝(いぶか)しげな声が投げかけられる。
その問いかけに対し、詳細に答える時間はない。トラムは口早に尋ねかけた。
「こっちに誰か、来ませんでしたか？」
「いや…誰も来てはいないし、誰も通していないが」
「そうですか…それなら、ちょっとの間、誰も通さないで下さい！」
「お、おい！　トラム！？」
声が背後から追いかけて来るが、それを無視してトラムは更に奥へ走った。
ソファルの部屋は最上階のほぼ中間にある。兄弟同様に育った彼には馴染みの場所だ。
だが――　ソファルの私室へと進めば進むほど、嫌な予感が湧き上がってはトラムの胸を焼いた。
…何かが、おかしい。
あるべきものが抜けているような違和感に心の中で首を傾げつつ、トラムは扉に手をかけた。
「ソファル、入るぞ！」
返事がないのを承知で、声をかけると同時に扉を押し開く。刹那、ひやりとした空気が駆け抜けた。
「…ソファル！？」
寝台に駆けつけると、その上でソファルは眠っていた。
先程見せられたような影の姿は何処にも見えないが、その代りにソファルが苦悶の表情を浮かべている。
ソファルの乱れた呼吸を耳にして、ようやく先程感じた違和感の

理由に気付く。
　これだけひどく魘(うな)されているのに、物音一つしなかったのだ。いくら扉や壁が厚くても限度がある。扉の前にまで来て聞こえないのはおかしい。
（…音を封じてたのか？）
　ソファルが苦痛の声をあげても、助けが来ないようにする為としか考えられない。
「くそ…っ、おい、ソファル！　起きろ！！」
　憎々しげ毒づき、トラムはソファルの肩を乱暴に揺さぶって覚醒を促(うなが)す。
　だが通常の眠りとは違うのか、いつもなら確実に目を覚ましているだろう刺激にも目を開かない。
　ソファルの額は汗に濡れ、髪が張り付いていた。きつく噛み締めているせいで、唇の端が僅(わず)かに切れている。
「ソファル、目を覚ませ！！」
　耳元で呼びかけるが、やはり反応はない。どれほどに深く夢に囚われているというのか――。
　ルシカは声なき声で助けろと言ったが、方法は教えなかった。
　武器を手に戦うならお手の物だが、何らかの術で目覚めない人間を起こす方法なんて知るはずもない。
（どうすりゃいいってんだ…！）
　途方に暮れた、その時。何かの気配を感じて、トラムははっと窓に目を向けた。
「あれは……」
　微かに差し込む月の光を帯びて、一羽の鳥がそこにいた。
　閉まっている窓をどうやってくぐり抜けたは不明だが、ルシカの手の上で生まれたそれが、そもそも普通の鳥であるはずもない。
　鳥は青ざめた燐光を振りまくように羽ばたくと、ふわりと飛び上がる。そして――。
　信じがたい速度で飛来したかと思うと、ソファルの身体へと吸い

込まれた。
　同時に二重写しのように、トラムの目に先程と同じ影のようなものがその身体の上に浮かび上がる。
　夜の闇よりもなお濃いその影が、まるでソファルの命を刈り取る死の使いのように見えた。
　そこから先の行動は、ほとんど無意識だった。
「離れやがれ…！」
　叫ぶと同時に、手にした杖を一閃する。空を切り裂いて、使い手次第では人すら殺せるそれが影をなぎ払った。
　――　手応えは、なかった。
　だが、影はソファルから弾き飛ばされ、壁にぶつかりそのまま霧散する。
　後に何一つ残さずに消えるのを確認するのもそこそこに、トラムは再びソファルの覚醒を試みた。
「ソファル！」
「…う……」
　影が消えたからか、それともトラムの声が届いたのか――　苦しげにうめきながら、ようやくソファルの目がうっすらと開く。
　明るい光の下では空の色そのものの瞳が、トラムの姿を捉えた。

第十五章　闇に潜む狂気

「トラ…ム……？」
離宮にいるはずのトラムが何故ここにいるのかわからずに見上げると、心底安堵したようにトラムは深く吐息を漏らす。
「目が覚めたか…」
まだ何処か苦しげな様子のソファルの為にか、トラムが明かりをつけ、水差しから水を汲んで差し出してくれる。
ソファルはのろのろと起き上がり、震える手でそれを受け取った。
「大丈夫か？」
「なんで…ここ、に……」
「説明はあとでいくらでもしてやる。取りあえずそれを飲め」
ソファルは素直にその言葉に従い、水を口にした。冷たい水が咽喉に沁み渡り、同時に意識がはっきりしてくる。
その時に袖がずれ、手首の痣（あざ）が顕になる。何気なくそれを確認したソファルは目を見開いた。
（――　痣が広がってる…）
昨日の朝目にした時は、一見手形のように見える程度だった。だが、それは目に見えて範囲が広がっていた。
果たして何処まで広がっているのか――　袖に隠れた部分にも広がっているであろう事は確かだ。
それがトラムの目に触れないように意識して隠しつつ、ソファルはトラムに向き合う。
「…起こしてくれてありがとう、助かった」
多分、まだ表情は強張っているだろう。言葉も自分で何処かぎこちなく感じた。
「また、夢か」
「うん…殺されかけた」
無意識に、手が心臓の辺りに動く。きっとトラムが起こしてくれ

なければ、痣から伸びた黒い光は自分の命を摘み取っていただろう。
一体何が夢の中で起こったのかトラムにはわかりようがないだろうが、現実感のない現象を何処まで説明していいのかソファルは悩んだ。
そんなソファルの内心を知るはずのないトラムは、何処となく不機嫌そうに言葉を漏らす。
「オレの手柄じゃない…礼なら姫様に言うんだな」
「姫様って…ルシカ？」
トラムがそう称するのは、知っている限りではルシカだけだ。そこでその名前が出て来るとは思わず、反射的に確認するとトラムは頷いた。
「ああ、オレにソファルを助けろって言ったんだよ。実際に声に出してじゃねえけど……」
「何でルシカが……」
「何故と聞かれても理由はわからねえよ。…あの姫様は只者じゃないぞ。少なくとも、普通の『姫』なんかじゃない。味方の振りをしている可能性もある。今回は感謝すべきだろうが…気を許すな」
ルシカが風を招き、鳥を作り出した事を目の当たりにしていないソファルに、その異常さがわかるはずもない。
ただ、トラムがここに駆けつけた背景に、ルシカが何らかの関わりを持っているのだと推測するばかりだ。
（ルシカが俺を…？　でもどうして俺が死に掛けているってわかったんだろう……）
考え込むように沈黙したソファルを、トラムは苦々しい思いで見つめる。
出来れば人を疑うような事はさせたくはなかったが、今回ばかりはソファルの生死にも関わる。次があった時、トラムが間に合う可能性は何処にもないのだ。
「…取りあえず今日は寝ろ。さっきの今じゃ眠りたくもないだろうが、あと三日あるんだ。体力だけでも温存しとけ」

「…うん……」
乱暴に寝かしつけられるままになりつつも、ソファルは何処か心あらずだった。死ぬかもしれないと思った時に、ソファルが目にした光景が忘れられないのだ。
（あの鳥は、何だったんだろう）
死を思ったその時に、天を切り裂くように現れた巨大な光の鳥。ソファルを庇うように広がった翼に跳ね飛ばされ、その光に焼かれ、影が消し飛んだ情景はまだはっきりと覚えている。
そんなソファルを怪訝そうに眺めていたトラムが、ふと思いついたように尋ねる。
「――　なあ、お前が殺されかけた夢に、鳥が出てこなかったか」
ルシカの手で生み出された鳥が、身体の中に入った事をソファルは知らない。何故それをトラムが知っているのかと素直に驚いた。
実際、鳥は出てきた。ソファルが考え込んでいたのも正にそれについてだ。
「…出てきたんだな」
まるで予想していたかのようなその言葉に、ソファルはトラムが何らかの事情を知っている事を確信する。
「あれが何か…知ってるのか？」
身を乗り出そうとするソファルを、トラムは答えずに腕一本で押さえつけ、掛け布を被せる。
「寝てろって。…知っているという程じゃない。例の姫様が作り出していたのを見ただけだ」
という事は、ルシカに命を救われたという事なのだろうか。
だが、初日に顔を合わせただけのルシカが自分を助けてくれるような理由が思いつけず――　何より、そんな事を出来る事が信じきれずにソファルは呆然と呟く。
「――　あれを、本当にルシカが……？」
「…いいから、取りあえず寝ろ。詳しい事は夜が明けてからだ。…一人が怖いなら特別に添い寝してやってもいいけどな？」

からかい半分にトラムが言って来るに及んで、ソファルははっと正気に返った。この年で添い寝されるなんて冗談ではない。
「平気だ、いらない。たとえ怖くてもそれだけはお断りだから」
「そこまで嫌がらなくてもいいじゃねえの？　昔は怪談を聞いた日には、ぴーぴー泣きながらオレにしがみ付いて寝てたくせに」
「いくつの時の話だよ！」
忘れてしまいたい幼い頃の恥ずかしい思い出を引っ張り出され、ソファルは赤面しながら反射的に叫び――　同時にそうやってソファルの気分を変えようとするトラムの気遣いに気付く。
「…大丈夫、もう何もない気がするし」
また影が襲う可能性は無きにしもあらずだが、ソファルは心の中で否定する。目の前で弾けとんだ影が、苦悶の声をあげたのを確かに聞いたのだ。
何の根拠もないが、何らかの痛手を相手が受けている気がした。
それにしても、今回はトラム（とルシカ）に助けられたようだが、この状況では明晩も何か起こる可能性が高い。
（何とかしないと……）
あと三日――　あと二晩。果たしてどれだけの事が出来るかわからなかったが、やれる事をやるしかないと、ソファルは自分に言い聞かせた。

＋　＋　＋

夜の闇に沈んだ部屋に、苦痛の声が響いた。
微かに漂った血の臭いで周囲に動揺が走るのを、男は視線だけで黙らせる。
「――　大事無い。術を壊されただけだ」
胸部を押さえつつ、乱暴に口から溢れた血を拭い、男は周囲に集う『同胞』達に報告する。
「ばかな…陣は完璧でしたのに」

「何故、途中で……？」
口々に紡がれる言葉には、信じられないという思いが籠もっている。
実際、男達は今日という日の為に念入りに準備をし、本懐を果さんとしていたし、それは不可能ではないはずだった。
複数の術者によって組まれた術の精度は最高水準のものに近く、簡単に退けられる類のものではない。
…にも関わらず、術者の中核を担った男は術を壊された事で膝をつき、半日かけて床に描かれた陣はその煽りを受けてすでに原型を留めていない。
「おのれ…未だ天はこの地を見捨ててはおらぬという事か……」
憎々しげに呟く声に、男は頭（かぶり）を振る。
「いや…今回の失敗は、術の綻びでも、天の守護とやらでもない」
「…では？」
「――　邪魔が入った」
「何…！？」
男の言葉にざわりと言葉の細波（さざなみ）が立つ。
「有り得ん！」
すぐさま上がった否定の言葉に周囲は同調する。
術者として、たとえその否定が己の未熟さを示す事になろうとも、己の術を越える者がいるとは信じたくないのだろう。
その気持ちは、同じ術者である男も痛いほどわかる。だが、直接関わった身ではその否定を認める訳には行かなかった。
「貴兄等の気持ちはわかるが、紛れもない事実だ。正体は知れないが、油断は出来ん。だが…いい。王族の滅亡で済ませなければよいだけの話よ」
何処か狂気の滲んだ言葉に、周囲は畏怖の籠もった視線を男に向けて来る。
「…では……」
男は頷く。

「――　かつてこの地を襲った《大災厄》を再現するのだ。同じようにとは行かずとも、今のムージェンならば致命的…その為の贄(にえ)もいる。…何を迷う事がある？」

男の言葉を否定する者は誰一人いない。この場にいる者は全てムージェンに恨みを持つ者ばかり。

それが成功した時にどれほどの犠牲を生むだろうと、彼等が躊躇(ちゅうちょ)するはずもなかった。

第十六章　願わくば平和を

「…ソファル様、そろそろお起き下さいな」
「ん…うー…」
聞き覚えのある声に、寝ぼけ眼(まなこ)を擦りつつ、ソファルはもそもそと上半身を起こした。
ソファルの予測が当たったのか、それとも別に理由があるのか、影の襲撃を受けずに朝を迎える事が出来たようだ。
その事にほっとしながら傍(かたわ)らに目を向けると、見慣れた姿が手を腰に当てて呆れた顔をして立っている。
「あれ…リヨ？　なんでここに……」
まだ何処か寝ぼけた様子のソファルに、リヨの眦(まなじり)が少しつり上がった。
「何で、じゃありませんよ。気疲れなさっておいででしょうけど、そろそろ起きて頂かないと朝食も片付きません」
ソファルの朝の弱さは今に始まった事ではないが、今日は限度を超えている。
一昨日の寝不足に加え、昨夜の出来事を引き摺ってやはり寝つきが悪かった事が響いた結果だが、事情を知らない身では寝坊が過ぎるとしか見えないに違いなかった。
「ご、ごめん…じゃなくて！　リヨはルシカ付きじゃ……？」
「ルシカ様はソファル様と違って、すでに起こされる前に起きていらっしゃいますよ」
ソファルの疑問に、リヨは澄ました顔できっぱりと言い放つ。何となく立つ瀬がなくて、ソファルは尋ねた事を後悔した。
ようやく眠気も覚め、何となく窓の外に目を向ければ、すでに太陽が結構な高さにまで昇っている。
――　多分、昼は過ぎていないだろうが、起こしてもらった事に感謝すべきなのだろう。

「それどころかルシカ様は着替えなども御自身でなさるし、正直あまりわたし達の仕事ってないんですよ」
「…そうなんだ」
寝台を降り、伸びをしつつリヨの言葉に耳を傾ける。
ソファルもほとんど手伝ってもらったりはしないが、それは母が『いつ何がどうなるかわからないのだから、自分の事くらい自分で出来なければ』という方針だったのと、些細（ささい）な事に人手を使うほどの余裕がなかったからだ。
ルシカは（実際の所は不明だが）大国の皇帝の血を引く身だし、年齢も年齢だ。身の回りの事が女官任せでも不思議ではないと思っていただけに、その報告は少し意外だった。
「…今朝、ルシカの様子はどうだった？」
本当は可能なら毎日でも顔を見せるべき所なのかもしれないが、昨日は結局忙殺されてそれどころではなかったのだ。
何より、昨夜のトラムから聞いた話が気になる。
出来るだけ不自然にならないように気をつけて尋ねたつもりだったのに、リヨはその目を丸くして首を傾げた。
「リヨ？」
「一回会っただけでそこまで仲良くなられたのですねえ。ちょっと意外でしたわ。それにしても、ソファル様が女の子の様子を気にするようになるなんて…何と言いますか、ちょっと嬉しいような寂しいような……」
「…は？」
――何となく話が思っていたのと違う方向を向いた気がする。
嫌な予感がしてリヨに目を向ければ、何だかものすごく楽しそうな顔をしていた。
「あの…リヨ？　仲良くという程じゃないって。一昨日挨拶したきりだし、その、一日放置したみたいで悪いなってそういう程度で」
「あらあら、照れなくてもよろしいのに」
「照れてないッ！」

（やっぱりそっちにいったかー！）
人をからかうネタと見ると、妙に生き生きし始めるリヨに心の中で頭を抱えつつ、ソファルはリヨから情報を引き出す事を諦めた。
何故女の人は、事が恋愛絡みになりそうになると、自分自身が関係がなくても燃え上がるのだろう――。
以前から薄々感じていた疑問だが、人生経験の浅い若輩者のソファルはもちろん、ムージェンを支える宰相ですら解けるか怪しかった。
理由や事情を説明すればリヨも茶化さずに、聞きたい事を答えてくれるのはわかっている。
だが、何となくリヨにまでルシカを疑わせるような事はさせたくなかった。ただでさえ、ルシカは使節団の中でも孤立化している印象があるのだ。
トラムはすでにルシカに疑いを抱いているし、モランもきっとレサイアの動向をルシカ込みで怪しんでいるだろう。
せめて一人くらいは、味方になってくれそうな人を側に置いてあげたかった。
もちろんいざとなればリヨも、敵と見なした相手に容赦しない事は理解しているけれども。
（――　当事者の俺が味方になる訳にも行かないだろうしなあ…）
つい昨夜だって死に掛けた身だ。
トラムの言葉を信じれば、ルシカは命の恩人となるはずだが――
そのトラムが警戒している上に、実際の状況を見た訳ではないから頭から信じる訳にも行かないだろう。
何より、昨夜も思ったがルシカが自分を助ける理由が思い当たらない。
リヨが別室で洗面具の用意をしている間、準備されていた服に着替えながら、ソファルは考える。そして着替え終わる頃には一つの結論が出ていた。
（…直接聞けばいいか）

――　考えてもわからなければ直接ぶつかればいい、という実に安直な結論だったが。
ルシカがトラムの言うように味方の振りをしていて、実際はソファルの命を狙っていたなら命知らずもいい所だ。
だが――　その一方で思う。
使節団が帰還するまであと三日。それまでに『誰か』が決着を求めるのなら、近日中に何らかの行動を起こすはず。
…事が起こるのを受身で待つだけでいいのか、と。
「そうそう、うっかり忘れる所でしたわ！」
ソファルが身支度を整えた事を確認し、退室しようとしていたリヨがふと思いついたように手を打った。
「わたしが起こしに来たのは、モラン様から伝言を頼まれたからなんですよ」
「モランから？　…そんな重要そうな事あっさり忘れないでよ、リヨ……」
「ほほほ…申し訳ありません。何でも地方に出ていらしたフィリー様とディネア様が今日の昼頃には帰還なさるとか？　…あら、あまり時間がありませんわね。急がれた方が――」
「フィリー大叔母上とディネアが？　そうか、わかっ…そういう事はもっと早く思い出そうよ！！！」
状況を知ったソファルはたちまち青ざめると、すぐさま別室に飛び込んだ。
そのまま手抜きとしか言い様のない様子で洗面等を終わらせると、その有様に呆れた目を向けるリヨを押しのける勢いで廊下へ出た。
「ソファル様、寝癖が！」
「後で直すッ！」
背後から追いかけて来たリヨの言葉に、振り返らないまま一言だけで返し、ソファルは食堂へと向かう。
別に差し迫った空腹を感じた訳ではない。ただ、ディネアが戻るとなれば、今後のんびり食事などしていられる気がしなかったから

だ。
精神衛生的な問題から、食欲がある内に食べられるだけは食べておいた方がいいに決まっている。
（…説得は戻ってからってモランが言ってたけど、絶っっ対にディネアは怒る、むしろ怒らない方が怖い……うう、胃がっ）
おそらく、当の説得役であるモランも同様に胃の痛みを抱えているに違いなかった。
果たして、鬼が出るか蛇が出るか――　。
ディネアを『鬼』と称したトラムを笑えない。今のソファルには、命を狙う輩よりも別の意味で切実に恐ろしい相手である。
妾妃を押し付けられるわ、得体が知れない相手に命を狙われるわ、何だか一生分のごたごたが一度に来ている気がしてならない。
だが、ディネアを何とか懐柔出来れば、その内の片方には一応片が付く…はずだ。
（…ああ…平和が欲しい……）
つい数日前なら考えもしなかったであろう事を考えつつ、ソファルはこれからモランと自分の上に降りかかるであろう嵐が、出来るだけ被害の少ないものである事を願わずにはいられなかった。
…そして何とか食事を詰め込んだ昼下がり。
緊張に胃を痛くするソファルとモランの元へ、彼等の代りに地方へと旅立っていた二人の帰還が告げられた。

第十七章　ディネア＝ドゥジニ

「ソファル、久し振りね！」
華やかな声と共に、執務室へ先に姿を見せたのはモランの妻であり、ソファルから見ると大叔母――　先々代の王の末の妹――　に当たるフィリーだった。
赤みの強い栗色の豊かな髪を緩く結い上げ、服装自体は飾り気のない旅装のままだったが、四十近いのにほとんど衰えない容色といい、相変わらず人目を引く人である。
派手な美貌で誤解されやすいが、フィリーはおっとりとした性格で、亡きエラージュとは親友の間柄だった。
その葡萄色の瞳が慈しむようにソファルを見つめる。だがその視線が何処かまじまじとしたものに変化し、何かと思った矢先にフィリーはその眉を顰(ひそ)めた。
「いやだわ、ソファル…あなた背が縮んだ？」
「！？」
「そんなはずないわよねえ…何だって一番の成長期のはずだし」
再会早々のとんでもない発言で、ただでさえ身長がちょっと伸び悩みな事を気にしていたソファルの顔から血の気が引いた。
あまりの衝撃に言葉が出てこないソファルに、モランが気の毒に思ったのか口を挟む。
「フィリー、帰還の挨拶より先にそれか？」
「あら、あなた。だって気になったんだもの」
悪びれた様子もなくその一言でまとめてしまうと、フィリーは姿勢を正すとソファルに対して一礼した。
「召集に応じまして、フィリー＝シリル＝ドゥジニ、只今帰還いたしました。陛下におかれましては、お変わりないようで何よりです」
フィリーの『陛下』という呼び名ではっと我に返り、ソファルも姿勢を正す。血筋をみれば親族でも、降嫁し、モランの妻となった

フィリーは臣下の扱いになる。
臣下として礼を示した大叔母に、ソファルは主君である国王として応えなければならない。
「地方での執務代行が恙無く進んでいるという報告は受けています。大叔母上もお変わりなくて何よりです」
…それでもつい、大叔母に対する敬語を使ってしまう辺りがソファルだった。
ソファルの返答にフィリーは少し苦笑してから頷く――　ぎりぎり『合格』という所だろうか。
「即位してすぐに地方回りに出てしまったから少し心配していたけれど、大丈夫そうね。ちゃんと王様らしい感じなってきたわよ」
「あ、ありがとうございます。ところで大叔母上、ディネアは何処に？　一緒に戻ってきたって話を聞いたんだけど……」
「ああ、あの子もちゃんと帰って来てるわよ。途中でトラムに遭遇してね」
「…うあ」
「早速ドンパチ始めちゃったから置いてきちゃったの」
「な、なるほど……」
よりにもよって、こんな時に――　ただでさえこれから怒らせる予定なのに、その前に喧嘩なんてやって来られた日にはどうなる事か。
（トラムの大ばかー！　なんで火に油を注ぐような事やってるんだー！！）
トラムに罪はない、むしろ被害者だと思いつつも、心の中で罵倒せずにいられないソファルだった。
自分の発言でソファルとモランの表情が強張った事に何か思う所があったのか、フィリーは笑顔で首を傾げる。
「…そう言えば、私だけじゃなくてディネアまでわざわざ呼び戻したのはどういう事かしら？　レサイアの使節から無理難題でも吹っかけられたの？」

まるでこちらの手の内を見透かしたような的確な言葉。
ソファルはこの大叔母が基本的に好きだが、この妙な鋭さだけは心臓に悪いと常々思う。
「それは…その……」
一体何処からどう説明していいのか悩む。だが、ここは一人でも味方が欲しい所だ。
モランと視線を交わし、互いに頷き合う。その為にフィリーにも戻って来て貰ったのだ。先に事情をフィリーに説明出来るのはおそらく好都合だろう。
「…実は――」
だが、そんな決意も次の瞬間に泡と化した。
バンッ！！　と激しい音と共に執務室の扉が荒々しく開いたと思うと、怒りも顕わな少女が、ドスドスと足音荒く入室してきたのだ。
「ソファル！　今日と言う今日は、あのろくでなしをとっとと解雇するよう求めるわ！！」
目を吊り上げ、頬を怒りで紅潮させて現れたのは、正に今回の中心人物となる人であった。
ディネア＝ドゥジニ――　トラムから『鬼』とまで言われた人物。
「ろ、ろくでなしって……」
「名前まで言う必要はないでしょ。この王城にそれらしい人間は一人しかいないじゃない」
ふ、と鼻先で笑うその姿は、何となく気軽に声をかけられないものがある。一体何があったと言うのか、ディネアは相当怒り狂っているようだ。
（トラムのあほー！　何言ったんだよ、これだけ怒らせて！！）
再び心の中で罵倒しつつ、ソファルは何とかディネアを宥めようと試(こころ)みた。
「え、えっと…後で詳しい事は聞くから、さ。…取りあえず、その、お帰りディネア」
しどろもどろの言葉に、ディネアはようやく現実に目を向ける気

になったらしく、居住まいを正した。
「…そうね、ごめんなさい。あまりにも腹立たしくて、つい自分を失くしちゃって」
冷静さを失くしていた事を恥じてか、気恥ずかしそうに俯く様子にほっとする。
少し癖のある赤毛に、飴色の瞳を持つディネアは母親に似て華のある容貌をしている。
しおらしくしていればおそらくもてるだろうに、その鉄火で率直な性格と口の悪さが魅力を半減しているとソファルは思う。
…思うが、命が惜しいので面と向かっては言えないし、言うつもりもない。
もっとも、一生結婚しないと言い切るくらいだから、もてる気もないに違いないのだが。
「国王陛下、そしてお父様、只今戻りました。今回は急の召喚でしたけど、一体何が？」
一気に核心を突いてくる辺りは、フィリーの鋭さを受け継いだに違いない。
「それは…」
「ソファル様、ここから先は私が」
説得は自分が、と言った責任からかモランが進み出る。
「ディネア、そしてフィリー…突然呼び戻したのは他でもない、ソファル様の結婚問題について少々厄介な事になったからだ」
「…結婚問題？」
その単語に嫌な予感を刺激されたのか、ディネアの眉間に皺が寄った。
「――　ソファルはまだ成人もしていないでしょ？　レサイアが婚姻を迫ったと言うの？」
「それより悪い。…レサイアは妾妃を『献上品』として送りつけてきた」
「何ですって！？」

「それじゃまるで物じゃないの。昔のムージェンだって、そこまでひどい事はしてなかったわよ」
　同じ女性として許せない扱いなのか、ディネアだけでなくフィリーも不快さを示す。
「…詳細は後で話すが、いろいろな事情からソファル様はルシカ様を――　妾妃として送られて来たレサイアのご息女の名前だが――　レサイアへ帰す事を決められた。そこでディネア、お前に頼みたい事がある」
　モランは詳細を省き、一息に本題に入る事を選んだ。嫌な事は先に済ませてしまえと思ったのかもしれない。
　いよいよだ――　ソファルもまた、拳を握った。
「私に？」
「――　ソファル様と、一時的に正妃として婚約を結んでもらいたいのだ」
「……」
　モランからその言葉が出た瞬間、確実にその場の体感気温が下がった。
　モランもソファルも、ディネアも無言になる。唯一、当事者ではないフィリーが、まるで無謀な勇者達を見るような視線でその様子を見守っている。
「…つまり」
　重苦しい沈黙の中、最初に口を開いたのはディネアだった。
「こういう事？　レサイアの姫を追い返す口実として、私とソファルが婚約して、『他の妻はいらない』って事を示そうって言うの…？」
　全てを語られずともそこまで察して見せたのは、流石にディネアだった。
　頭の回転の良さは父譲り。しかも弁も立つ。故に味方になれば、とても心強い存在なのだが――。
「いくら一時的なものと言っても、そんなの内輪だけの約束でしょ

？」
…だが、敵となると半端ない強敵となる。
冷え切った言葉には、トラムに対するような怒りの熱はないものの、逆に触れると切れそうな鋭さがあった。
「レサイアの使節団から地上にその話が持ち帰られ、それが地上の国々に広まる可能性を忘れていません？」
――　にっこりと、ディネアは微笑んだ。同時にソファルはぞくりと悪寒を感じて、顔を強張らせる。
（やばい、本気で怒ってる――！）
ディネアの言う通り、その可能性は高い。だが、ソファルもモランもあまりその事を深く考えてはいなかった。
ムージェンとレサイアの国交がこのまま絶える可能性の方が高く、それに伴って地上の他の国々と国交を結ぶ可能性も低くなると考えたからだ。
だが――　当事者であるディネアにとっては、そこまで気軽に考えられる事ではなかった。
「大体、それがこのムージェンに広まらないはずがないでしょ。ただでさえ悲しい事が続いて、民はおめでたい事を求めてるのよ？そんな状況でソファルが婚約なんて話になったら、一時的だなんて言い訳、誰も聞くはずがないじゃないの」
淡々とした言葉はまさにごもっともで、モランですら口を挟めない。ソファルに至っては言わずもがなだ。
ディネアは絶対零度の怒りに瞳を凍らせながら、二人へと問いかけた。
「期待している民を、ソファルもお父様も裏切る事が出来るの？」

第十八章　反省と決意

――　期待している民を、ソファルもお父様も裏切る事が出来るの？

（正論だよなあ……）

つい先程、ディネアに突きつけられた言葉を思い返し、ソファルは自分の考えの足りなさにため息をつく。

場所は庭園の外れ――　《大災厄》を生き延びた数少ない大樹にもたれつつ、ソファルは午後の執務に入るまでの短い休息を取っていた。

そこは小さな子供の頃から、ソファルが考え事をしたい時や一人になりたい時に選ぶ場所だった。

葉を空に広げた木陰は静かで、太い幹は王宮からソファルの姿を隠してくれる。決して隠している訳ではないが、何となくトラムにもディネアにも秘密の場所になっていた。

ディネアが言う事は、大筋で間違っていない。

より正確にするならば、めでたい事を求めていると言うより、これ以上悲しい出来事が増える事を望まないと表現すべきだろうけれども。

それだけ《大災厄》が齎（もたら）した傷跡は深刻で重い。十五年以上の歳月を経てすら、未だ癒えきらない大きな傷だ。

もうこれ以上は、と思うのは民だけではない。実際にその災厄を体験していないソファルもそう願っている。

ソファルの考えが足りなかった部分は、『一時的な婚約』を最大でも王宮だけで留められると思っていた事だ。

だが――　言われてみれば確かに、悪い噂ですら何処からともなく広まるのに、喜ばしい噂が広まらないはずもなかった。かと言って、事細かに事情を話す訳にも行かない。

前王であった父が、亡くなって十五年経つ今も人々に愛されている事を知っている。その忘れ形見であるソファルに父の姿を重ねている事も。
そんな自分が婚約となれば、人々はおそらく我が子に対するように喜ぶだろう。
ディネアの言う通り、盛り上がるだけ盛り上がった所に『婚約解消』なんて話を持ち出せば――　民はおそらく落胆するに違いなかった。
ソファルとディネアの関係が姉弟に限りなく近いものだなど、身近な者でもなければわからない事だし、そう説明した所でディネアの言うように『言い訳』にしかならない。
結局、ディネアを納得させる事が出来る言葉を思いつけず、かと言ってなかった事にも出来ず、困り果てていた所に助け舟を出したのは、見守る立場のフィリーだった。

＋　＋　＋

「…ディネア、あなたの言う事は間違っていないけれど、少しは違う見方を出来ないのかしら？」
よもやフィリーが口を挟むとは思わなかったのか、ディネアは驚いたように母親を振り返った。
「お母様、何が言いたいの？」
「ソファルも、お父様も、あなたがそんな風に怒るとわかっているのに、こんな事言い出すと思っているの」
「それは……」
フィリーの言葉に思う所があったのか、ディネアも言いよどむ。
「せめてもう少し詳細を聞いてはどう？　それでも意見が変わらないのであれば、その時はその時。別の方法を考える必要も出て来るでしょう？」
おっとりとした口調だが、その言葉はディネアの怒りを多少なり

と冷ます効果があったらしい。小さくため息をつくと、ディネアは渋々といった様子で頷く。
「わかったわ……」
だが、流石にディネアと言うべきか、すぐさま言い添える事を忘れなかった。
「――　その代わり、納得行くまで何がどうなってこうなったのか、きっちり聞かせてもらいますから」

＋　＋　＋

…その結果、説明はモランが行う事になった。
当事者である上、何より元凶である自覚のあるソファルもその場に残る事を望んだのだが、午後から本来の国王として仕事が控えている事を理由に、むしろ追い出されるように退席させられた。
結果として、僅かながらの時間の猶予（ゆうよ）を与えられたのだが――　。
…今頃はさながら、ドゥジニ家家族会議という状況となっているのだろうか。
（モラン、一人で大丈夫かな…）
ソファルは一人、モランの身を案じた。
フィリーがディネア側に回る事はあまり考えられないが、かと言って全面的にモランの味方になるとも思えない。
（どう説明しても、ディネアは納得しない気がする……）
やはり、正妃候補に丁度いいからと安易に決めるべきではなかったという事なのだろう。
わかっている。そもそも、これはソファルの我がままでしかない。
『ムージェン』には国許へ戻った後のルシカに対して、何らかの保障を与える必要はまったくないのだから。
ディネアを筆頭に、関わるであろう多くの人に迷惑をかけてまでやる事ではない。
おそらくモランもわかっていたはずだ。だが、それでもなおソフ

ァルの意志を尊重し、助力してくれようとしてくれたのだろう。
（俺、本当に考えなしだよなあ……）
国王としての自覚を持っているつもりでも、ふとした弾みにそれを忘れてしまう。『王の約束』が下手をすれば、国の未来を左右する事は、わかっていたはずなのに。
深く反省しながら、ソファルはどうしたものかと考え込んだ。

＋　＋　＋

「…さてと。ソファルに席を外してもらった所で、続きをやりましょう」
ドゥジニ家の者だけになった室内で、先程までの冷たい怒りを微かに漂わせつつも、ディネアはモランに向き直る。
「――　お父様…昔、言ってましたよね？　『誰よりも王に忠実である為に、これ以上の王族との血縁を求めない』と」
「ああ、そうだな」
娘の言葉にモランは苦笑する。
その言葉を口にしたのは確かディネアがかなり幼い頃で、しかもその時ディネアは別室にいたと思うのだが――　おそらく何処かで隠れて聞いたのだろう――　よく覚えていたものだと思う。
「…まさか、お前はその言葉を覚えていたから『一生結婚しない』などと言っているのか？」
思わぬ父の反撃に、ディネアは動揺した。
「そ、それとこれとは別よ。それより…その言葉を忘れた訳じゃないんでしょう？」
「もちろんだ」
「じゃあ、どうして……！」
「一番角を立てずに、ソファル様の希望を叶えるのに適した方法だったからだ。他に適当な人物が思い当たらなかったというのもある。お前が言うように、事が事だからな。一芝居打つにしても、『身内』

の方が事を運びやすいだろう？」
甘いとは言われるだろうが、モランとしては出来るだけソファルに『国王として決めた事』を遂行させてやりたかった。
早すぎる両親の死により年若くして一国を背負ったソファルにとって、事を動かした事が少しでも自信に繋がるならばと。
話を聞いた時点でこんな事になる事は十分考えられたし、ディネアの性格を考えれば手詰まりになる事も予測済みだ。
ルシカには申し訳ない事だが、結果的にこの挫折がソファルにとって良い糧になればとも思っていた。…国民感情の事を失念していたのは、明らかに自分の過失だが。
「芝居…ね。その言い草だと、最初から私がこの話を蹴ると思ってたでしょ」
ため息混じりの何処か拗ねたような言葉に、モランは表情を緩める。
「ひどいじゃない。私だけ悪役に仕立てて」
ディネアの思考回路くらいは当然把握している。伊達に血の繋がった父ではないのだ。
だがモランはすぐにその表情を曇らせた。
ディネアをわざと怒らせ、ソファルに諦める事を考えさせるまでは良かったが――　今はもはや、ルシカをレサイアに戻せば良いだけの話ではなくなりつつある。
「それは済まないと思っている。だが、お前があれ位言わなければ、ソファル様も諦めがつかないだろう。もっとも…今はまた事情が変わってきているんだが……」
「…どういう事？」
暗い父の表情に、ディネアは首を傾げる。
「何かあったの？」
「――　ソファル様は今、お命を狙われている」
「…！？」
あまりの事に、ディネアも、そして二人のやり取りを横で傍観し

ていたフィリーまでも青ざめ、息を飲む。
先程まで同じ部屋にいたソファルの様子を思い返しても、そんな深刻さなどまったく感じなかったが――　あのソファルの事だ。
それが事実だとすれば、おそらく変な風に開き直っているのだろうと、ディネアは長年の付き合いで判断した。
「食事に毒とか、襲われたとかしたの？　…警備の人間は何をしてるのよ」
つい先程激しく口論をした相手を思い浮かべつつ、一般的に思いつく手段を口にすれば、モランは渋い顔のまま首を横に振る。
「私も具体的な事はよくわからないんだ。ソファル様自身とトラムからの報告からすると、夢の中で殺されかけたらしいが……」
「…夢？」
父の言葉でなければ、俄(にわ)かには信じられない内容に、ディネアは眉を顰(ひそ)める。そんな事が出来るとも、そんな方法で人の命を奪えるなどとも、今まで聞いた事もない。
「単に悪い夢を見ただけじゃないの？」
信じきれないままに思いつく事を口にすれば、モランは再びゆるく首を振る。
「…ソファル様の服の袖が長かったのを覚えているか？」
「袖？　ああ、そう言えばそうだったわね。別に寒くもないのに」
「あれはその夢でつけられた痣を隠す為だ。私も実際に目にしたが――　いくらソファル様の寝起きが悪くても、あれだけの痣がつく程に手首を握られたとしたら、その時点で目が覚めるだろうと思う」
つまり、父もソファルが夢で襲われたと判断したのだと理解し、ディネアは表情を引き締めた。
「…相手の目的はソファルを殺す事？」
「おそらくは」
「刺客はレサイアの客人の中にいる訳ね」
「時期と狙いから考えれば、そうなるだろう」
「そう…――」

確かに父の言う通り、これは妾妃を国へ帰すどころの話ではない。ただでさえソファルは即位したばかり。自分の事だけで精一杯のはずだ。
ディネアにとって、ソファルは一緒に育った大切な『弟』で、そしてただ一人、自分がおそらく生涯仕えるであろう『王』。
「お父様…レサイアの代表者と会合の予定はある？」
「ああ、明日の晩餐会の打ち合わせを今夜やる予定だ」
「…私もそれに同席してもいいかしら」
ディネアの飴色の瞳に微かな怒りと共に決意が宿った。
――　たとえ相手が地上で一、二を争う大国だろうと、ソファルの命を害する事など許せはしない。
「一国の王の命を狙う輩を、たとえそれが未遂に終わったとしても…このまま国に帰す訳には行かないわ。絶対に逃がすものですか……！」

第十九章　木漏れ日の下で

残された時間は今日を入れて三日。
ルシカをレサイアへ帰す事以外に、もう一つ抱えた問題もまったく解決されずに残っている。
むしろ後者の方がずっと深刻だ。ソファルは左腕へと目を向ける。気を利かせたのか、リヨが準備してくれた服も昨日と同じく長袖のものだった。
そっとめくり上げれば、手首から身体の方へ範囲の広がった痣（あざ）がある。
――　それは誰かが己の死を、願っている証。
夢の中に出てきた影の言葉が真実であるなら、ソファル自身に対しての憎しみなどではなく、過去のムージェンの行いに対する憎しみだ。
だが、だからと言って望むように死んでやる訳には行かないし、ムージェンを滅ぼさせるつもりもないけれども。
…同情は、する。
自分がムージェンの滅亡を求められた時に怒りを感じたように、あの影もきっと本来の国を失った時に同じような気持ちを感じたに違いないのだから。
いや、それよりももっと深い絶望を伴うものだろう。影自身が言ったように、もう二度と滅んだ国も死んだ人も戻りはしないのだ。
この遺恨は――　ムージェンが滅ぶか、彼等が諦めるかしない限り、いつまでも根強く残り、解消されはしない。
ソファルは木の幹にもたれながら、ぼんやりと庭園を眺めた。
穏やかな木漏れ日の下、時折吹いてくる風は優しくて、ソファルの目にムージェンは平和そのものに見える。
――　けれど、目の前に映るこの場所だけが『世界』ではないのだ。

遥か地上、ソファルの知らない広大な場所にいる人々は、ムージェンをどんな目で見ているのだろう。
今までは考えた事もなかった。いや、考える必要もなかった。
ソファルが物心つく頃には、すでにムージェンにとって『神の代行者』であった時代は完全に過去のものになっていたから――。
ムージェンを…そしてその王であるソファルを殺したいほどに憎む『影』は、きっと氷山の一角に過ぎない。今回をうまく乗り越えたとしても、こんな事はまた起こるのだろう。

…天にムージェンがある限り。

国王となった以上は、『負の遺産』とも言うべきものも引き受ける義務がある。あると思うが――　納得出来るかと言えば、また別の話だ。
王都の外れ、かつてエラージュと共に何度も行った、人々によって切り開かれた場所の事を思い出す。
そこには無数の墓が並んでいた。
葬られているのは、全て《大災厄》によって命を落とし、最後を看取る者が誰もいなかった人々ばかり。…一家全滅という事も、珍しくはなかったのだ。
ムージェンにおいて、葬儀は基本的に火葬で執り行われる。そして灰は風に乗せ、骨は大地に埋めるのだ。
だが、毎日数え切れない人間が死んで行く状況で、そんな悠長な事は出来ない。何が感染源かもわからない病相手に、死体を放置する訳にも行かなかった。
そこで講じられた手段が、急遽荒野を切り開いたその場所だった。
身寄りのない死体をそこに集めてまとめて焼き、一人一人分ける事も灰を風に流す事もなく、そのまま埋めたのだ。
墓標も石に名前と亡くなった日を刻みつけた粗末なもの。中には何も書かれていないものもあった。

それが視界を埋めるほどに並んでいる様は、言葉を語らずとも大災厄の深刻さを伝えてくれた。
ムージェンの抱える、未だ風化されない悲しい歴史。
それもやはりソファルが背負うべき『負の遺産』だろうが、それを負う事に対しては迷いはない。それが決して、一人だけで背負うものではないとわかっているからだ。
だが――　顔も知らない不特定多数から、死を望まれるほどに憎まれているという事実は、思うだけで気が重くなる。
ただでさえ、今までそうした憎悪や嫉妬、嫌悪といった負の感情とはあまり縁がなかったソファルだ。今回ばかりは『だからどうした』と気軽に開き直れそうになかった。
（…疲れた……）
それが隠しようのない本音だった。
即位してから一月と少し。必死に毎日慣れない執務をこなし、王としての経験を積む日々は、逆に余計な事を考えずに済んでいた。
レサイアの使節団の来訪も、その一環に過ぎないはずだったのだ。けれどその来訪が、緊張によって保っていた精神の安定を乱しつつある。
――　始まりは、ソファルが書類の間から見つけた一通の書状。
もし、あの書状に気付かなかったなら。
気付いてもまだ時期尚早と、話を見送っていたら。
そうしたら――　こんな事にはなっていなかったのだろうか？
（『もし』を考えても仕方がない、だっけ……）
国王業を代行していた母から、いくつもの大切な言葉を受け取った。その中の一つを思い出し、ソファルは苦笑する。
その言葉の後には、更に続きがある。
『起こってしまった事はもう仕方がないわ。過去を変える事なんて出来ないもの。たとえ手元に一枚しかお金がなくたって、食べなければ死ぬし、死にたくなければそれで何とか食べるものを確保しな

いとならないのよ。お金は握っていても増えやしないし、ましてや食べ物になる訳ではないものね』

…今思うと何だか妙に生活感と言うか、現実味のある言葉だが、多分今の状況もそれと同じなのだろう。でも今は、その言葉に従って立ち上がる気力はなかった。

心が弱くなると、日頃考えないようにしている事をどうしても思い出してしまう。

――この世界に、自分に直接繋がる人が、もう誰もいないのだという現実を。

モランも、トラムも。ディネアとフィリー、そしてリヨも。ソファルにとっては家族同然の人々だ。

けれど同時に彼等はソファルに仕える『臣下』だから、今まではともかく、これからは同じ高さ、ましてやそれよりも上に立つ事など有り得ない。いや、あってはならない。

ソファルが間違っていれば意見をしてくれるが、彼等が行うのはあくまでも『提案』の域を出ないものだ。

己を分を弁えた、臣下の鑑と言うべきなのかもしれない。普段なら感謝こそすれ、それを寂しく思う事なんてないだろう。

それでも――今はその距離が、辛かった。

「…仕事、しなきゃ」

心なし重く感じる身体をもたれていた幹から離し、立ち上がる。あまり乗り気ではないが、放り出す訳にも行かない。

母の言葉を一部借りるならば、『ここに座っていても事態は変わらない』のだから。

――その時、ふと風が吹き抜けた。先程までのそよ風とは違う、ほんの少しだけ強い風。

無意識に風が吹いてきた方向に目を向けたソファルは、歩き出していた足を止める。

明るい光に満ちた庭園に、いつの間にか人影があった。

徐々に甦(よみがえ)りつつある緑の中、小柄ながらもその身が纏(まと)う無機質な色彩は不思議な存在感を醸(かも)し出す。
僅かに強まった風の中心――　相変わらずの凍りついた表情で、ルシカがそこにいた。
「ルシカ…？」
ソファルのいる位置から、ルシカが佇(たたず)む場所まではそれなりの距離がある。
無意識に零(こぼ)れ落ちたその言葉が届く距離ではない。だが、その声が聞こえたかのようにルシカがこちらへ顔を向けた。
遠目でもわかる、真っ直ぐな視線。その視線を受けて、ソファルははっと我に返った。
何か言わなければと思うのに、言葉にならない。
混乱した思考のまま、ソファルは無言でルシカに視線を返す事しか出来なかった。
（何やってるんだよ、挨拶するなり手を振るなりすればいいじゃないか）
心の中でそんな事を言う自分に気付いてはいるのだが、身体と思考がついて行かない。
ただ――　きっと自分は今、とんでもなく情けない顔をしているだろうと思った。
ルシカはそんなソファルをどう思ったのか、じっと視線を向けてくる。そして先に動いた。
ゆっくりと歩み寄って来るルシカに、ソファルはどう反応すればいいのかと、また混乱した。
――　気のせいだろうか。ルシカと顔を合わせる度に、変な所を見られているような気がするのは。
明るい陽射しの下、ルシカの姿は周囲と馴染まない。それは容姿だけでなく、ルシカ自身の持つ空気のせいなのだろう。
世界にたった一人きりで立っているような、全てを拒絶しているかのような――　何もかもを諦めているかのような。

十歳の少女が持つには、あまりにも寂しい。けれど決して憐憫(れんびん)の感情を抱かせない強さもあって。

…その強さは一体、何処から来るのだろう？

ふわりと頬を風が撫で、気がつけばすぐ目の前にルシカが立っていた。

第二十章　言葉

並ぶとソファルより小柄なルシカは、自然とソファルの顔を見上げる形になる。吸い込まれそうな程に深い闇には、感情らしいものは見当たらない。

けれどその中に何処か心配そうなものがある気がして、ソファルは無理に笑顔を顔に貼り付けた。

「ルシカ、庭で散歩？」

ようやく出てきたかと思えば、何とも捻(ひね)りのない言葉。

そんな事は見ればわかる。もうちょっと良い切り出し方もあるだろう、とソファルは自分で駄目出しした。

だが、尋ねられたルシカは、予想に反して首を横に振る。そしてその瞳がソファルの顔から外され、じっと別の『何か』に向けられた。

「……ッ！」

何だろうと視線を追いかけ、ルシカが見ている物が何であるのかに気づき、ソファルは息を飲んだ。

――　考えに没頭していて、忘れていたのだ。

捲(まく)り上げられたままの左袖の下、色濃く刻まれた痣(あざ)の事を。

人目から隠す為の長袖だと言うのに、今ではまったくその役目は果されていない。

初対面の時に、ルシカはソファルの左腕にこんな痣などなかった事を目撃している。何も知らなくとも、こんなものを見れば何かと思うだろう。

この距離では今更隠しても無駄だ。ソファルは腕を隠す事を諦め、小さく吐息を漏らす。

同時に、昨夜トラムが目撃し、ソファルの夢の中にも出てきた光の鳥を、ルシカが作り出したという話を思い出した。

『気を許すな』

トラムからの警告が耳に甦(よみがえ)る。

――　そうだ。ルシカは無関係ではなかった。

「…ルシカ、聞きたい事があるんだ」

こんな場所で話す予定ではなかったが、どちらにしてもルシカには直接聞かなければと思っていた事だ。

ソファルの問いかけに、ルシカの視線が持ち上がる。

「トラムが――　昨日の夜、ここでルシカに会った衛兵だけど――ルシカが俺を助けるように言ったって言うんだ。…それは本当なのか？」

「……」

「もし、それが本当なら…どうして俺を助けたんだ？」

トラムの言葉を借りるなら、『声に出さずに』伝えたと言う。

つまりそれが正しければ、ルシカは口が利けなくとも、意志を伝える手段を持っているという事だ。

ソファルはルシカがその手段を使って答えてくれるのではないかと期待したが、ルシカは無言のまま、肯定もせず、また否定もしないでソファルの顔を見上げるばかりだ。

その表情が何となく困惑を帯びているような気がして、少し居たたまれない気持ちになる。

…何だか、小さい子供を苛(いじ)めてしまった気分だ。

やはり言葉を伝えたと言うのはトラムの勘違いか思い込みだったのだろう。そう納得しようとした矢先、ルシカの手が持ち上がり、ソファルの左手に触れた。

――　その瞬間、ソファルに起こった事はとても一言で表現出来るものではなかった。

苦痛を与えられた訳ではない。だが、それは『衝撃』としか言い

様がなかった。
追う事もろくに出来ない恐ろしい速度で、脳裏をあらゆる光景が駆け抜けて行く。
晴れた空があった。
吹き荒れる嵐もあった。
ゆっくりと流れる溶岩、見渡す限りの砂漠、白い壁が美しい街並み。
きらびやかな衣装を身に着けた貴婦人達が通り過ぎ――　かと思えば、唐突に底の見えない断崖絶壁が牙を剥く。
見た事のない獣が草原を駆けて行く。その美しい毛並みが一気に視界に迫り、次には泡が浮かび上がる水中へ。
…目まぐるしく入れ替わる視界、そして光景。
やがてそれは、陰気な暗闇に包まれた狭い石窟に変わる。
その奥に何かがあった。月日のせいか、それとも別に理由があるのか何処か黄色を帯びた丸いもの。苔むした地面に無造作に転がっている。
（…あれは）
おそらく、元々は白だったのだろうと思われるそれには、底の見えない闇が蟠（わだかま）る深い穴が二つ――。
（あれは――　人の……）
あるものの名前を思い浮かべようとした矢先、かつては『眼球』があったであろう場所に凝（こご）る闇が、ぎょろり、と蠢（うごめ）いた。

――　クチオシヤ…イマダワガジュソ、ハタサレヌママカ……！！

言葉なく思考に突き刺さったのは、男のものとも女のものとも判断のつかない無念の感情。
それは昨夜ソファルの夢に出てきた『影』も足元にも及ばない、言霊（ことだま）を得たなら、それだけで相手の魂を汚してしまえそうな程の毒に満ちた呪詛（じゅそ）だった。

「――　っ！！」
ぱしっ、と乾いた音と共にソファルは我に返った。
（何だ、今の……）
おそらく、時にして一瞬。だが、何だか百年の時を一気に駆け抜けたような気がした。
全身から冷汗が噴き出す。強張った心のまま、ソファルは目の前に立つ少女を凝視した。
もう、その手はソファルに触れてはいない。
否――　ソファルが無意識に振り払ったのだ。その証拠に、ソファルの手には何かを叩いた感覚が残っている。
「あ……」
謝るべきだと反射的に思ったものの、謝罪は言葉にならなかった。
先程の闇を想わせる瞳が、ソファルをじっと見つめている。真っ直ぐに、心の奥底まで見透かされそうなその目が、何故かとてつもなく恐ろしく感じた。
あの光景はルシカが見せたのだろうか。
あの魂までも冒(おか)してしまいそうな呪詛は、ルシカのものなのだろうか――。
もしそうなら、何故ルシカはソファルを救うような事をしたのだろう？　トラムの言うように、味方と思わせて油断させるつもりだったのだろうか。
混乱し、呆然と立ち尽くすソファルを前に、ルシカは振り払われた事など気にしていないかのようにスカートの裾(すそ)をつまみ、まるで非礼を詫びるように軽く一礼した。
そして再び持ち上がった顔を見て、ソファルは息を飲む。
…ルシカが、微笑んでいた。
それはそれまでの無感情さを払拭(ふっしょく)して余りある、何処か大人びたあまりにも儚(はかな)い微笑みだった。

『…それでいいの』

不意に直接頭の中で響いた『声』にソファルは驚く。

「ルシカ……？　今……」

ルシカは口を動かしていない。これがトラムの言っていた『言葉』なのかと思うが、どうすればそんな事が出来るのかさっぱりわからなかった。

ルシカはソファルの驚きなど意に介した様子もなく、淡々と続ける。

それは不思議な言葉だった。音としては認識していないのに、まるで耳元で囁（ささや）かれているような。

『あなたは…あまりにも無防備過ぎる。だから、そんな呪いなんて受けてしまうんだわ……。　本当なら、彼等ではあなたを呪い殺す事なんて不可能なのに』

再び表情を消し、ルシカはそのままソファルに背を向ける。もうそれで用事は済んだと言わんばかりに――。

「…ルシカ！」

…何故、呼び止めてしまったのか、自分でもわからなかった。ただ、この機会を逃してはならない――　そんな気がした。

「待ってくれ、ルシカは…一体、何者なんだ？　どうしてこんな――」

ソファルの言葉に、ルシカは足を止めて振り返る。

闇色の瞳にはもう感情は見えない。微かに首を傾げながら、ルシカは答えた。

『わたしはあなたを守ろうと思ったの……』

「え……？」

思いがけない言葉に、ソファルは目を丸くする。それはまるで、助けた事を裏付けるかのような言葉。

けれどソファルが微かな期待を抱く前に、それを否定するようにルシカは続けた。

『でも、それはわたしが勝手に決めたこと。あなたはわたしに、優しくしてくれたから……』
ほんの僅か、言い淀むように言葉は途切れる。
『…もうわたしに…関わっては駄目。先刻のでわかったでしょう…？　…わたしはあなたに対して……』

――　良くないものにしか、なれないの。

断ち切るように言い残し、まるでソファルの視線を避けるように再び背を向けて歩き出すルシカを、もうソファルは引き止める事が出来なかった。
そう出来ない拒絶が、その小さな背にあった。
ソファルはルシカを見送りながら、先程振り払ってしまった手を持ち上げ――　目を疑った。
先程まで左手首から腕に渡って刻まれていた痣。それがまるで幻だったかのように綺麗に消えてしまっていた。

第二十一章　戸惑い

執務室に戻ると、モランとディネアの二人だけがいた。フィリーはどうやら家に戻ったようだ。
「…痣が消えた？」
ソファルの報告と、実際に跡形もなく痣（あざ）が消えている左腕を前に、モランは驚きを隠さずに目を丸くした。
「一体、何が……」
命を狙われている証でもあったそれがいきなり消えたとあれば、モランでなくても追求したくなるだろう。
「お父様とソファルを疑う訳じゃないけど…本当に痣なんてあったの？　普通の痣でも、消えるのに結構時間がかかるはずだけど」
モランの隣でしげしげとソファルの左腕を眺めながら、ディネアも尋ねる。
だが、先程のルシカとのやり取りを含めて、まだ心に戸惑いが残るソファルには、起こった事を全て話す余裕はなかった。
余りにも――　一度に物事が起こりすぎて。
「…ごめん、詳しく話したいけど…うまく説明出来ない」
おそらく夢の中でソファルを光の鳥で助けてくれたように、ルシカが痣を何らかの手段で消してくれたのだろうとは思う。

『わたしはあなたを守ろうと思ったの……』

思い出されるのは、ルシカの言葉。
あの時、ルシカはソファルが優しくしてくれたから『守ろう』としてくれたような事を言っていた。
けれど、初めて顔を合わせた時の事を思い返しても、ソファルはルシカに対して特別親切にした覚えがない。
一体自分の行いの何が、ルシカの心に触れたのだろう？

（…出来るだけ良い形でレサイアに帰すって言ったから？）
思い当たるような事と言えば、その約束位だ。もっとも、このままだとその約束は果せそうにないけれども。
「そう言えば先刻聞きそびれたけど、問題のルシカ様ってそこまでしてあげたくなるような人なの？」
ふと思いついたように――　だが、まるでソファルの心を読んだかのように――　ディネアがそんな事を口にする。
「わざわざ偽装工作までして帰してやろうなんて、ソファルらしいとは思うけど。何か理由があるの？」
どうやらモランはルシカに関する事を何一つ説明しなかったらしい。
わざわざ自分を除け者にして、一体何を話し合っていたんだろう。疑問は尽きなかったが、ソファルは説明しようと口を開きかけ――
そのまま固まった。
ルシカをレサイアに出来るだけ良い形で帰したい。それをモランに告げた時のように説明すればいいだけのはずなのに、何故か言葉にならない。
ルシカが帰りたいと望んだから。
幼いながらも大国の息女として振舞うルシカに対して、国へ戻ってもその立場が悪くならないよう、王として可能な限りの誠意を返したいと思ったから。
大きな理由はその二つだけだったはずだ。けれど――。
口を噤（つぐ）んでしまったソファルの様子に何か感じる所があったのか、ディネアは微苦笑を浮かべる。
「…ルシカ様ってどんな子？」
同じような質問なのに、『人』が『子』になっただけでわかる。
ディネアは『ムージェンの王』ではなく、『ソファル』に対して質問している。大義名分を除いて、ソファル個人はどう思っているのかと。
「どんなって……」

問われても、一言では表現出来ない。
ディネアが聞きたいのは、きっと外見的な事ではなくて内面的な事だろうけれども、答えられるほどルシカの事を知らない。それに、あの不思議な力――。
「…年下とは思えないくらい、強い子だと思う」
明るい色彩の中、一人無機質の色を宿して立つ姿を思い出す。そしてたった一度だけ見せた微笑と――　拒絶する背を。
多くの人々に助けられ、支えられて立っている自分とは正反対に見えた。
「最初は『妹がいたらこんな感じかな』って思っていたけど……」
「…今は違うの？」
「…――　よくわからない」
要領を得ないソファルの返事に、ディネアは肩透かしを食らったような顔になる。
けれど、本当にわからなくなったのだ。少なくとも今は、単純に『妹のようだ』とは思えない。
敵かもしれない――　味方のような気もする。そうした事を除いても、その存在は何処か捕らえようがないのだ。
先程庭園で、ルシカが触れた瞬間に見えた石窟の光景と突きつけられた『呪詛』が脳裏と心に焼きついて離れない。
ルシカは最後に、自身がソファルにとって良くないものにしかなれないと言った。
あの光景とその言葉は無関係ではないようだが、その繋がりがわからない。きっとソファルの知らない何かを、ルシカは知っているのだ。
ルシカは一体、何者なのだろう。結局その疑問に辿り着く。おそらく、レサイアの息女だけに収まらない何かがあるはずだ。
いろんな事をひっくるめて、ルシカに対する印象は最初から大きく変わってしまったけれども。…一つだけ、変わらないものはある。
「でも…何だか、放っておけない気がする」

しなくても良かったはずの約束を口にしてしまったように。
先程の庭園で思わず呼び止めてしまったように。
正体も知れず、不可思議な力すら使う相手だ。警戒しなければと思うのに、けれどつい、手を伸ばしてしまう。
「ふうん？」
ソファルの言葉に、ディネアは何処となく楽しそうな笑顔を浮かべた。大抵トラム絡みで怒っている事の多いディネアが、そんな風に笑う事は珍しい。
「…ディネア？」
「じゃあ是非とも会ってみたいわね。ここは仮とは言え、婚約者としては挨拶の一つもしておかないとならないかしら」
「――　へ？」
思いがけない言葉が予想もしないタイミングで飛び出して、ソファルは間抜けな声を上げた。
今、ディネアが信じられないような言葉を口にしたような――。
「…今、『婚約者』って言った？」
「言ったわよ。今回の話に乗ってあげる事にしたの」
先程の怒りは何だったのだと思えるほどに、あっさりとしたその言葉。これを驚かずにして、何に驚けばいいと言うのか。
「え…ええええ！？」
驚愕も顕に素っ頓狂な声を上げたソファルに、ディネアはにっこりと笑う。…先程と同じ笑顔のようで、よく見ると目が笑っていないという器用な表情だ。
「…そこまで驚かれると、逆に腹立たしいわね……」
「ご、ごめん！　で、でも…なんで……」
「もちろん理由はあるわよ。今の状況だと、『宰相の娘』より『国王の婚約者候補』の方がいろいろと動きやすいし、警戒するでしょ？」
誰が、が抜けていてもディネアが何を言いたいのかはわかった。
痣こそルシカのお陰で消えたが、何者かが自分の命を狙っている

事実は変わらないのだ。ソファルは表情を引き締めた。
「当然だけど、婚約者としてのお披露目とかはなしよ。それとなく、相手に『そういう相手がいる』って思わせる程度ね。それでも十分、効果はあるんじゃない？」
「わかった。でも…もし、王宮の外にまで話が広まったら……」
「…まあ、その時は無理矢理相手の勘違いって事にするしかないでしょ。今はそれより、ソファルの命を狙う輩を見つけ出すのが先決よ」
その為になら、多少主義と反していようとも協力してくれるディネアに、ソファルは心の中で感謝する。やはり味方になってくれると頼もしい。
「それじゃ、ちょっと行って来るわ」
話がまとまったとばかりに、ディネアはそう言うと扉に向かう。
「…何処に？」
「だからルシカ様の所。離宮にいるんでしょ？」
何処か不敵な笑顔と口調に、ソファルは何だか嫌な予感がした。
「――　何をしに？」
「そうねえ。…取りあえず『ソファルには私がいるのよ、近寄らないで頂戴』みたいな事を言ってみるとか」
「必要ないだろ、それ！！」
まるでそれでは恋敵宣言だ。動揺を隠さないソファルに、ディネアは遠慮なく笑った。
「あはは、本当にこういう冗談が通じないんだから。心配しなくても、単にちょっと興味があるだけよ。ソファルのお人好しは今に始まった事じゃないけど、今回はどうもそれと違う気がするしね」
「…？」
どういう意味だろう。
お人好し、というのは今までにも方々から言われてきた事だし、多少自覚もあるが――　それとは違う？
困惑するソファルに、ディネアはそれ以上の説明はせずにひらひ

らと手を振り、そのまま行ってしまう。うっかり引き止める事を忘れたソファルは、ふと痣の消えた左手を見た。
無意識に振り払ってしまった手。そう言えば、その事について謝っていない。痣を消してくれた事に対する御礼すらも。
（…謝らなきゃ）
先刻のやり取りの後では、再び顔を合わせるのは気まずい。けれど、謝罪と御礼を言わなければと思う。可能ならば出来るだけ早く。
…――　だがその前に。
ディネアの後を追いかけようかと考えたソファルは、視線を感じてそれを行動に移すのをやめた。
視線の持ち主はモラン。
無言の訴えに、ソファルは自分のいる場所を思い出し、自分の机の上にある書類の山に目を向けた。午前中何も出来なかった分、普段より少し山が高い。
「……」
ちらりと救いを求めて宰相に視線を返すが、モランはやはり無言で見つめ返す。
――　逃がしませんよ。
言葉はなくとも視線がそう言っている。
これは全部は無理でも、あらかた片付くまで自由はなさそうだ。
ソファルは諦め、机に向かうと、山の一番上にある書類に手を伸ばした。

第二十二章　交錯

室内に漂うきな臭い匂い。何かが焼き焦げたようなその匂いに、彼は状況を問う。

「――　何があった？」

清掃の為にムージェンの使用人が入る可能性も考え、空間的に遮断していた《場》が見事なまでに壊されていた。

その中央に描かれていた陣は昨夜壊され、今もそのままになっている。一般人には見えないはずのそれが、今では誰の目にも明らかだ。

「…術が、返されたようです」

「……」

一度ならずとも、二度も。しかも念入りに仕込んだ呪いだ。

簡単に解けるはずはないというのに、その報告を裏付けるように、床には原型をとどめていない人形が転がっている。

それは万が一を考えて準備されていた形代（かたしろ）だったが、今ではその左半分が黒く焼け、溶け落ちてしまっていた。

「やはりムージェンの王族は一筋縄では行かないという事か……」

憎々しげに呟く言葉に、報告しに来た男も複雑そうな表情になる。

「確かに呪殺は専門外だが…ここまで完璧に返して来るとなると、あちらに相応の術者がいると考える方が自然だな」

「ですが、報告ですとこちらには渡し守の術者しか確認されていないと……」

「見える部分だけで判断するな。ならばこれをどう説明する」

「……」

昨夜の鳥すら、いかなる術のなのかも定かではない。

少なくともこの場に集うどの系統にも属しておらず、しかも恐ろしく高度な術なのは確かだった。

この地への滞在期間は残るところあと正味一日と半。もはやなり

ふり構っていられる状況ではない。
「…今すぐ同志の召集を」
彼の言葉に、はっと男は目を見開く。
「では――？」
問いかける視線に、彼は頷いた。
「私はこれから贄（にえ）を連れて来る。その間に必要な準備を」
「すぐに手配を！」
力強く頷くと男は部屋を出て行く。その背に続きながら、彼は歪んだ笑みを浮かべた。
「今度こそ、滅び去るがいい――　《大災厄》の再現だ」

＋　＋　＋

「――　なんであんたがここにいるのよ」
「それはこっちの台詞だ」
王宮から庭園を挟んで反対側に位置する離宮――　その入り口。そこで周囲の迷惑も顧みらず、睨（にら）み合う男女の姿があった。
片や長い杖を片手に離宮の警備に立つ衛兵、トラム。そして対するは先程王宮への帰還を果した宰相の娘、ディネア。
顔を合わせれば火花が飛び散らない時はない二人は、つい先程も口論を交わしたというのに、今もまた険悪な空気を醸し出している。
「あんた、一昨日も昨日も不寝番だったそうじゃない。なのに、なんで昼間っからこんな所にいるのよ」
言葉だけなら心配しているとも取れるが、その責めるような口調にそんな感情はとても感じられない。実際、心配など欠片もしていなかった。
ディネアの言葉は正しく、二晩続けて不寝番なら今日は一日非番であってもおかしくはない。だが、トラムはその追求を鼻先で笑った。
「仕事熱心だろ？　安心しろ、昼まで寝てたさ」

「なーにが、熱心よ。大方、レサイアの女官に美人でもいたんでしょ」
それ以外に何があると言わんばかりの言葉に、トラムの眉が釣り上がる。
「お前なあ…オレをなんだって思ってやがる」
「『女に見境のないろくでなし』と思ってるわ」
「何だと…？　失礼な事言うな、オレにも好みはある！」
「あっそ。取りあえず私がその好みに入ってない事が心底嬉しいわ。…って、あんたに付き合ってる暇はないのよ」
売り言葉に買い言葉。再び戦火が切って落とされそうになる所で、ディネアは我に返った。
「ルシカ様に用事があるの。通して頂戴」
「…姫様に？　一体何の用事だ」
ルシカの名を出した途端に気色ばむ様子に、ディネアはトラムが今回の件にそれなりに深く関わっている事を思い出す。
父であるモランから聞いた話によれば、ソファルが夢で襲われた際にも居合わせたそうだが――。
（でも、なんでルシカ様に反応するのよ）
ソファルが先程の庭園での出来事を伝えなかった事もあり、ディネアのルシカに関する情報は大部分が抜けている。それ故にトラムがルシカの名に引っかかる理由がわからなかった。
長年の付き合いで、トラムの勘が異様に良い事は知っている。危険を察知する能力というのだろうか。
ルシカの名で反応するという事は、彼がルシカを警戒しているとも取れるが……。
（…ここで聞く話でもなさそうね）
ディネアにとってトラムはいけすかない男だが、そういう部分では信用に足りると思っている。今はそれだけわかっていれば十分だろう。
何しろここはレサイアの使節の人間が寝泊りする離宮だ。何処に

耳があるのかもわからない状況で出す話題ではない。
取りあえず保留にして、ディネアは目的を優先する事にした。
「――　リヨは何処まで知ってるの？」
ふと思いついてディネアが問うと、トラムは軽く肩を竦めた。
「さあな。オレは話してないが、相当な地獄耳だからほとんど把握してる可能性はある。気付いてないと思っているのはソファル位だろ」
「そう。…じゃあリヨにも会った方が良さそうね。こっちにいるんでしょ？」
「いるにはいるが…それでお前、あの姫様に会って何をする気だよ」
長年の付き合いか、流石にはぐらかされない。トラムの勘の良さを憎々しげに思いながら、ディネアは仕方なく白状する事にした。
「どんな子か知らないけれど、ソファルが妙に気にしてるから…今回の件で無関係かどうか確かめたいのよ」
直接会えばわかるとも思えない。けれど――。
お人好しで、まだ幼さが抜けきれない大事な『弟』。出来れば彼が、必要以上に傷つく事のないように。そんなディネアの意図を察してか、トラムが笑う。
「…お前も、ソファルには甘いよなー」
「それはお互い様でしょ。仕方ないわ…ずっとソファルは私達にとって、『守る』ものだったんだもの」
前王ルフトがあまりにも若くして亡くなり、ムージェン中がその悲報を悲しんだ。
その哀しみの先に生まれたソファルは、あらゆる人にとって希望の光だった。その光が曇る事のないように――　そう願うのはやはり甘さだろうか。
「その内、守らせてもくれなくなると思うけれどね」
『姉』の顔で苦笑すれば、トラムは杖で肩を叩きつつ首を傾げる。
「そんな事もないんじゃないか？　あいつ、どっか抜けてるからなー」

「…それって、不敬罪にも取れるわよ」
「まあ、そういう理由なら納得した。もっとも会っても大した収穫はないと思うがな…。姫様の事はどの辺りまで聞いてるんだ？」
「それがほとんど…って何でついて来るのよ！　持ち場は！？」
「あー、平気平気。使節団の人間って、どうもほとんど離宮に籠もりっぱなしらしいからな」
「だからって！　…まあ、今のムージェンじゃ見るべきものもろくにないだろうけど……」
百人近くの人間がいる割りに静まりかえった離宮の中へ足を踏み入れながら、ディネアはその情報を心に留める。
ほとんど外に出ない使節の人間。今の時点では誰も彼も怪しい。
ソファルの命を狙う方法が、直接的な手段ではないのなら、その人物はここから何らかの手段を講じたという事だろうか。
最上階へ向かう階段を昇りながら、一見した所では以前と変わった様子のない離宮の中を見回す。
（――　…？）
ふと、その鼻を何かの匂いが掠（かす）めた。
「…ディネア？」
足を止めたディネアにトラムが何事かと視線で問う。
「今、何かこう…焦げたような匂いがした気がしたんだけど……」
「焦げたような？」
その言葉にトラムも鼻を動かす。
「…言われてみれば……」
その目が向かうのは、進行方向の左手。
階段横から見えるのは、人気のない広い廊下。ずらりと並んだ扉の何処からその匂いがやって来たのかは定かではない。
「…三階の部屋にはどんな人が？」
「基本的にはお偉いさんとその護衛だな。あとはその身の回りの世話をする女官辺りだったはずだ」
「……」

「煙が出ている様子もないし、ランプか何かでシーツでも焦がしたって所じゃないのか？」
「…ならいいけどね」
今の状況ではあらゆる事が怪しく思える。
だが、だからと言って全ての部屋を見て回る訳にも行かないだろう。ディネアは諦め、そのまま最上階へ続く階段に足を向けた。
そして、二人が去った後。
一人また一人とその階へ人が集い始める。その間隔はまちまちで、一見目的があるようには見えない。
けれど注意深く見ていれば、おそらく気付いただろう。彼等が全て、ある一部屋の中へ姿を消した事に。
そして、それと時を同じくして――。

＋　＋　＋

「あらまあ、珍しい組み合わせ。何かありましたの？」
目を丸くするリヨに、ディネアは不本意そうに否定する。
「別に伴って来た訳じゃないわ。勝手について来られただけよ。それより、リヨ。ルシカ様に会いたいんだけど、その前にいろいろ話を聞こうと思って……」
ディネアの言葉は中途半端に途切れた。会話の途中で、リヨの顔に明らかな困惑が浮かんだからだ。
「…リヨ？」
「それが――　ちょっと困った事になりましたの。先程外に出られてから、ルシカ様が戻って来ないんです。手分けして探しているんですが……」
予想もしていなかった言葉に、ディネアとトラムは顔を見合わせた。

第二十三章　ルシカ失踪

「…ルシカがいなくなった？」
戻ってきたディネアからの報告に、ソファルは耳を疑った。
「いなくなったって、どういう……」
「リヨの話だと、昼頃に部屋を出てから戻っていないそうよ。単にちょっと遠出している可能性もあるけど…王宮から外には一人じゃ出られないはずだし、ちょっと遅すぎるんじゃないかって。リヨとトラムが離宮の周辺を探してくれてるわ」
本当は私も手伝いたかったんだけど。そう続けながらも、ディネアはため息をつく。
「聞く限りじゃ随分特徴的な子みたいだけど、私は直接会った事がないから」
それで捜索は二人に任せて、ソファルへの報告に回ったのだろう。
「昼頃……」
時間的には、ソファルと庭園で遭遇した時間だ。
あの後、ルシカは離宮へと戻ったはずだが――　離宮の中に入ってしまうまで、見ていた訳でもない。
その直後に、ルシカの姿が見えなくなったのだとしたら……。
（俺のせいかも……）
もちろん、それは無関係かもしれない。だが、無意識の行動だったとは言え、振り払い、拒絶とも取れる態度を取ってしまったのは事実だ。
ルシカはそれでいい、と微笑んだけれど――　普通なら傷付いたに決まっている。もし、それが原因だったら。
青ざめるソファルに、何かを察したようにモランが声をかける。
「ソファル様、何か心当たりでも？」
「…心当たりは、ない。でも……」
「でも？」

「先刻、庭でルシカに会ったんだ。だから…もしかしたら、最後にルシカの姿を見たのは俺かもしれない……」
もし、ルシカが自分から姿を消したのだとしたら。その責任の一端が自分にあるに違いないのだ。
「つまり、そこから先の動きが不明という事ですか。――　ディネア、離宮に詰めていた衛兵からの報告は？」
「それが丁度、昼の交代時だったようなのよ。引継ぎとかにはさほど時間はかからないけれど、僅かな時間だろうと目が離れていた可能性はあるわ」
「なるほど…もし、何者かに連れ去られたのだとしたら、衛兵の行動まで把握していたという事か」
「…そうなるわね」
普段はまったくと言っていいほど使用されていない離宮を、レサイアの使節団の為に急遽使えるようにした際、その警備の配置も臨時的に組まれていた。
王宮と違い、物々しい警備は客人に対しても失礼に当たると必要最小限にしていたのだが、どうやらそれが裏目に出てしまったようだ。
「俺も探しに……！」
居ても立ってもいられず、ソファルが椅子から立ち上がったその時、モランとディネアが引き止める前に執務室の扉が叩かれた。
「リヨ…？」
「残念ながら違うわ。リヨがどうかしたの？」
もしやルシカが見つかった報告かと思いきや、顔を出したのは一度家に帰ったと思われたフィリーだった。
「大叔母上…それが、その……」
質問に対して答えようとしたものの、うまく言葉になってくれない。それを見かねてか、ディネアが説明してくれる。
「お母様、どうもルシカ様がいなくなったみたいなのよ」
その言葉にフィリーも表情を曇らせる。

「ルシカ様って…レサイアの？　それは大変じゃない。探してはいるの？」
「ええ。リヨとトラムと、他に女官が何人かで離宮の周辺を探してくれているんだけど…だからって、ソファル。あなたが行っちゃ駄目でしょ」
「え、何で…ルシカはレサイアから来た客人だし、それに……！」
言い募るソファルに、ディネアはゆるりと首を横に振る。
「まだ、連れ去られたのか、それとも自主的に何処かへ行ったのかもわからないでしょう？　もし、連れ去られたのなら…明らかに何か意図があっての事よ」
「ディネアの言う通りです。もし、このムージェン、あるいはソファル様自身に害意を持っての行動なら、不用意に動くべきではありません」
「…っ」
ディネアのみならず、モランにまでそう言われてしまえば、無理は通せない。感情は治まらないながらも、ソファルは再び椅子に腰を下ろした。
「ご心配だとは思いますが…取りあえず、リヨ達の報告を待ちましょう」
「…わかった」
二人の言う事は理解出来る。おそらく自分が動いてしまったら、事は大きくなってしまうだろうし――　命を何者かに狙われている身だ。
「問題はこの件をレサイア側にどう伝えるかです。今夜、明日の晩餐会の打ち合わせを行う予定ですが…それまでに見つからなければ、報告はしなければならないでしょう」
モランの難しい顔に、ソファルもその理由を察した。
そうだ――　レサイアの出方によっては、今回の事はムージェン側の責任となりかねない。いや、もしかするとそれこそが目的かもしれない。

十中八九、己の命を狙う人間は使節の中の人間だが、表向きでは彼等はソファルの即位を祝う為に来ている。
その状況で、仮にも皇帝の血を引くルシカの身に何かあれば――少なくとも、レサイアに対してのムージェンの信用は失われるだろう。
彼等はソファルの命だけでなく、本当にムージェン自体の滅亡を望んでいるのか。
（まさか…その為にルシカを？）
最悪とも言える想像が思い浮かび、ソファルはぞっとした。
何故、年齢的にも妾妃として無理のあるルシカが選ばれたのか、ずっと疑問ではあった。
本当に皇帝の血を引いているのかも定かでなく、言葉も知らず、口の利けない彼女を差し出したのは、最初から捨て駒にするつもりだったのか。
…可能性は、無ではない。そしてその場合、ひょっとしたらすでにルシカは――。
「どうしたの、ソファル。真っ青よ？」
黙り込み、血の気を失くすソファルに、ディネアが声をかける。だがその声もソファルの耳には届いていなかった。
思い出すのは最後に会った庭園でのやり取り。
良くないものにしかなれないと言った、あの言葉。どうしてあの時、そんな事はないとすぐに否定出来なかったのだろう。
すでにもう二度も、ルシカにこの命は救われているのに。
「…早く、探さなきゃ……」
「ソファル…？」
「俺、謝ってないんだ。助けてもらってばかりで…なのに一度も、お礼も言えてなくて……」
もし最悪の事態が起こってしまったら、きっと自分で自分を許せない。
「ディネアやモランが言う事はわかるけど、でもやっぱり俺もルシ

カを探すよ」
「何言ってるのよ！　大体、心当たりとかないんでしょう？」
再び立ち上がりかけながらの言葉に、とんでもないとディネアが眉を吊り上げる。
「ないけど…でも、だからってこんな所で見つかるのを待つなんて……！」
「――　ソファル、あなた自分が何かわかってるの？」
不意打ちのようにフィリーが口を挟む。
「自分の立場をわかっていて、それでもなお、そうしたいと言うのね？」
「…――」
「気持ちはわからなくもないわ。でもあなたは…『国王』なのよ」
フィリーの言葉は情け容赦なく重い。
普段おっとりとした大叔母は、時としてモランやディネアより厳しい。それは今となっては一握りしかいない、同じ『王族』の血を引くが故か。
「ですが…！」
「あなたが自分で動くという事は、リヨやトラム…仕える人間を信用していないという事でもあるのよ。まさか、彼等を信用しない訳じゃないでしょう？」
畳み掛けられる言葉に、ソファルの勢いは殺がれる。
もちろん、信用している。だが、ただ報告を待つ事が、感情的に受け入れられないのだ。
「第一、ソファル。あなたには先にやるべき事があるのよ」
「…？　やるべき、事？」
思いがけない言葉に首を傾げる。もしやそれは、まだ机の上に残っている書類の事だろうか。
そう考えて視線をそちらに向けるソファルに、フィリーは笑顔で歩み寄るとその腕をがっしりと捕まえた。
「…何の真似ですか？」

「そっちじゃないわ。あなたがやるべき事はこちら」
しゅるりと音がしてフィリーの手に現れたのは――。
「――　巻尺…？」
何故、今の状況でそんな物が出て来るのか。
さっぱりわからずに巻尺とフィリーの顔を交互に見ていると、腕を掴んだままフィリーは謎の使命感に満ちた表情で言い放った。
「さ、行きましょう」
「行きましょうって、ど、何処に？」
「別にここでもいいけど、ちょっと狭いからもう少し広い場所にね。もう準備は出来ているのよ」
何故かモランもディネアも何も言わない。多少は呆気に取られてはいるようだが、フィリーの行動については理解しているようだ。
「あ、あの…何の準備が……？」
「決まっているでしょう。採寸よ」
「…は？」
一体、何の。
この期に及んでも理解出来ないソファルに、フィリーは真面目な顔で説明する。
「あなた、まさか明日の晩餐会にまでルフトのお古とか普段着で出る気なの？　戻って来て良かったわ。大方こんな事じゃないかと思っていたのよ」
「…まさか採寸って……」
「取りあえず腕利きのお針子に数名来てもらったの。私も出来る範囲で手伝うけれど、それでも今日中に仮縫いまではやってしまわないと、明日の夕方には間に合わないわ」
だからちょっと借りて行くわね、とまるで物のように先程『国王』扱いした同じ口で言うフィリーを、ソファルは呆然と見つめた。
「あの…今すごく、取り込み中なんですが……」
大体、万が一ルシカの身に何かあった場合、晩餐会どころではなくなるのだが――。

「わかっているわよ」
あっさりとフィリーは認める。
「ルシカ様の事は心配だし、状況的に楽観視も出来ないけれど、だからこそよ。客人の姿が見えなくなったからって、自ら探し回っては軽率だと思われる可能性もあるし…確かにこのまま見つからないような事になれば晩餐会どころではないけれど、見つかった場合は予定通り執り行われるのよ？」
「…確かに、そうですけど……」
「ソファルは『国王』よ。その一国の主が侮られれば、それは国民全体を侮られるようなもの。当然、立ち居振る舞いも見られるだろうけれど、何より服装での印象は大事なの。…だから明日はそれ相応の格好をしてもらうわないと」
有無を言わさない言葉に何だか逆らえず、ソファルはそのまま別室へと連行される事となった。
確かにフィリーの言う事ももっともで、ついでに書類をのんびり確認していられる心境ではないけれども――　何だかうまく丸め込まれてしまった気がしてならないのは気のせいか。
ある意味、フィリーという見張りをつけられたようなものだ。モラン達が黙って見送ったのも、おそらくその手を振り切ってまで探しには行かないと思っているからだろう。
（ルシカ…ごめん……）
実際、フィリー相手にそこまで出来ないソファルは、直接探しに行けない歯がゆさを抱えながら心の中で謝る。今のソファルに出来る事は、ただその無事を祈る事、それだけだった。

断章　―二十年前―

遠くで、鳥の鳴く声がした。
間もなく日没を迎えようというこの時分、日暮れを前に巣へと戻る途中なのか、それともこれから糧を求めて狩りへと出るのか――。
どちらにせよ、聞き覚えのない鳴き声だ。おそらく名も知らぬ鳥だろう。
彼はそんな事をぼんやり考えながら、傍らに横たわる人間の顔色を確かめる。
徐々に暗さを増してゆく視界の中、それでも白を通り越して蒼白なのがはっきりとわかる。額には冷たい汗が浮かんでいた。
乾いた唇からもれる吐息は苦しげで――　けれど彼にはそれを見守る以外、他に出来る事はない。
もう出来る事は全てやってしまった。
少しでも呼吸を楽にする為に寛げさせた上衣、その下には包帯代わりの布が捲かれている。
患部は右肩。出血は止まっているが、衣服と捲いた布に滲んだ赤が、その傷の深さを想わせた。
（…すでに数刻…毒でも仕込まれていたのか……？）
彼は考える。その可能性は無くもない。
毒物に関しては大抵のものには慣れていると言っていたが、ここはかつて住んでいた場所からはるか南方に下った地。
聞き覚えのない鳴き声の鳥がいる位だ。未知の毒物があってもなんら不思議ではないし、たとえ既知であっても、加工の仕方や濃度によっては、耐性を持つ者にも効果が出るかもしれない。
「…――　死ぬのか？」
ぽつりと、彼の口から言葉が漏れる。
「お前は、ここで死ぬのか」
語りかける。

決して強い口調ではない。むしろ、淡々と。
――　突きつけるように、問いかける。
「こんな所で…何も為さずに終わるのか」
こんな誰も足を踏み入れていないような辺境の森の奥深く、他の誰も知られずに？
…力なく湿った地面に放り出されていた手が動いたのは、その時だった。
荒い呼吸は変わらない。それでも、硬く閉じていた目蓋が持ち上がる。閉じられていたそこに隠れていた色は――　空虚な闇。
「…ここ、は……」
低く掠れた声で、何処かと問う。
「ここは旧ラハイレの北にある山の中だ」
端的な返答に、その目が数度瞬き、その顔が緩慢な動きで彼の方を向く。
「――　…ああ、ああ、そうだった……」
途切れていた記憶が繋がったのか、疲れたように呟く。
「…刺客、は？」
「切り捨てた」
あっさりと、さして重要そうでもない一言に全てを悟ったのか、その口元に普段通りの皮肉な笑みが浮かぶ。
「そっか。…悪かった、な…気付くのが…遅くなった」
僅かに視線を反らしながらのぎこちない謝罪は、傷のせいか、それとも己の力量不足を恥じるせいか。
おそらくそのどちらでもあるのだろう。だから彼は敢えて、その謝罪を否定しなかった。
お前は悪くないと言えば、逆に気に病む。それ位はもう把握している。それに――　それよりもまず、彼にはすべき事もあった。
「――　ティスカ」
名を呼べば、何だと言わんばかりに視線が向けられる。
「…お前、女だったのか？」

「……」
彼の言葉に、彼が最も信頼する腹心――　ティスカ＝ナターラは絶句した。
絶句したまま、自由が利かない己の状態を確認し――　長い長い沈黙の果てに、最悪、と呟いた。
「畜生…一生、気付かれないと…思ってたのに……」
心底口惜しげな口調。
実際、その言葉に間違いもなく、傷の手当てをする為に服を脱がせなければ、この先気付いたかどうかわからない。
彼――　いや、彼女と言うべきなのか――　と出会って、数年。その間、一度としてその性別を疑った事がなかったのだから。
確かに中性的な容姿ではあったし、男にしては細身ではあった。けれど、口調や仕草に演じている違和感はなく、声音すら枯れて低い。女性とわかった今ですら、女性的な部分は感じられない。
「…どういう事だ。何故黙っていた」
長い事謀(たばか)っていたのかと問う彼に、ティスカは疲れたような笑顔を見せる。
「あのさぁ…死にかけて、ろくに話せない人間相手に、問い詰めるのって…趣味悪いぜ？」
「こういう状態でもなければ、お前は素直に話さないだろう」
「…ホント、いい性格してんね、アンタ」
それでも話している間に、少しずつ調子を取り戻したのか、ティスカはのろのろと身を起こす。
「別に…秘密にしとく気はなかったさ。…オレの一族じゃ…こんなの珍しい事じゃない。むしろ…ゴロゴロいる」
ぽつりぽつりと語る口調には、何処か苦さが漂う。
触れられたくない話題なのは最初から予想は出来ていた。だから彼は無言で先を促す。
「…これは『無能』の証みたいなもんだ」
「無能……？　お前がか？」

その言葉はとても頭から信じられるようなものではなかった。
ティスカの『力』によって、窮地(きゅうち)を幾度も救われ、あるいは勝機を得て来た身だ。
「…正確には、そうだと思われていたって所、だな……。こう見えても、血の滲むような努力をしたんだぜ？　それでやっと…自由の身になれた。なれたけど…もうその時には、オレはオレだったからな……。今更変えようとという気にもならなかった、それだけだ」
一気に言うと、荒い息をつく。相当に辛そうだ。
思えば、こんなに弱った姿を見るのは初めてだ。寝ておけ、と言うのは簡単だったが、おそらく従わないだろう事も確かだった。
「…オレの一族がどういう人間達の集まりか…アンタも知ってるだろ」
ふと、口調を改めてティスカが問う。その暗い瞳を、更に翳らせて。
「ああ……」
呪われた二つ名を持つ、世界から秘匿された血族。
その一族の中でも特別視されていた男に、皮肉にも命を救われた結果、彼はここにいる。
「あそこの人間にとって…無能者は道具だ。道具は『正しい』部分がないもの程上質。…性別を偽るのは、一番手っ取り早い方法だろ。…無能でなくても男を女として、女を男として育てるのがあそこでは基本なんだよ」
「…お前の父親はどう見ても男だったが」
「あれは、その中でも特別。千年に一人と謳(うた)われた『死神』の、その再来とまで言われた奴だからな……」
実の父の事だろうに、その口調は何処か余所余所しく、嘲笑じみたものがあった。
「――　何が『死神』の再来だ…ただの狂人だ、あんなクソ野郎」
口汚く罵(ののし)りながら、ティスカは拳を握り締める。――　その目から、涙を流しながら。

「…何故、泣く？」
「は？　泣く？　…あれ……」
どうやら自覚はなかったらしく、ティスカは驚いたように頬を伝う雫を指で拭う。
「…なんでだろ、止まらねえや」
何故と問われても、彼にその理由がわかるはずもない。
しかし、心底不思議そうに呟くティスカを前に、なるほど、と納得する。
理由なく泣けるのは女の特権だ。ならば、目の前にいる存在は、やはり本質的には『女』なのだろう、と。
…もっとも、今まで涙など一度として見た事はなかったのだが。
「――　ロジアム」
彼がそんな事を思っている事など知るはずもなく、ふと思いついたように、ティスカは彼に問いかける。
「…なあ、オレが女だと何か都合が悪い事あるか？」
その言葉に、彼は思案した。
「――　いや」
思考に要した時間はほんの僅か。
即答とも言える、単純にして簡潔な否定の言葉に、ティスカは少し安堵したような表情を浮かべた。
「…だよな。アンタは覇王を目指して、オレはそれを助ける。何も変わらないよな」
何処か子供のような無邪気な言葉に、彼は珍しく苦笑する。
全てを失ってから、彼の中には人らしい感情もほとんどなくなってしまった。喜びも、哀しみも、憎しみすらも――。
それでも彼が望んだのは、大陸の覇権。
到底不可能と思われるそれを、ティスカは馬鹿にはしなかった。こうして生死を共にしながら、その異能で助力してくれる。
――　彼がこの世で唯一人、信頼する人間。
男だろうと女だろうと、それはおそらくこれから先も揺らぎよう

のない『事実』だ。そう思えたからこそ、彼は都合の悪い事など何もないと否定した。

だが――。

揺らぐはずのなかったそれが大きく揺らぐのは、それからさほど遠くはない未来の事だった。

第二十四章　形代の娘

それは、一人きりになってから一年ばかりが過ぎた頃だっただろうか。
道と呼べるものすらない、獣道にも等しい草木生い茂る道を踏み分けて、彼等はやって来た。

「ここにティスカ＝ナターラという人物はいるか？」

挨拶すらなく、視線が合うなり一方的に問いかけられた言葉。
その数、僅か数名。装備こそ必要最小限ながら、彼等が『普通』の人間ではない事は気配でわかった。
いるかいないかで答えるとすれば、『いない』と答えるより他はない。
特別、彼等に逆らう気もなかったので首を振って否定すると、その答えを予想でもしていたのか、別の問いかけが向けられた。
「では娘。お前は、その人物の血縁者か？」
その質問には、すぐには答えられなかった。
何故なら、唯一の家族であった『母』が真の肉親であるかどうか、確証がまったくなかったからだ。
無条件に肉親だと信じられる程、母との間に情があった事はなく、暴力をふるわれたりはしなかったが、どちらかと言えば『生かされている』という状態に近かった。
「――　どうした、何故答えない」
威圧的な言葉に、どうしたものかと悩む。
物心着いてからずっと二人きりで暮らしてきたから、世の『家族』というものが実際はどんなものなのかはわからない。
わからないが――　自分の知る偏（かたよ）った知識の中ですら、たとえ血縁があったとしても、母との関係が特殊な物である事は確かだった。

彼等にそれをどう説明したらいいのだろう。それ以前に、彼等に語る言葉すら持ち合わせていないのだけれど。
「では質問を変えよう…お前は、ティスカ＝ナターラを知っているか？」
沈黙を困惑と受け止めたのか、質問が変わる。
その問いには答えられる。それは正しく、母の名だ。こくりと頷くと、それまで何処か張り詰めていた彼等の空気が僅かに緩んだ。
「…ならば娘。我等と共に来てもらう」
まるで拒否など有り得ないと言わんばかりの言葉。
何故と視線で問えば、全く予想もしていなかった返事が返って来た。
「我等が主、皇帝ロジアム様はティスカ＝ナターラという人物の行方を追ってこられた。どんな些細な手がかりも欲しておられる。陛下の御前で、お前の知っている事を全て話すのだ」
――　ロジアム。
その名に聞き覚えがあった。かつて母が口にした人名だ。
…いつか、ひょっとしたらその名の下に、誰かがやって来るかもしれない、と。
聞いた時はさほど重要だとは思わなかった。こんな辺境の、さらに人里離れた森の中にわざわざやって来る人がいるとは考えられなかったから。
だが、母の言葉は現実となった。
まさかこんな状況で、その名を聞く事になるとは思いもしていなかった。しかも――　聞き違いでなければ、その名を持つ人物が『皇帝』？
皇帝とは確か、この国を治める人物だったはずだ。素直に驚いた。驚いて――　本当に珍しい事だが、興味を抱いた。
自分の事もそれ以外の事も、何も語らなかった母。その人が名を口にした人物は、一体どんな人なのだろう、と。
…そしておそらくそこから、全ては始まったのだ。

＋　＋　＋

「…二年前でしたか？　あなたが陛下の下へ連れて来られたのは」
冷めた瞳に見下ろされながら、ルシカはただ静かにその言葉に耳を傾ける。
「ずっと疑問だったのですよ。明らかに血の繋がりなどないあなたを、何故陛下が『娘』として認めたのか――　こうして直接会うまでね」
ソファルと庭園で別れた後、自分に充（あ）てられた部屋へ戻ろうとしている途中で呼び止められ、半ば強引にここに連れて来られた。
縛（いまし）められている訳ではないし、本気で抗（あらが）おうと思えばおそらく逃げる事も可能だったろう。けれど、ルシカはそうする事もなく彼等に従った。
耳は声に向けながら、その視線は足元に向けられている。
床に描かれた複雑な文様。初めて目にするが、その用途は見るだけでわかった。
――　術力強化。
その陣によって、この部屋に高密度の魔力が増幅され、強化されている。
（…火、闇、そして地…他にもいろいろ……）
通常の人間の目には不可視のそれを、ルシカの瞳は読み取る。
それはさながら、無数の糸が絡まり合い、結びつき合って、網目のように張り巡らされた魔力の檻。ルシカはその中心に立たされていた。
「『死神の末裔（まつえい）』――　まさか、まだ生き残っているとは思いませんでしたよ」
耳慣れない呼び名に視線を上げると、冷めた中にも何処か興奮を帯びた何対もの瞳がルシカを見ていた。
それなりに広い室内の中、その場にいたのは老若男女、年代も性

別も様々な人間が陣を取り囲むように立っている。
人数としては三十にも満たないが、檻を形成する糸の一本一本が、一人一人に繋がっている事から、この場にいるのが全て何らかの術者である事は確かだ。
先程から一人言葉を紡ぐのは、彼等を統括する人物のようだった。ルシカはその男の顔から名前を思い出そうとする。
（…この人だったの）
肉の薄い細身の身体に感情を読ませない瞳。外見的には特に目を引く部分などないのに、何処か異彩を放つ人物。
確か名は――　アルノーン＝パラバ。
彼から紡がれる糸から感じ取る魔力は、その中でも特に珍しい。夜の庭で見た、離宮から王宮――　ソファルへと繋がっていた物と同じだ。
感応系――　人間や動物の精神を己のものと感応させる事で、外部から操作する異能。
使い方次第で、人の心を癒す事も逆に壊す事も出来る。おそらく普通の人間なら、この男の優位に立てる事はないだろう。
火や水といった自然界にある要素を用いない、数少ない系統の一つでもある。
もっとも、ルシカにそこまで専門的な知識はなく、ただそれが『ソファルを精神的に弱体化させ、呪いを刻める状況にしていた』ものである事がわかる程度だ。
「私も長い事様々な術系統を見てきましたが、『死神』に通じる物はほとんど得られなかった。それがまさかこのような形で目に出来るとは。世の中、わからないものです」
言っている言葉は半分も理解出来なかったものの、その言葉には素直な驚嘆があるように思われた。
その目は自分に向けられている。自分の何にそれほど驚く部分があるのか、ルシカにはわからない。アルノーンは訝（いぶか）しげなルシカに構わず、言葉を続けた。

「同時にようやく理解出来ましたよ。何故、陛下があんなにも短期間でレサイア復興を成し遂げ、世界屈指の大国と為せたのか……」
その目はルシカから、部屋に満ちる魔力へと向けられる。
「…思った通りだ。これだけの魔力に触れながら、人の身でそこまで魔力的に絶縁状態である事こそが証明――　ルシカ様、あなたは完璧な形代（かたしろ）だ。一体、その身にどれほどの呪因を持っているのです？」
やはりその言葉は専門的な用語が多すぎてさっぱりわからない。
元々、術者とはそういうものだと言えばそれまでだが、相手が『答えられない』と知っていて問いかけるのにどういう意味があるのだろう。
（……）
自分の身体に、何かがあると言うのは知っている。それこそ、それを為した当人――　母の口から告げられた事だ。

『お前はきっと、アタシを恨む事になるよ』

死の間際、そんなまるで予言めいた言葉と共に、何故自分を育てたのかを教えてくれた。
「私はこれでも、あなたの身の上に同情はしているのですよ」
今更のように善人ぶってアルノーンは気の毒そうに言った。
「実はあなたの父君に、好きに扱えと言われておりましてね。…それには生死も含まれるのですよ」
言葉こそ同情しているかのようだったが、口調には暗い喜悦が見えている。
ルシカはその言葉に、傷ついたような顔をすべきだろうかと悩む。そんな事はとっくに知っていると知ったら、この男はどう思うのだろう。
――　この地で役立って来いと、仮とは言え『父』に言われた娘を哀れだと思うだろうか？

だからアルノーンに呼び止められ、ここに連れられた時も抗わなかった。この自分が『役立て』る事と言えば、一つしか思い当たらなかったから。
けれどルシカにはその事実を伝える術はなく、ただ俯(うつむ)いて表情を隠した。
「生身の人間を形代とするなど、通常ではとても考えられませんが――あなたなら可能でしょう。我等の悲願を果す為、協力して頂きますよ」
その言葉に拒否する余地など最初からない。ルシカは心の内でため息をつく。
(――可哀想な、人達)
この人達も過去に取り付かれている。もう取り戻す事も、覆す事も出来ない過去という名の亡霊に。
きっと彼等は気付いていないのだろう。
ルシカは目を閉じ、思い描く。何処より深く澄んだ青を。
(ここは、とても綺麗な場所なのに)
一度は滅びかけた場所だと言う。けれど、そんな過去があるとはとても思えないほどに、あらゆるものがあるべき姿でそこにある。
『神に愛された地』――その名にふさわしい場所だと思った。
逆にここまで安定している場所では、中途半端な術は使えない。だからこそ、彼等はそれを補う為に陣を描き、『形代』を求めた。
形代を求めるという事は――すなわち、彼等は何かを呪い、滅ぼそうとしているということ。
確かに彼の言う通り、自分の身は形代としては最適だろう。その為に生まれ、そのように育てられたのだから。
(…可哀想な人達)
おそらく術が成功したとしても、行使するのが本来の術系統と異なる以上、何らかの綻びを伴う。そうなれば、彼等とて無事では済まないだろうに。
この国の美しさすら目に入らず、むしろ憎み、己を犠牲にしてま

でも復讐を果そうとする彼等を、ルシカは可哀想だと思う。
けれどルシカは同時に理解していた。
たとえそう思う事を彼等に伝える事が出来たとしても、彼等もおそらくこう言うのだろう。

――　それはお前が大切な物を奪われた事がないからだ。

遥か下界、大国の玉座に座る人が、かつてそう口にしたように。

第二十五章　しがらみ

――　採寸、という言葉に騙(だま)された。

てっきり、身幅とか肩幅を測れば解放されると思っていたのに、ソファルを待っていたのは、普段は服装に気を遣わない主を、ここぞとばかりに飾りつけようという謎の使命感と意欲に燃えるおばちゃん達だった。

「ソファル様は青がとてもよくお似合いで。仕立て甲斐があって、私達の腕も鳴りますわ！」

「前々から思っていたんですよ。国王となったからには、もうちょっと服装にも気を遣って頂きたいって」

「そうそう。ルフト様はあんな状況だったから仕方ないと諦めも出来ましたけど、ソファル様まで常に普段着なんてあんまりと言うものです」

手は休みなく動くが、その倍は口が動いている。

その勢いに圧倒されてほぼ為すがままになるソファルを、その手伝いをするフィリーは助けてもくれない。むしろ何処か楽しそうなのは気のせいか。

次から次へと、何処から持って来たのか大量の布地が取り出され、一々身体に当てられては色の映え具合を確かめる。それだけで、結構な時間がすでに費やされていた。

青はムージェンにとっては天に通じる神聖な色。その色を外す事は有り得ないが、青にも種々様々な色がある。

そのどれがソファルに一番合うのかと、お針子達は熱心にああでもないこうでもないと言い合っている。

――　青かったらどれでもいいじゃないか。

余程そう言いたかったが、そんな事を言えば、国王がそんな事でどうするのだと倍になって返って来るのは目に見えて明らかだった。

聞く限りでは、今回仕立てるのは時間がない事もあって正式な礼

装ではないらしい。
それですらこの状況…果して、正装ならば一体どれだけの時間と手間をかける気なのだろうか……。
おそらく近い将来、成人の儀で必要となるであろうそれを考え、今からソファルはげんなりとなった。
（…こんな事をしてる場合じゃないのに……）
果たしてルシカは見つかったのだろうか。
あれからそれなりの時間が経つが、そうした報告がないのは気を遣っている可能性もあったが、おそらくまだ見つからないのだろう。
ディネアも言っていたように、この王城でルシカの姿は目立つ。
この王城にはルシカほどの年齢の人間は他にいないし、何よりあの無機質な色彩はこの地では滅多にない組み合わせだ。いれば当然、誰かの目につくだろう。
ルシカが自分で姿を隠したのだとしたら――　理由の一つに自分の行いがあるのではないかと思う。…だが、もし何者かが連れ去ったのだとしたら。
（…無事だよな……？）
先程想像した最悪の結果を思い出し、ソファルは慌てて心から振り払った。
国王としては、おそらく最悪の事態も考えておかなければならないのだろうとは思う。けれど――　理解はしていても、とてもそんな事は出来そうになかった。
考えてしまったら、それだけ現実になってしまいそうで――。
「…心配なの？」
黙り込み、冴えない顔色のソファルに気付き、フィリーが耳打ちをする。
近くにいるお針子達の耳を気にしてか、その言葉は抑えた声音の上にとても端的だ。それでもその瞳に気遣うものを感じ取り、ソファルは素直に頷く。
誤魔化した所で、この聡い大叔母には伝わってしまうに違いない

のだから。
「そう…そうよね」
光沢のある青みを帯びた生地をソファルの身に当てながら、フィリーは微苦笑を浮かべる。
「――　もう少しだけ、辛抱してあげて。この人達はずっとこんな機会を待っていたんだから」
「え…？」
フィリーの言葉に、思わずソファルはその目を周囲にいるお針子達に目を向けた。今は生地選びと同時進行で、先程の採寸を元に一気に型紙を作り上げているらしい。
ソファルの目には複雑怪奇な製図を、恐ろしい速度で何枚も描き上げる様は、正に熟練の技。
それを元に顔を寄せ合って、これでは駄目だとか、ここを改良してはどうかとか話し合っている姿は、生き生きとして何処となく幸せそうにも見える。
（…ずっと、待ってた？）
腕利きと言うだけあって、彼女達は皆、相応の年齢を重ねていた。最も年嵩の者は六十近い。
父よりも前――　顔も知らない祖父の代から王城に勤めていた人々だ。
栄華を極め、『神の代行者』であった時代を知り、そして《大災厄》を生き延び、乗り越えた人々でもある。
「――　昔はね、今回位の規模の晩餐会なんて、それこそ毎月のようにあってたのよ。彼女達は国王とその妻、そしてその子供…彼等の衣装を縫う事が仕事で、その事にとても誇りに思っていた人達なの」
何処か遠い瞳で、フィリーは過去を語る。
「…でも、あの大災厄で彼女等の仕事はなくなってしまった」
「……」
生きるか死ぬか、国自体が滅びるかもしれないという時に、豪華

な衣装を縫ってはいられなかっただろう。そんな余裕もなかったはずだ。
大災厄が治まっても、その後の復興に必死で、他国との交流など完全に断たれていた。そんな状況で、晩餐会など執り行われるはずもなく――。
「ルフトとエラージュの式の時も、結局簡単に終わらせてしまったしね。…だから、明日はこの人達にとっても特別な晩餐会なの。その気持ちもわかるから、どうしても、と言われたら断れなくてね……」
だから無理矢理だとわかっていても連れて来たのだと、フィリーは済まなそうに微笑んだ。
そこまで説明されれば、この熱心さも納得は行く。今までこれという何かを修めた事はないが、磨き上げた技を長い事使う事が出来ない歯がゆさは何となくだが想像出来る気もした。
今のムージェンの状況を考えると、今後このような機会がいつやって来るかわからない。この期を逃しては、と思ったのだろう。
だが、同時に何となく疎外感のようなものを感じてしまう。
こんな日を待ち続けていたという事は、彼女達の中ではまだ『過去』は完全に風化されていないという事だし、それを自分は実感として理解出来ないのだ。
彼女達だって当然ムージェンの民で、ソファルが王として統べ、守るべき人々だ。けれど、どんなに頑張ったとしても、彼女達が知る『栄華を極めたムージェン』を取り戻す事はおそらく出来ないだろう。
…そこに歴然としてある温度差を感じ、ソファルは困惑する。
ムージェンの王となる事は、それまでの歴史を背負う事。
即位する時に覚悟はしていたはずだったし、今でもその気持ちは変わらない。けれど――　お針子達の向こうに、同様に『過去』を知る人間がまだまだたくさんいる事を感じ、ソファルは思う。
自分は果たして、彼等に認めてもらえる王になれるのだろうか――

―？

ソファルは横に立つフィリーに目を向けた。

おそらく、この時点で彼女達のような人々と接する事が出来たのは良かったのだろうと思う。

それを目的としてここへ連れてきた訳ではないのかもしれないが、ほんの少しだけフィリーに感謝の念を抱いた。

だがしかし、当たり前のようにここにいるフィリーだが、お針子達との接点がわからない。

随分と内情に通じてはいるようだが、かつて王女であった人――つまり、過去に置いてはソファルのように採寸を受ける側だった――が採寸を手伝っている事に、彼女達が疑問を感じていない事も謎である。

生まれた時から近くにいる人だが、今まで裁縫などしている姿を見た覚えもない。けれど、布を扱うフィリーの手つきにはぎこちなさはなく、むしろ慣れ親しんでいるようにも見えた。

その困惑が表情に出ていたのだろう、フィリーが再び何かを言おうとして口を開くが、それと時を同じくして、それまで熱心に話し合っていたお針子達から声が飛んできた。

「シリル様、ちょっといいですか？」

「まだ改良の余地はありますけど、大体の物が出来ました。一応見て頂けません？」

（…シリル様？）

どうやらそれはフィリーを示しているようで、フィリーの名は『フィリー＝シリル＝ドゥジニ』なのだからまったく間違いでもない。

だが、ソファルにはまったく耳に馴染みのない呼び名だった。

フィリーはその声に言いかけた言葉を飲み込むと、後でね、とソファルに囁くとお針子達の方へ行ってしまう。

自分の服のはずなのに、結果的に一人ぽつんと取り残されたソファルは、周囲に散乱する布地を眺め、次にフィリー交えて再び話し合い始めたお針子達に目を向けた。

（…えっと…まだ、帰っちゃ駄目なのか…な……？）

――　結局、ソファルが解放されたのはそれからかなり時間が経っての事だった。

第二十六章　黄昏の記憶

――　それはもう、遠い日の記憶。

「――　こんな所で何してるの？」

黄昏時の薄暗い部屋に探し人を見つけて声をかけると、彼は驚いたように振り返った。

「フィリー…？」

その表情を見て、フィリーは声をかけた事を後悔した。

慌てたように表情を取り繕ってはいたけれど、そこには明らかに苦悩の影があったからだ。

「もしかして探してた？」

「…ええ」

「ごめん、ちょっと…その、考えたい事があって……」

苦笑する顔にフィリーは何も言えない。その考えたい事が何か、言葉にせずともわかるから。

励ましも、慰めも。ましては逃げ道なんて差し出してあげられない。…だから。

「――　ねえ、本当に良かったの？」

「え？」

「本当は、嫌だったんでしょう。…『王』になるなんて」

「……」

他の誰も言わないであろう問いかけをすれば、その言葉に、彼は一瞬だけ素の表情を見せる。

あまりにも途方もない状況を前にして絶望している、若干十七歳の少年の顔を。けれどすぐに普段通りの笑顔を浮かべると、ゆっくりと首を振った。

「嫌じゃないよ」

「…いいのよ、本当の事を言っても。ここには私しかいないんだか

ら」
「本当だよ。正直、途方には暮れているんだけど――　嫌じゃないんだ」
前王が崩御してすでに半年。
王族に連なる者の誰もがその後を継ぐ事を躊躇する中、唯一立ち上がったのがルフトだった。確かに前王の直系であり、王の後継としては最もふさわしいと言えただろう。
――　だが、フィリーは思う。
今まで、妾腹というだけでその存在をろくに認識もしていなかったくせに、こんな時だけ王の子として認めるなど虫の良い話だと。
そんなフィリーの気持ちを感じ取ったのか、人の心に聡(さと)い所のあるルフトはもう一度繰り返した。
「本当に、嫌じゃないんだよ」
「でも…！」
「フィリーが怒ってくれるのは嬉しいよ。でも…モランが言ってくれたんだ」
「え？」
思いがけない所で知っている名前が出て、フィリーは目を丸くする。
「…あの人が何を？」
「――　今まで好きでなかったんだから、無理に好きになる必要はないって。王だからって、この国を愛する義務はないんだってさ」
「…無茶苦茶ね」
真面目な堅物とばかり思っていた人物なだけに、その言葉は到底信じがたい。件(くだん)の人物と、つい先日も意見が合わずに喧嘩した事も影響しているだろうが……。
「無茶苦茶だよ。しかもあの真面目な顔でそう言ったんだよ？　もしかして冗談なのかと悩んだけど、本気だったみたいで」
その時の事を思い出したのか、ルフトは楽しそうに表情を緩める。
中肉中背、顔立ちも平凡で目を惹(ひ)く部分はない、身分さえなけれ

ばごく普通の少年――　それが一般的な『ルフト＝スライ＝ムージェン』の評価だった。
その場凌ぎの即位、滅びへ一歩一歩近付くムージェンの、最後の意地を通す為だけの王だと誰もが思っている。
…この一年後には、そんな彼が民から『賢王』と呼ばれるようになるなど、誰が想像していただろう？
そう、ルフト自身は決して特別賢くもなかったし、特別理想に満ち溢れていた訳ではない。ただ――　一つだけ、フィリーにもモランにもないものを持っていただけで。
「『嫌いなら、これから自分が好きになれる国を作ったらいい』」
「え？」
「そう、言ってくれたんだ」
夕暮れの金を帯びた空色の瞳が、微笑む。
「それはいい考えだなあ、と思って。…フィリーも今のムージェンが嫌いだよね？」
「…ええ、大嫌いよ」
「だったらフィリーも考えてくれると嬉しい。フィリーが好きになれる国を。…みんなで考えたら、出来るかもしれないし」
それが言う程簡単ではないのは確かで、正直、『この国の為に』何かしたいとも思わなかった。
…でも。
目の前でにこにこと笑うルフトと、薄茶の髪をした堅物の顔を思い浮かべ、フィリーは苦笑する。
ルフトは特別な人間ではない。ただ、誰よりも懐が深かった。掴み所がないほどに、彼の内面は深くて、時にフィリーも不安になるほど。
どんなに虐げられようとも、空を映したその瞳は決して憎しみに染まる事はなく、澄んだ光を放つ。
たったそれだけなのに、それでどんなに励まされ、救われたか――　本人はきっと気付いていないだろう。

お人好しを絵に描いたようなこの若い国王とその親友は、それがどんなに困難で無茶と分かっていてもやろうとするに違いない。長い付き合いだから、その位はとっくに理解していた。
（…男って本当に単純なんだから……）
心の中でため息をつく。でも少しだけ、羨ましくもあった。
きっと、自分ではそんな事は思いつかなかっただろう。それ程にフィリーにとって、ムージェンはいっそこのまま滅んでも構わないと思える場所だったから。
それでも…彼等がこれから新しく作って行くだろうムージェンならば。
「そうね…確かにいい、考え方かもしれないわ」
おそらく、それは今までとはまったく違う物になるだろうし――この国で数少ないフィリーの信頼する人間である彼等が作り上げる場所なら、どんな形になろうと愛せるに違いなかった。

それはもう、遠い日の思い出。今もなお、心に焼き付いて離れない出来事。
その日、フィリーは心に誓った。彼が一から作って行く国を、ずっと見守って行こうと――。
…けれど今、彼はもう何処にもいない。

＋　＋　＋

窓の外はすでに夕暮れの様相だった。金色に輝く太陽は傾き、オレンジ色の光は長く続く廊下を照らしている。
その色に過ぎ去った過去を重ね、フィリーは視線を隣に向けた。
夕日に輝く金の髪や、優しげな顔立ちはまったく父親に似ていないのに、浮かべている表情はそっくりで可笑しくなる。
「…大丈夫？」
歩きながら、憔悴（しょうすい）しきったソファルに苦笑混じりに声をかける。

「……」
対するソファルは無言。
あれから後もかなりの時間をかけて生地が吟味され、ずっとソファルは拘束されたままだった。
ソファルの三倍は生きているはずのお針子達は、もはか神技としか言い様のない鋏捌(はさみさば)きで生地を切った後、鬼気迫る勢いで仮縫いへと突入した。恐るべき体力・集中力である。
一通り出来たらまた調整する必要があるが、それまでは別にいなくても構わないと先程ようやく解放されたばかりだ。
ソファルのやった事は、基本的に立っているだけで、時折指示があった時に腕を上げたりする程度だったのだが、何だかやたらと精神的に消耗した気がする。
そんなソファルに、フィリーはやれやれと肩を竦(すく)める。
「この程度でそんなにへたってちゃ駄目よ？　正装の時はこの倍はかかるんだから」
「……！？」
考えたくもない話に、ソファルは青ざめた。
無理だ。絶対に無理だ。とても耐え切るとは思えない。
その口よりも雄弁に語る表情に、フィリーは楽しげに笑った。
「ふふふ、そういう所もルフトに似たのね」
「…そうなんですか？」
思いがけない所で父の名が出て、ソファルは目を丸くした。
「ええ。…まあ、仕方のない部分もあるのよ。ルフトが成人した時は丁度《大災厄》の真っ最中だったし…上の二人が亡くなるまで、ほぼ見向きもされていなかった立場だったしね」
その話はすでに聞いた事のある話だった。
そもそもルフトの母は正妃でなく、大災厄が起こらなかったなら、国王になどなる立場ではなかったのだ、と。
「元々着飾る事には無頓着な方だったし、成人する時も正装を仕立てるなんて考えは欠片もなかったみたいよ。いざ、式が近付いても

用意しようとしないものだから、必死に逃げようとするルフトを捕まえて、軟禁状態の無理強いに近い形で仕立てたのよねえ。懐かしいわ」
フィリーにとっては懐かしい思い出のようだが、口にしているのは王族に連なる人間に対する仕打ちとはあまり思えない非道の数々である。
ソファルはすでに故人である父に、心の底から同情した。
「…さっき、あの人達が私の事を『フィリー』じゃなくて、『シリル』って呼んだでしょう？」
ふと思い出したように、フィリーがそんな事を口にする。
「意味はわかるわよね？」
「…はい」
ムージェンの王族は、本来の名と共に生まれた順番を示す名を与えられる。
ソファルの場合は『タミウ』、これは『最初、一番目』を意味する。ルフトの場合は『スライ』、これは『三番目』。そしてフィリーの『シリル』は――。
「…『六番目』。大災厄が起こるよりも前だけれど、ずっと私は『フィリー』じゃなくて『シリル』と呼ばれていたの」
沈み行く夕日の光が、隣を歩くフィリーの顔を照らす。
何処か暗いそれが浮かび上がらせるのは悲しげな表情。普段滅多に見せない表情に、ソファルは何事かと怪訝に思った。
「…ねえ、ソファル。国王になって、後悔していない？」
「――　はい？」
突然向けられた予想もしていなかった質問に、思わず立ち止まる。
「あの、どういう……？」
困惑を隠さないソファルの問いに、フィリーの歩みも止まった。
「ソファルが命を狙ったのは――　ムージェンに恨みを持つ人間だと聞いたわ」
「…はい」

夢を介しながらも、ぶつけられた憎悪の感情を思い出す。
無意識に右手で左手首に触れる。もうそこに痣はないが、まだそこに何かが残っているような気がして。
「あなたにとってはすでに過去でしかないけれど――　昔のムージェンは、本当にひどい国だったの。彼等の行いは、結局の所逆恨みにも等しいけれど…でも、それだけの事をされても仕方がないような事を、ムージェンはやって来たし、それはまだ完全に過去になりきれていない」
いつもおっとりとして、その癖に妙に鋭い、けれどエラージュ亡き今、最も近しい人――　それがソファルにとってのフィリーの印象だった。
だが、今。振り返ったフィリーは、今までに見せた事のない表情をしてそこにいた。
「あなたが頑張っている事はわかっているわ。良い王になろうと努力している事も知っている。そもそも、あなたに国王以外の道はなかったものね……」
小さく、ため息。
「このムージェンの事を好きだという事もわかるわ。…でも、昔の…『神の代行者』と呼ばれていた頃のムージェンの行いを知っても、そう思ってくれるのかしら……？」
淡々と言葉を重ねる毎に、フィリーの顔から表情が失われて行く。硬く凍りついたような表情に、ソファルは何と答えて良いのかわからなかった。
ただ、わかるのは――　おそらく、今までは故意に避けていたのであろう、大災厄前のムージェンの事を、大叔母が話そうとしているらしいと言う事だけだ。
「…出来れば、話さずにいたかったけれど。あなた自身薄々感じていると思うけれど…きっとこういう事はこれからも起こるに違いないのよ。ソファルはもう、この国の王だもの。そして…もう伝えられるのも、私しか残っていない」

決意を秘めた瞳で、フィリーは告げた。
「ソファル、あなたに――　命を狙われた理由をきちんと話しておこうと思うの」

第二十七章　天の裁き

「お帰りなさい、随分遅かったじゃない。時間がかかったの？」
「え。あ、うん…ちょっと」
執務室に戻るや否や、ディネアから声が飛ぶ。
確かに窓の外はすでに薄暗い。執務室の中も、隅に灯りが灯されている。
「…大丈夫？　顔色が悪いようだけど、そんなに疲れたの？」
よほどひどい顔をしているのか、ディネアが心配そうな顔をする。
ソファルは慌てて無理矢理笑顔を貼り付けた。
「大丈夫だよ。…それより、ルシカは？　無事に見つかったのか？」
ソファルの問いに、モランもディネアも首を横に振った。
「残念ながら収穫なしよ」
「そうか……」
何となく予想はしていたが、現実になると重さが違う。
「今は念の為、王宮の中も見て貰っているけど…離宮の中が怪しいと思うのよね」
腕組みしながら、ディネアが不満そうに漏らす。
使節団さえいなければ強制的に探す事も可能だが、彼等がいる間にそんな事をして万が一見つからなかったら、言いがかりをつけられたと思われても仕方がない。
友好関係を維持するつもりがある限り、思い切った事が出来ない。それがディネアには歯がゆいのだろう。
「ディネアとも話し合ったのですが…この際、下手に隠さず、この後にある打ち合わせで直接尋ねてみようと思っています」
「…ルシカがいなくなったって？」
「はい。このまま見つからずに、翌日になってしまうのは避けた方がいいかと」
モランの言葉に軽く驚くと、横からディネアも口を挟む。

「こちらに非があるのかもわからないのに、隠していても良い事はないでしょ？　私も同席するつもりだし、それとなく探ってみるわ」
「え？　ディネアが行くなら俺も……！」
「ソファルはここで待機。王宮を探してくれている人達がここに報告に来るのに、誰もいなかったら困るじゃないの。第一、打ち合わせ程度に軽々しく国王が出るもんじゃないわ」
「うっ。…それは、そうかもしれないけど……」
ディネアの言葉はもっともだが、ここでただじっと結果を待つのは辛い。
ルシカの事が心配だし、何より何もせずにいたら、そんな場合でもないのにどうしても考えてしまうに違いないのだ。
…つい先程、フィリーから聞いた過去のムージェンが行った罪業を。

＋　＋　＋

「まだ私が『シリル』と呼ばれていた頃、ムージェンはとても栄えていたわ」
場所を廊下から近くの空き部屋に移し、フィリーは静かに語り始めた。
「その頃、ムージェンの王は世界の王と等しかった。望めば何でも手に入ったし、出来ない事はほとんどなかった。それ位の力を持っていたの。それは知っているわよね？」
それは今のムージェンからはとてもではないが考えられない状況だ。
生まれた時から一般庶民とさほど変わらない生活を送っているソファルには、想像力を総動員してもどんな状況か思い描けなかった。
だが、フィリーの表情が優れない所を見ると、少なくともそれが決して良い事でなかった事は確かだ。
「今のムージェンしか知らないソファルには、きっと想像もつかな

いと思うけれど…大災厄が起こった頃には、王を筆頭に民にまで選民意識が染み付いていたわ」
――　それは時間にすれば、ほんの二十年程昔。人の寿命からすれば、短いとは言えないが、国の歴史からすればほんの僅かな時間だろう。
それでもソファルには、自分の知らない国の事のように感じる。先程のお針子達に感じた温度差と同じような感覚。
ソファルが知るムージェンは、まだ完全に復興しきれていなくても、未来を諦めない前向きさを感じさせる国だ。多少の貧富の差はあるものの、それでも差別的なものまでには至っていない。
過去と、現在。今までも幾度も耳にしたけれど、あまりにも違い過ぎて、一直線上に並ぶ事自体が信じにくかった。
けれどフィリーの語るムージェンも、ソファルが直接知らないだけで真実の姿に違いないのだ。
「王族の中でさえ、正妃の子と妾妃の子は同じ王の子でも扱いが違った位よ。私もルフトも、正妃筋の子ではなかったから、区別する為に数字で呼ばれたわ」
その言葉にはっとなる。
「…もしかして、『シリル』って……」
ソファルの視線を受け止めて、フィリーは頷いた。
「そう、だから先刻の人達は私を『シリル』と呼んだの。悪気があった訳じゃないわ。今まで話した事がなかったけれど、私の母は昔、王宮に仕えるお針子だったの」
（ああ、それで……）
謎が一つ解けた。フィリーの母が生きていたなら、おそらく今日会ったお針子達と同世代。彼女達はフィリーの母の同僚達だったのだろう。
「妾妃になっても、母には服を仕立てる事しか出来なかったから…生活は普通のお針子とあまり変わらなかったわ。子供の頃の私をよく知るせいもあって、彼女達にとっては、私は今でも『シリル』な

のよ」
苦笑の混じる言葉に、ソファルは何も言えなくなる。それを間違っていると言うのは、おそらく簡単だ。けれど――。
そもそも、お針子達がフィリーをそう呼ぶのは、ムージェンの王族がそう定めたからだ。だからおそらく、フィリーも正そうとはしないのだろう。
「それ位、自分達は特別だと思っていた癖に、ムージェンは『神の代行者』と言う名を持ちながら、何もしなかったの」
「…何も？」
「ええ、何も。せめてその名の通り世界を統治していれば、まだ良かったのだと思うけれど……。ムージェンがその名の通りの働きをしていたのは、ほんの数百年程度の話よ。それ以降は支配者のような顔をしながら、結局地上を放置していたようなものだった」
歴史はあまり得意ではないが、その言葉にソファルは学んだ事を必死に思い出そうとした。確かにそのような事は読んだ気がする。
（…確かあの本じゃ、地上があまりに乱れて天の声に耳を傾けなくなったからって書いてたけど……）
――だが、ムージェンで書かれた本に、ムージェンにとって不利な事が書かれているはずもない。選民意識が強かったと言うのならなおの事だ。
「そんな風に完全に野放しの状態だったのに、どうしてムージェンが大災厄が起こるまで我が物顔で地上を牛耳られたと思う？」
何処となく試すようにフィリーが問いかける。
フィリーの言葉通りなら、当然不満は募っただろう。
だがそれだけなら、ムージェンに従わなければ良いだけの話だ。管理しようとすらしていなかったのなら、独立だって容易だっただろう。
そこまで考えて、ふとソファルは思い出した。――今と同じ、夕暮れの赤に染まった荒涼とした大地を。
（…まさか……）

同時に耳に甦るのは、夢に現れソファルを殺そうとした影の言葉。

『…我が故国は、「天の裁き」に滅ぼされた』

「…天の、裁き……」

無意識の内に零れ落ちたその言葉に、フィリーは驚いたような顔になる。

「ソファル、知っていたの？」

「え？　あ、いや…それが何かはわからないんです。ただ…、殺されかけた時にそんな言葉を聞いて……」

しどろもどろに答えつつ、心は氷の刃を押し当てられたかのように冷たく痛んだ。

あの言葉が正しいのなら、ムージェンは何らかの力を行使する事で地上を支配していたという事になる。言葉でもなく、政でもなく…人の命を奪い、大地を焼く『力』で。

「――　結局、力で抑えていたという事ですか？」

「…そういう事よ。地上はムージェンよりずっと広いんだもの。傑出した人物が多く輩出されても不思議じゃないわ。そんな人々を中心に国が大きく育って、ある程度力をつけて来ると、当然何もせずに従属だけは強要するムージェンに反抗意識を持つでしょう。そこまでは持たずとも…今回のレサイアのように対等な関係を結ぼうとしたわ。でもそれを、ムージェンは頑（かたく）なに拒んだの」

それは『神の代行者』としての矜持（きょうじ）が許さなかった、と言うよりは、単なる我がままに過ぎなかった。

ムージェンの王族に根強くあった選民意識は、地上の民が彼等と同じ高さに来る事が許せなかったのだ。

そして――　地上が混沌としている事をいい事に、目障りな国を次々に滅ぼした……。

「『天の裁き』は、代々の王にだけ伝わる『神』の残したもので…結局の所、それが何なのか誰も知らないの。先々代の王――　ルフ

トの父親は、正統な世継ではなかったルフトには何も伝えなかったから、もうそれが何処にあるのかも定かではないわ」
でも…だからと言って、その行いはなかった事にはならない。
ソファルは改めて、自分の命が狙われた理由を理解出来たような気がした。
ムージェンを滅ぼすだけでなく、王であるソファルを殺そうとしたのは、彼等の国を滅ぼした物が、ムージェンの王にしか伝わらない事を知っているからなのだ。
「…ひどい国でしょう？」
自嘲するような口調でフィリーが問う。
それは同意を求めるようでいて、それだけではない。先程言われた言葉を思い出す。
――そんな過去を背負う事になっても、王になった事を後悔しないのか、と。
昨日の夜までは、覚悟できているつもりだった。
けれど、実際に死にかけて――ムージェンが何をやったのかを知った今、ソファルはすぐに答える事が出来なかった。

第二十八章　混沌

『でもね、昔、この国は…この大地はとっても美しかったのよ』

かつて、亡き母が語ったムージェンは、自然豊かで美しい国だった。

少なくとも、多くの地上の民を一方的に奪い、力で抑え付けて君臨してきた国ではなかった。

母にとって、そんな過去は口にすらしたくない事だったのか。それとも――　あえて避けてきたのだろうか？

もし後者だとしても、ソファルにはその行いを責められない。

フィリーが言うように、自分にはこの国の王になる以外の道はなかった。継ぐ前からこんな話を聞いていたら、ムージェンを先入観なしに捉える事が出来たかどうか。

…それとも。

エラージュは、思ったのだろうか。過去の行いを知らずに育つ自分に、まったくまっさらな国として手渡したいと。

そうかもしれない。違うかもしれない。…尋ねたくとも、もう母はこの世の人ではない。

即答出来ないソファルに、フィリーは静かな視線を向けた。

「…混乱するわよね。ごめんなさい」

「え、いや…そんな事は……」

「いいのよ。私は多分、あなたがそんな風に悩む事を期待していた気もするの」

「…はい？」

一体、今の言葉はどういう意味なのだろう。思わず聞き返せば、フィリーは微笑む。

「私は昔のムージェンが大嫌いだったから。ルフトが国王になった時も、本当は嫌だったのよ。…本人は何もしていないのに、そのせ

いで私にとって大事な人が苦労する事が。でも、ルフトは『嫌じゃない』って言ったのよ」

『本当は、嫌だったんでしょう。…「王」になるなんて』

『嫌じゃないよ』

それはフィリーの期待して答えとは違っていた。

同じようにムージェンの行いを快く思っていないと思っていただけに、すぐには信じきれない言葉だった。

お人好しな彼の事だから、義務感でそう言っているのだろうと。

けれど――　違った。

「きっとソファルの反応が普通なのよ。ルフトは単に、過去じゃなくて未来を見ていたからだったけれど。でも、ソファル。あなたは過去なんてろくに知らずに、選択の余地もなく王になってしまったでしょう。…その事が気にかかっていたの」

「…大叔母上」

「何？」

「それでもし、…父が、『王になんてなるんじゃなかった』と答えたらどうするつもりだったんですか？」

ソファルの問いかけに、フィリーは軽く首を傾げ、考え込むような表情を浮かべた。

一体どんな返事が返って来るのか。ソファルは答えを待った。

父の場合で尋ねたが、結局それはソファル自身にも置き換えられる。大叔母がどんな言葉を口にするのか気になった。

やがてフィリーはさほど悩んだ様子もなく、あっさりと口を開く。

「そうね。…『じゃあ、放棄しちゃいなさい』って唆(そそのか)したかもしれないわ」

「ええ！？」

「あら、そんなに意外？」

「い、あ、だって、その…そんな乱暴な……！」

いくら何でもそんな無茶な事を言い出すとは思わなかった。
一国の王という立場は、そんなに簡単に放り投げて良いものなのだろうか。…いや、多分良くない。
なのに、フィリーは特に大変な事を口にしたと思っていないように続ける。
「そんな事を言っても、ルフトもあなたも、どうせ『そんな訳には』って言うに決まっているの。二人ともどうしようもないお人好しなんだもの」
「……」
実際、そう思ってしまったソファルは否定出来なかった。
出来ないが――　どうしようもない、とつく限り、『お人好し』は誉め言葉ではない。実際、そういう意味でフィリーは言ったのだろう。
普段では出さないこういう物言いを聞くと、やはりディネアの母なのだとしみじみ思う。
「…だからこそよ。一人くらい、そう言ってあげてもいいでしょう？　エラージュはそんな事言わなかっただろうし、うちの人もソファルにまでは無茶を言わないだろうし…ディネアもトラムも、ムージェンの過去なんてろくに知らないでしょう」
その消去法で行くと、確かにフィリーしか残らない。
「きっとこれから先、あなたが進む道はルフトの比ではないくらい、理不尽な事も多いと思うの。それもあなた自身に原因がない事でね。それであなたが傷ついたり、…王になった事を後悔したりするかもしれない。…私はそうなって欲しくないのよ」
苦味の混じる言葉は、それがフィリーの本音である事を伝える。
それはきっと、実際にムージェンが過去に行った数々の行いを、間近で見てきたが故の事に違いない。
どんなにソファル自身に非がなかろうと、その行いを知る者がいる限りそれは過去にはなりきれないし、実際に復讐を遂げようと動く者がいる。

――　ふと、先程の庭園での事を思い出す。
あの時は、ただ目に見えない不特定からの悪意に疲れるばかりだった。先行きに不安も感じていたし、正直どうしていいのかもわからなかった。
それでも考えていても仕方がないから、ともかく動くしかないと思ったものの、どう動けば良いのかもわからなくて。
あの時と状況はまったく変わっていない。
むしろ理由を知っただけ、悪化しているとも言えるかもしれない。単純に相手を否定する事が出来なくなったのだから。
…それでも――。

＋　＋　＋

その後、考え込んでしまったソファルを気遣ってか、フィリーは再びお針子達の元へ戻ると言い、ソファルは執務室に戻った。
モランとディネアも打ち合わせに行ってしまい、今は一人きり。
――　王になって後悔していないか？
その問いに対しての答えは、不思議な位、簡単に出ては来る。
（後悔は、ないなあ……）
確かに命を狙われたり、毎日書類と睨めっこしなければならないし、着慣れない正装とかしないとならなくなったりもしたけれども。
フィリーが恐れるほど、ソファルの中にはそんな感情はなかった。
（…だって、まだ何もしてないし）
受け継いだばかりの地位にふさわしくなろうと努力する段階で、国王としての仕事をやったという実感がない。
詰まる所、ソファル自身がまだ自分が『国王』としてふさわしいと見なしていないのだ。
それに、どんなに暗く重い過去を抱えているとしても、ソファルにとってムージェンは大切な国に変わりはない。
亡き母がどんな考えで『美しい国』を伝えたのかはわからない。

けれど、それはそのままソファルの理想になった。
今のムージェンが好きだからこそ、このまま終わらせたくはないと思う。だからこそ、滅びを求める者から守りたいと思う。
…なのに、フィリーに即答出来なかったのは。
その思いが、ムージェンを憎む人々を無視する事に繋がる気がしたからだ。
（謝って済む問題じゃないし…分かり合うなんて、虫がいいと思うけど……）
どちらかが滅ぶ事でしか本当に解決しないのだろうか。誰一人、何一つ失う事なく、解決出来る方法は本当にないのだろうか？
現実は思うほど甘くはない。それでもそう思わずにはいられなかった。
今は何処にいるのかわからないルシカを想う。
王宮の中を捜索しても、きっと何も出てこないだろう。そんな確信はあった。
ルシカもまた、過去の因縁に巻き込まれているのだろうか。関わってはいけないと伝えてきたのは、それを知っていたから？
目に見えない場所で、何かが目まぐるしく動いている気がしてならない。
おそらく、それは誰にとっても良い結果ではないだろう。そんな嫌な予感ばかりが募る。
…どうしたらそれを変える事が出来るのだろう？
ソファルは一人、答えの出ない問いをひたすら考え続けた。

第二十九章　追憶の行方

夕闇に沈み行く世界。
群青の空に残る赤い残光を眺(なが)め、彼の瞳は暗く沈む。
夕暮れは彼にとっては痛恨の記憶を呼び戻す。為す術もなく居場所を失い、己の無力さを思い知った日の事を。
――　あの日の事は今もなお薄れる事なく、記憶の奥底に焼きついて離れる事はない。
術者の中でも特異な部類に入る彼の一族は、他の術者と異なり各地へと散らばり、その能力によって特権階級に重用されてきた。
今も探せば、地上の何処かに幾人かは生き残ってはいるだろう。わざわざ探す気も、必要もないが。
己一人いれば、事足りる。
彼――　アルノーンの生まれた地は、地上においては北東大陸と呼ばれる場所だ。
今はベネディスという国が支配しているが、二十年以上前、そこもやはり大小様々な国が興(おこ)っては滅ぶ事を繰り返していた。
彼が生まれ育ち、そして最初に仕えた国は、北東大陸の西半分を支配する、特に力を持つ国だった。
もう、歴史に埋もれたその国の名を知る者がどれほどいるかもわからない。それでもその国を襲った悲劇は、今も痕跡を地上に残す。
――　ジルデ灰白地帯。
北東大陸西部に広範囲に渡って残る不毛の無人地帯。それこそが、かつてそこにあった国の成れの果てである。
完全に焼き尽くされた大地は、そのまま白い灰の大地となり、植物も動物も…人も暮らせない場所になった。
再生するまでに、一体どれほどの時間を要するのかさえわからない。いや、再生可能かどうかすら……。
アルノーンが助かったのは、たまたま国を出ていた為だ。

ジルディン――　それが彼が仕えていた国の名だった――　の王は、東部の国々に同時に戦を仕掛けられていた。いくら武勇を誇る国であろうと、割ける人員は限られていた。
直接の戦闘では役に立たない彼は幾人かの同族と共に、密かに敵国へと入り、内部の混乱を誘おうと試みた。
それは功を奏し、いくつかの国は指揮系統を乱してジルディンは勝利を収めた。このまま勝利を収めて行けば、北東大陸全てを手中にするかもしれない――　そんな事を考えさえした。
…だが。
まるでそれを嘲笑(あざわら)うかのように、光の雨はジルディンに降り注いだ。
最初に王都。次に地方都市。そして最後に――　戦場へ。民一人残さぬとばかりに、光は大地を、人を焼いた。
最も多く光が降り注いだのは王都で、結果としてそこを中心にしたジルディンの国土の三分の一ほどが灰と化し、当然ながらジルディンは滅んだ。
誰がそれを為したのか、考える必要すらなかった。そんな事を出来るのは、この世界には一国しかないのだから。

――　天に浮かぶ大陸、ムージェン。

そのような行いは、初めての事ではない。すでにそんな風に滅んだ国はいくつもあった。
だが――　大地に不毛の跡を残すほどに徹底的な攻撃は、それまでの過去にない事だった。その後もそこまでしなかった事を見ると、何かしらの意図があったのだろう。
だがそんな事を言っても意味はない。もう、ジルディンは歴史からも地図の上からも消えたのだ。
己の無力さを噛み締めながら、北東大陸を二部する山脈を超え、同族達と失われた大地を見た。夕日に赤く染まった世界に、敵も味

方も全て息絶え、骸を晒していた。
さらに王都まで進もうとしたが、冷め切れぬ大地の熱に妨げられ、足を踏み入れる事すら叶わず、ただ陽炎に揺れる大地を呆然と眺めるしか出来なかった。
そこには彼の家族もいたし、忠誠を誓った王もいた。ひょっとしたら、妻となったかもしれない人も。
その頃の彼にとって大切なものを全て奪った国に、今、自分が立っている事がひどく愉快で滑稽だった。
ついに来たという感情と、こんな所へ来てしまったという感情の狭間で、冷めた己は自嘲する。
（そしてここを滅ぼして、何になると言うのだろうな）
理性では、とっくにそんな結論には達していた。けれど、本能はそれを許さない。奪われた分だけ奪わなければ、治まらない。
ジルディンを失った後、二十年近く各地を放浪し、その術を捜し求めている間に、同じようにムージェンの行いに憤る者や復讐を願う者に巡り合い、いつしかそんな者達を束ねるような立場になっていた。
その頃だ。レサイアの皇帝、ロジアムと会ったのは――。
（…結局、あの方が何を考えていたのかわからないままだったな）
人の心の内を読み取り、意のままに操る異能を持つ彼が、今まで唯一、心の中が読めなかった人間。
いや――　もう一人いた。
窓から目を離し、室内に戻す。すでに暗闇に沈みつつある広い部屋の中央に、一人蹲る人物に目を向ける。
眠っているのか、抱えた膝に頭を乗せて目を閉じている、幼い少女――　ルシカ。それが心を見透かす事が出来なかったもう一人の人間の名だ。
皇帝ロジアムから、ムージェンに行くならば好きに使えと託された時は気付かなかった。こんな子供が何の役に立つのかと思ったものだ。

だが……。
彼の目には見えないが、ここにはあらゆる魔力が満ちている。肌で感じ取れるほどのそれは、術者であっても気を抜けば引き摺り込まれそうになる。
すでに同士の大部分はそれを恐れて退室している位だ。それだけの魔力の集まる中心にいながら、ルシカは特に変化を見せない。
その灰色の髪を無感情に眺めながら、アルノーンは思い出す。
広いようで狭い、術者の世界。様々な術系統が存在するが、誰もが触れる事を避ける術系統が存在する。
一つはすでに名すら伝わらず、詳細すらわからないもの。ただ、『在るらしい』とだけ伝わっているのみ。
一つは風の術系統。その場にいながら世界の全てを識(し)り、あらゆる系統の上位に位置するとされているが、すでに数百年に渡って存在自体を確認されていない。
そして最後が――『死神』。
最初から存在していた訳でもなく、ある一人の術者によって生まれたとされる術系統。代償と引き換えに、滅びを齎(もたら)す呪われた術。
その性質により術者の世界から禁忌とされ、永久追放された『死』の術系統である。
いずれもすでに絶えたとされており、実際、今ではその痕跡は何処にも見られない。前者二つに関しては最初から伝説のようなもので、存在自体が眉唾だと思われてさえいる。
だが、最後の一つは。
歴史の裏で密かに動き、少なくとも二十年ほど前までは『実在』していた事が確認されている。
彼等は『死神の末裔』と呼ばれ、忌避されると同時に、畏怖を向けられていた。だが、その微かに残っていた足跡はある時を境にぷつりと途切れる。
術者の世界から追放された彼等に何があったのか、誰にもわからない。

だが時期的な事を考えても、術者達の間では《ムージェンの大災厄》は彼等によって引き起こされたと考えられている。すなわち、人災であったと。

――　その代償が、一族の滅亡だったのではないかと……。

事実、その頃に異様な魔力を感じ取ったという証言も多数残っている。

『死神』の術系統の詳細は闇に包まれ、ほとんどわからないが、代償を必要とする事から彼等が『形代』を使用していた事はわかっている。そしてそれが――　人形や石などではなかった事も。

他の術系統でも使われる事があるが、基本的にその役割は術が破綻した際に、術者へ『はね返って来る』ものを代りに受ける事が目的だ。

詰まる所それは保険であり、破綻する場合を想定してのものという事になる。だが――。

目の前にいる少女は、人の身で形代としての条件を満たしている。こんな事をやろうとするのは、ただの人形程度では抑えきれない術を使う事を前提しているとしか考えられない。

この地上で実際に存在し、そのような大きな代償を必要とするのは死の術系統しか有り得ない。おそらく、それこそが『死神』が永久追放される直接の理由だったのだろう。

（…狂っている）

もし、死の術系統が他と同様に、『はね返る』ものを代りに受け止めるものとして形代を使うのならば、彼等は滅びの代償に人の命を捧げてきたという事になる。

そうでなくても、術の媒介や核として生身の人間を使う事など常識では有り得ない。

人の命を奪う為に、別の人間の命を贖（あがな）う。それは術としては正しいが、人の有り様としては邪道であろう。

彼とて自分が正気であるとは断言出来ない。

少なくとも、再びこの地に大災厄を招き、直接ジルディンを滅ぼ

した訳でもない人々諸共に滅ぼそうとする事は、正常な精神状態とは言えないだろう。
それでもそう思ってしまう。なんと惨(むご)く、そしてなんと歪んだ術なのだろうと。
だがそうは思っても、アルノーンはこれから起こるであろう事を止めようとは考えていなかった。
絶えたと思われた術系統の末裔――　完璧な生きた形代。これさえあれば、術の精度は格段に跳ね上がる。
かつての大災厄がどのようにして招かれたのかはわからない。そもそも己以外の術系統の本質を理解するなど不可能だ。
だから彼等は異なる術系統を縒り合わせる事で、この大陸に満ちる『力』の流れを完全に狂わせようとしていた。
うまく行けばこの大地は二度と作物をつけず、水は失われ、飢餓と乾燥で苦しむ彼等に絶望と狂気が襲いかかるだろう。
それだけの術を組む以上、失敗すればおそらく命はないだろう。成功したとしても、何が起こるか予測がつかない。だが、それも覚悟の内だ。
控えめに扉を叩く音がアルノーンを現実に引き戻した。
「アルノーン様、そろそろお時間が」
「そうか、わかった」
これから明日の晩餐会の打ち合わせをムージェン側の代表者――おそらく宰相だろう――　と行う予定だ。
ふと見ると、ルシカが顔を上げていた。
「…気になりますか？」
「……」
ルシカは彼の言葉に沈黙を返し、やがて首を横に振った。
「そう言えば、先程から人が落ち着かないようです。…あなたを捜しているのかもしれませんね」
ルシカは答えない。口が利けないのだから当然だが、アルノーンは構わず話しかけた。

「ムージェンの今の民は、国王同様、随分とお人好しのようですな」
こちらを疑っているであろう事はとっくにお見通しだ。
強制的に離宮内を捜索すれば、この部屋の有様を知られたかもしれない。だが、そうしないだろうというアルノーンの予想は当たった。
初日と、昨日の夕食時に顔を合わせた国王を思い出す。
(…まだ、十五歳だったな)
即位して日が浅い事もあるだろうが、まだ成人前のせいかアルノーンから見ると随分初々しい国王だった。
だが、彼の問いかけを宰相にすぐに丸投げにはせず、まず自分で考えようという姿勢はこの国を憎む彼にも好感が持てる姿だった。
――ムージェンの王族が、全てこのような人間だったなら。
今となっては考えても意味のない事を、ふと考えてしまう程に。
「…今夜にも術は完成します。それまでは御不自由をかけますが、ご容赦を」
やはり今更としか言えない彼の言葉に、ルシカはただ静かな視線だけを返して来る。
彼の力をもってしても、心の奥底を見通せない少女のその瞳が、何処か憐れんでいるような気がして、彼は珍しく微笑む。
この少女は気付いているのだろう。気付いていなくとも、感じ取っているのだろう。
彼が最初から、生きてレサイアに帰る気がない事を――。

第三十章　転化

（…本当に上手(うわて)だわ）

モランとアルノーンの間で順調に進む打ち合わせに耳を傾けながら、ディネアはそんな感想を抱いた。

父であるモランから聞いてはいたが、ここまで己の手の内を見せないとは思わなかった。

感情を読ませない瞳に、口調は慇懃無礼(いんぎんぶれい)にぎりぎりならない程度の丁寧さ。人としての温かみは感じられず、完璧に『仕事』としてこの場にいるのだと言わんばかりだ。

早めに部屋に来ていた事もあり、アルノーンが後から来た形になったが、その際ディネアの紹介をするにあたっても、普通なら気にしそうな事（たとえば、何故ディネアが同席するのか）は一切聞かずに、挨拶を交わしただけだった。

ディネアが一人増えた所で何も変わらないと言外に言われたような気がして、正直なところ心穏やかとは言えなかったが、ディネアは自分を抑えた。

（これほど胡散臭(うさんくさ)い人間はいないと思うけど……）

とてもではないが、誰かを『祝い』に来た人間には見えない。もっとも、だからと言ってそれだけで疑う訳にも行かない事くらいはわかっている。

ソファルの命を狙っているのは、使節団の人間である事はほぼ確定的だと思うが、それが誰なのか確証がなければただの言いがかりだ。

（動機は…ムージェンへの恨み、これは決定事項よね。犯人は不明…単独犯なのか複数犯なのかもわかってない。さらに証拠もなし）

しかも犯行現場がソファルの夢の中なのだから、お手上げとしか言い様がない。

本当に完全犯罪じゃないの、とディネアが心の中で唸った時、打

ち合わせが一通り終わったのか、不意にアルノーンが口調を僅かに変えて口を開いた。
「…時に、一つお尋ねしたかった事があるのですが」
「何か？」
一体この場で何を言い出すのかと、モランも微かに困惑を見せる。
「どうして、大災厄の際、ムージェンの民は地上へ逃げようとなさらなかったのでしょう？」
日が完全に落ち、とても明るいとは言いがたい中、元々乏しいアルノーンの表情からはその言葉が意図する事までは掴めない。
その質問はまったく予想外のもので、ディネアは父であるモランがどう答えるのかと興味を抱いた。
大災厄が収束する頃に生まれたディネアには当時の事はほとんどわからない。だが、確かに民や貴族階級に属する者が地上に逃げたとは聞いた事がなかった。
未曾有の災厄を前に、自分だけは助かろうと逃げ出した人間が多くいても不思議ではないのに――。
「…それは、歴史学者としての興味ですか？」
やがてモランは何処か硬い口調で問い返した。
気軽には答えたくないのか、単に思い出したくないのか…それとも別に理由があるのか。その表情はいつになく暗い。
「単なる好奇心からならば……」
「いや、そういう訳ではありません。…滅亡するかもしれない危機に遭遇しながら、何故、地上に助けを求める選択肢を取らなかったのかと思いましてね」
「……」
「今後、我が国とやり取りがあるようならば、今のムージェンに地上に対してどのような認識があるのかお聞きしておきたい」
あくまでも外交的な目的だと告げる言葉に、モランはしばらく沈黙した。
ディネアも過去のムージェンが地上の国々に対して、差別的とも

言える態度を取っていた事は知っている。
アルノーンは今もそのような感情が、この国に残っているのかと尋ねているのだろう。
（…ない、とは言いがたいわね）
母のフィリーと共に、滞っている地方の業務代行をしている身だ。民と触れ合う事もある。
大災厄を経験した事で、ほとんどの人間は目の前の事にしか意識がいっていない為、結果として過去にあったであろう地上への差別的な感情はないようには見える。
だが、再びこの地が豊かに戻った時、彼等の心にかつてあった感情が甦らないとは限らない。
「確かに…あの時、地上に逃げようとした人間は多くいました」
やがて口を開いたモランの言葉には苦笑が混じっていた。
「けれど、結局逃げられなかった」
「逃げれられなかった？」
思いがけない事だったのか、初めてアルノーンが軽い驚きを示した。
「それは一体、どういう意味ですかな」
「――　真っ先に逃げようとしたのは、当然ながらそうした能力を持つ人間でした。地上との繋がりを持つだけに、地上に対しての意識も他の者に比べれば差別的なものではなかったようですし、彼等の行いは責められません。彼等は家族を守ろうとしただけですからね」
「…なるほど」
「しかし、実行に移す前に全て災厄で命を落としたと聞いています。現在、ムージェンにいる渡し守はその時にまだ子供だったか、その後に生まれた者ばかりです」
後は特に説明がなくても予想は出来る。
地上へは渡し守の繋ぐ《道》なしには行く事は出来ないのだから――。

「だから逃げ出す事は実際、不可能だったのですよ。地上に助けを求めようにも出来ない状況でしたし…当時の王族は、自らが滅びようとそんな事はしなかったでしょう。…大災厄より以前、ムージェンが何を行っていたのか、あなたの方がご存知なのでは？」
何処か挑発するような最後の言葉に、アルノーンは薄く笑うだけに留めた。傍で見ていても、心の奥底が凍えるような冷たい笑みだった。
その笑みを真っ向から受け止め、モランは問い返す。
「私こそお聞きしたい。レサイアは『悲しむべき歴史』を、本当に過去の物に出来るのでしょうか？」
突きつけられた問いに、アルノーンは即答しない。しかし、それまで感情らしきものを見せなかったその目に、何処か楽しそうな光が揺らいだ。
「…それは、私の口から申し上げる事でもないでしょう。陛下の御心は私にも図りかねますからな」
しかし、とその言葉は逆接に繋がる。
「私が今この地に立っている事自体が、貴国の答えなのだと私は認識しております」
かつてならば、宰相との会談とて余程でなければ許されなかった。同じ高さに立つ事を許さず、数多くの国々を一方的に滅ぼしてきた過去を思えば、今のムージェンの在り方が以前と全く違う事は明らかだ。
本心からかどうかはわからないながらも、ムージェン側の変化を認める言葉に、モランの表情も心なしか緩む。
「では、打ち合わせはこれで終わりですかな」
「あ、あの…！」
他に話す事はないだろうと告げる言葉に、ディネアは咄嗟に声をあげていた。
アルノーンの目がまともに向けられる。最初の挨拶以降、ディネアの存在などないかのような態度を見せていた男の視線に反射的に

身構えつつも、ディネアはその目を見返す。
　このまま話を終わりにする訳には行かない。ルシカの不在について話しておかなければならないのだ。その意図を察したのか、モランもディネアを制しない。
「…何ですかな？」
「ルシカ様の事です」
　名を出した事でどんな反応をするかと注意深く見るものの、アルノーンの表情は特に変わらなかった。
「ルシカ様がどうなさいましたか？」
「今日、ご挨拶に伺ったんです。レサイアから来られた方がどのような方か気になりましたし……」
　さりげなく牽制を込めた自己主張をしつつ、ディネアがさらに言葉を続けようとした、その矢先。
「ああ…そう言えばお伝えするのを失念していましたな」
　たった今思い出したといわんばかりに、アルノーンが口を開く。
「ルシカ様ならば、我等の元にいらっしゃいますのでご心配なく」
「…え？」
　思いもしなかった言葉に、ディネアは言葉を失う。まるでその表情の変化を楽しむように、アルノーンは繰り返した。
「連絡が遅れて申し訳ないが、ルシカ様なら我等の元におられます。慣れない環境で体調を崩されたようでしてね。我等の医師が看ておりますので心配は無用です。明日の晩餐会には問題なく出られるでしょう」
「そ、そんな重要な事……！」
　忘れていたで済ませて良い内容とは思えない。昼間からずっと、ムージェンの人間が探し回っていた事くらい気付いていたはずだ。
　食ってかかろうとするディネアをモランが間に入る事で制する。
「…医師ならこちらにもおります。そのような時は一言言って頂きたいのですが？」
「申し訳ない。軽い疲労程度でそちらの手を煩わせる事もないだろ

うと考えたのですが…決してそちらの医師を信用していない訳ではないので、誤解しないで貰えると助かりますな」
　表情こそ、申し訳なさそうなものを浮かべているが、口調にはそれ以上の追求を許さない強さが漂う。それを振り払うように、ディネアは問い質した。
「本当に、ただの疲労なんでしょうね？」
「…ディネア」
「昼間まではそんな様子はなかったようですけど？」
「ディネア、黙りなさい。アルノーン殿、娘が失礼いたしました」
「お父様……！」
　アルノーンの言葉通りであるなど、とても信じられない。ディネアには白々しい嘘としか思えなかった。はいそうですかとは、とても頷けない。
　それでもそれ以上の追求を封じるモランに苛立ちの視線を向ければ、モランはいつになく厳しい視線を返してきた。思わず咽喉まで出かけていた言葉を飲み込む。
（お父様？）
「いや、モラン殿。御息女が疑われるのももっともです。お気になさらず。…ディネア殿でしたか？」
「…はい」
「年齢の割りにしっかりしておられる。さぞ、国王陛下も頼りにされている事でしょうな。…ですが」
　一度言葉を切り、アルノーンはその目元に冷たい笑みを浮かべた。
「もう少し、状況を見る目を養われた方が良い」
「…っ」
　その瞬間、冷たい手で心臓を掴まれたような錯覚を感じ、ディネアは息を飲む。気圧されたともまた違う。だが、その一言でディネアは言葉を封じられていた。
（何、これ……？）
　顔色を失い、沈黙したディネアを一瞥し、アルノーンはモランへ

と一礼するとそのまま退室して行く。
その背が扉の向こうに消えてしまうまで、ディネアは言葉を発することが出来なかった。
「…ディネア、今のはお前が悪い。少し事を急ぎ過ぎだ」
疲れたようなモランの声で、ようやく強張りが解ける。
「で、でも…お父様。あんないかにも『怪しめ』と言わんばかりな事を言われたら…！」
「そうだな。…つまり、もうあちらは隠す気がないという事だ」
「……」
思わずまじまじと父の顔を見つめる。隠す気がないという事は――。
「まさか、使節団自体が……？」
可能性としては有り得ると思いつつも、出来れば外れて欲しかった予想だ。
「全員がそうだとは限らないが、少なくともアルノーン殿は関係者と見て間違いはないだろうな……」
代表者が関係しているとなれば、個人の怨恨という事は考えにくい。今まで隠していた手の内を僅かながら見せたという事は――これから何かしらの動きがあると言う事に違いない。
「…お父様、ルシカ様は本当に疲労だと思う？」
「いや。だが、身柄があちらにある事は事実なのだろう。…そこにどんな意図があるのかは定かではないがね……」
苦々しく呟き、モランは考え込むように視線を落とす。
何処か悔恨（かいこん）が滲（にじ）む表情を怪訝に思いつつも、ディネアもまた、父の言葉に考え込んだ。
これから執務室で待つソファルに、一体どういう風に今の内容を伝えたら良いのだろうかと――。

第三十一章　それぞれの月

しんと静まり返った室内。太陽が去って、代りに月が天を支配する時間。

一般の民なら丁度、夕食後の団欒の時間が営まれている頃合だろうか。

エラージュが生きていた頃も、親子でゆっくりした時間を過ごす事など滅多になかったが、その母が亡くなった今、共に過ごすような人はいない。ソファルは一人自室にいた。

窓から部分的に欠けた月を寝台に腰掛けてぼんやりと眺めながら、小さくため息をつく。

今日一日で、あまりにも色んな事があったと思う。

ディネアとフィリーの帰還、庭園でのルシカとの遭遇、痣の消失、そしてルシカの失踪。

今までおぼろげにしか知る事のなかった、過去のムージェンの行い。そして先程モランとディネアから齎(もたら)されたアルノーンの言葉――。

心の整理がつく前に次から次へと状況が変わったせいか、静かな部屋に一人だと言うのに何となく落ち着かない。疲れているはずではあるのだが、睡魔も訪れそうになかった。

少しでも気を休めようと、ごろりと寝台に横になってみる。

（ルシカは…無事なのかな）

せめて今だけでも何も考えずにいようと思うのに、それでもつい考えてしまう。

アルノーンの元にいるらしい事が明らかになったが、ソファルもルシカが疲労で体調を崩したという理由は信じられなかった。

昼間に会った時、そんな様子は見られなかったからというのもある。だが、それ以上に確信に近い思いがあった。

――　ルシカには、何か秘密がある。

それが具体的にどのようなもので、自分にとってどんな意味を持つものかまではわからないけれども。
ルシカが姿を消したのがソファルの腕から痣を消した後だった事を考えると、自分の命を滅ぼそうとする者から『邪魔した』と見なされても不思議ではない。
その為に身柄を捕らえ、これ以上邪魔しないようにしたのではないだろうか？
そう考えると居ても立ってもいられず、すぐにでも離宮に向かおうとしたものの、モランとディネアに引き止められ、結局諦めた。
本当にルシカがアルノーン達の元にいるのなら、下手に動いて相手を刺激するのは得策ではないというのが彼等の意見だ。
モランはアルノーンが関係者だと判断した。何処まで関わっているかはわからないが、おそらく中心的な位置にいるだろう、とも。
確かにそう考えれば、彼の態度にも納得の行く節もある。だが、そうだとしてもわざわざルシカの所在を明らかにした事は謎だ。
（単にこちらの油断を招こうとして？　…そういう事を考えそうな人だったけど……）
それとも、ルシカが手の内にある事を示して牽制（けんせい）しているのだろうか？
実際、ソファルは思い切った行動に出られずに終わった。おそらく、もやもやとすっきりとしない感情が治まらないのはそのせいでもあるに違いない。
アルノーンという人物は、初対面の時から何を考えているのかわからない印象が強い。彼が関係者なのだとしたら、彼もまたムージェンに何らかの恨みを抱いている事になる。
…フィリーから話を聞いてから、前夜に影が口にした言葉が事ある毎に思い出す。
自らが生きる場所を為す術もなく一方的に滅ぼされるというのは、一体どんな思いなのだろう。ソファルにはまったく想像が出来ない。
二十年近くの年月を経てもなお消える事のない憎悪の深さを思う

と、その底知れなさを恐ろしいとも思う。人の一生は長いとは言えず、二十年と言えば子が大人になるだけの時間だ。
長く長く縛り続ける怨嗟（えんさ）の思い――　そんなものを抱く人々の中にあって、ルシカはどうしているのだろうか。
晩餐会の事まで口にした以上は、命に関わる危害は加えられていないのだと信じたい。
まだ、謝っていないのだ。無意識の行動だったとは言え、拒絶するような反応をしてしまった事を。
ルシカはそれでいいのだと言ったけれども、ソファルは納得していない。関わるなと言われても、気にかかるのだから仕方がない。
（謝って、そして…お礼も言って……）
結局、最初に会った時に言った『ムージェンを案内する』という事も実行出来ていない。それ所ではなかったのは確かだが――。
ルシカは自分を守ろうと思ったのだと言った。そして実際、助けてくれたのだ。
（…だから今度は、俺が）
果たして明日何が起こるかわからないが、それで何らかの決着は着くだろう。
もし、それにルシカが何らかの形で巻き込まれているのだとしたら、今度はこちらが助ける番だ。
ルシカのような不思議な力など何一つ持っていないし、相手は呪いをかけてくるような人間だけれども。何か出来る事があるのだと、信じたかった。
寝台から見上げる月は遥か天上に。たとえムージェンが地上よりも天に近かろうと、天そのものに触れる事は叶わない。
不可思議な術を使う人間に普通の人間が対抗する事は、確かに簡単とは言えないだろう。けれども相手が『人』である限り、天に触れる事に比べれば不可能ではないはず。
彼等の願いが、このムージェンと王である己の滅びにあるのならなおさらだ。

（一生に一度くらい、奇跡を起こせたっていいじゃないか）
トラムだっただろうか。何かの機会に言っていた。運を引き寄せる事も才能なのだと。
ムージェンが滅ぶ事も、自分が死ぬ事も、誰か他の人が傷つく事も嫌だ。それは我が儘かもしれないが、それだけは譲れない。譲りたくない。
（――　勝ち取ってやる）
もうすでに賽（さい）は投げられている。だからと言って、全てを天に任せる気はなかった。
方法なんてわからないし、出来る事もさほどないだろう。それでも強く強く、心に思い描く。
全ての人間にとって、良い結末があるとは思えない。それでもせめて、未来に可能性のある結末が齎（もたら）される事を。
己に出来る最大限の努力を払い、これから起こる出来事を良い方向に引っ繰り返す。それがどんなに見苦しい、悪足掻きに過ぎなくとも。
真摯な思いを込めた瞳に、月は静かに映り込む。その目はもうすでに、明日に向けられていた。

＋　＋　＋

地上から見る月も、ムージェンから見る月も変わらない。
そうだとわかっていつつも、何故か特別美しいと感じるのは、これがもしかすると見納めになるからなのだろうか。
すでに術は仕上げに入り、間もなく完成する。
あらゆる術系統が複雑に組み合わさったその術の要となる少女――　ルシカは、先程と同じように膝を抱えて目を閉じている。
元々顔色が良いとは言えなかったが、今は血の気が引き、蒼白にも等しい。額には薄く汗が浮き、前髪が張り付いていた。
いくら魔力に対して耐性があろうと、その身が肉体である以上、

無機物とは勝手が違うという事か。何らかの負荷がかかっているのは明らかだ。
実際、一部にしか関与していないはずのアルノーンも、今までにない己の消耗を自覚していた。
（一つの大陸を滅ぼそうと言うのだから…この程度で済んでいるだけ良い方なのだろうな）
まだ立って、月を見上げる余力があるだけ――。
同志の中にはここに来て緊張の糸が緩んだのか、膨大な魔力に中（あて）てられたのか、体調を崩した者も出ていた。
…不確定要素はいくつもある。
彼等が属する地上では思うように扱える能力が、このムージェンでは本来の八割程度に落ちているという報告。
細心の注意を払って組んだ呪殺を破綻させた第三者の存在。
何より、ムージェンの王族はかつて『神の代行者』と呼ばれていたくらいだ。
彼や同志達の故郷を焼き、あるいは滅ぼしたあの力だけがその理由ではないだろう。実際、現国王ソファルはアルノーンでも掌握するのが困難だった。
彼の心の内に迷いや戸惑い、何らかの傷がなかったならば、果たして呪いを刻めたかどうかもわからない。
そうした事を考慮しても、組まれた術が成功する確率は五分程度だろうか。
（…やはり、《大災厄》は人災だった）
先程の宰相との会談で、以前から気にかかっていた疑問も解決された。
もし本当の天災ならば、逃げようとした者から滅ぶような事は有り得ない。
逆にそのような指向性があったのなら、このムージェンが完全に滅ばなかった事も理解出来る気がする。
話を聞いた限りでは、若くして死んだ前王は自ら災厄に立ち向か

ったという。だからこそ、彼は災厄では命を落とさずに済んだのではないだろうか？

（人災であるなら可能性は残っている）

先の大災厄を引き起こしたやり方とは異なっていようとも、もはや事は動いている。やり直す事も、途中で止める事も彼一人には出来はしない。

「…あとは待つだけだ」

時は熟しつつある。故郷を失ったあの時から、この日の為に生きてきた。

もはや後の事など考えるだけ無駄というものだ。明日から先などないに等しいのだから。

全ては、明日――。

第三十二章　夜明け

白々と夜が明ける。
少しずつ明るさを増して行く室内をぼんやりと眺めながら、ルシカは思考に沈んでいた。
『母』と暮らしていた頃、夜明けがあまり好きではなかった。むしろ、嫌いだと言っても間違いではないかもしれない。
また一日、人が苦しむ姿を見なければならないのだと思うと気が重かった。
物心つくかつかないかの頃から、すでに母――　ティスカは死の影を背負っていた。肌は青ざめ日々痩せこけて行くのに、何故かその双眸は爛々と光を湛(たた)えて。
それが単に生き延びてやろうとする意志からなら、ルシカもまだ理解出来ただろう。
けれどいつしかその光が狂気を帯びて来るに従って、それがある種の『執念』なのだと感じるようになった。
ティスカが何者だったのか、ルシカは結局最後まで知る事はなかった。本当に血の繋がった『肉親』であるのかさえ。
まだ動けていた頃、ティスカは小さな辺境の村の近くで、薬師として生計を立てていた。
動けると言ってもその範囲はさほど広くもなく、材料となる薬草を集めるのはルシカの仕事だった。
幼い子供にそれを見分ける事はひどく難しく、また重労働でもあったけれど、拒否権などあるはずもない。
ティスカはルシカが人前に出る事をひどく嫌がり、そうする事を許さなかったので、客が来ると隠れなければならなかった。
今にも崩れそうな小屋の中、物陰から何となしに聞こえてくる客の声だけが、外との繋がり。娯楽など何一つない生活で、それはほんの少しだけルシカの知らない世界を伝えてくれる。

やって来る客は何故か若い女が多かった。しかも人目を忍ぶように、日が暮れてからやって来る。あるいは明け方、他の人間が寝ている頃に。

ティスカは金銭ではなく食料や日常品と引き換えに薬を渡す事で、村まで出ずに済むようにしていたものの、その生活もそう長くは続かなかった。

ルシカが七歳になる頃、ティスカと共に小屋を後にし、さらに樹海の奥へと生活の場を移す事になると衰弱は一気に進んだ。

昼となく夜となく襲う苦痛にティスカは苦しみ、その度に痛みを抑える薬を飲む。けれどそれは、量を間違えば毒薬にもなり得る代物で――。

薬草集めをしていた事でそれなりに食べられるものの区別はついていた為、ルシカは餓死せずには済んだが、それが果たして幸いだったのか今でもわからない。

いつになく静かな夜明け――　薬の材料になる薬草を持って行ったルシカに、ティスカは言った。

『…今度は、お前の番だ』

枯れきった声が耳を打つ。その瞬間、ルシカは理解した。

――　ああ、この人は死ぬのだと。

そして説明されずとも理解(わか)ってしまった。

きっと自分が死ぬ時も、こんな風に死ぬのだろう。

『お前はきっと、アタシを恨む事になるよ』

何故か楽しそうに、ティスカは言った。

まるでそうなる事を期待しているかのように。

『もし…お前がこの先、大人になるまで生き延びたとしたらだけど

ね――』

その日のティスカは常になく饒舌(じょうぜつ)だった。

死の訪れを待ち望んでもいたのかと思うほど、随分と機嫌が良かった。

息を引き取る間際まで、今までの分を埋めるかのように様々な事を語り、ルシカはそれに耳を傾けた。

…決してそれは、楽しい事でも面白い事でもなかったのだけど。

それでもおそらく、最初で最後の『親子』らしい時間だと言えただろう。

そして太陽が昇りきり、世界を明るく照らし始める頃。

ティスカ＝ナターラは息を引き取り、ルシカは同時に多くの物を喪った。

（…この状況は、恨むべき事？）

少なくとも感謝する状況ではないだろうが、かと言って、ティスカが言い残した言葉が示すような状況でもない気もする。

事実、ルシカはティスカに恨みなど抱いていない。恨んでも意味がないと思っている。

何しろもう、この世にいない人だ。恨んだ所で何かが変わる事など有り得ない。それに、おそらくティスカ自身も、こんな事になるとは予想もしていなかっただろうから。

自分の身体に目を向けると、不可視の魔力の糸が雁字搦めに絡み付いているのが見える。

アルノーンの言葉を借りるなら、『魔力的に絶縁状態』である為、そういう形で彼等の『術』に取り込まれているのだ。

それはルシカに魔力的な影響を及ぼさないものの、その密度に対するだけの負荷はかかっていた。

多少は身体が慣れたのか、昨夜まで感じていた息苦しさや重苦しさは薄れているものの、頭を持ち上げるだけでも軽い眩暈(めまい)は伴った。

糸は術者から伸び、ルシカを絡め取り、そしてムージェンに存在

するその術系統に属するものに繋がっている。
間にルシカが入る事で、術者へかかる負担は軽減されているだろう。
（でもきっと…その為だけじゃない）
説明など受けてはいないが、何となく彼等が何をしようとしているのかは状況から薄々とわかる。
次に目を窓の外へと向ける。
切り取られたそこに見えるのは――　少しずつ明るさを増してゆく汚れなき青。

『や、やあ！　俺はこの国の王で、そのーあのー…ええと……』

それが一対一で初めて顔を合わせた時に、ソファルが最初に口にした言葉。
十五という年齢は聞いていたし、即位して間もない事も知っていたけれど、まさかあそこまで『普通』の人だと思わなかった。
一国の王なのだし、たった一人で直接会いに来るなんて思ってもいなかった。

『レサイアみたいに栄えてはいないだろうし、一度滅びかけたような所だけど、花も咲くようになったし、ここ十年で割と景色は戻ってきてるんだ。時間があったら俺も案内する。帰る前にあちこち見て行ってくれな』

好意に満ちた言葉を向けられたのも初めてなら、微笑みかけられたのも初めてで――　驚きと困惑の最中、ルシカは気付いた。
彼の瞳の色を『識別』出来るという事実に。
再び室内に視線を戻す。たちまち鮮やかな青は遠ざかり、見慣れた無機質な黒と白の濃淡で構成されたものとなる。
ルシカにとって、世界は単色で彩られたものだった。

ティスカの死を境に、ルシカが喪ったものの一つ――　『色』を識別する能力。
ひょっとしたらそれは悲しむべき事なのかもしれなかったが、視力を奪われた訳でもないのだからと、ルシカは簡単にその事実を受け入れた。
――　何かを喪う事は、ルシカにとっては恐れる事ではなかったから。
そもそも、ルシカは最初から全く話せなかった訳ではない。やはりずっと幼い頃、同じ年頃の子供と同程度、あるいはそれ以上に話す事が出来ていた気がする。
けれどいつしか、ルシカは声も失った。いや、おそらく強制的に奪われたのだ。
最初に声、そして髪も瞳も肌も――　目に映る色彩すらも。
…それが『代償』。それだけのものを犠牲にしなければ、この身に巣食うモノを抑える事が出来ないのだと、死の間際にティスカは語った。
事実を受け入れる事しか知らなかった幼い少女にとって、その事すら驚くに値しなかった。
他に逃げ場所など何処にもないのだから、受け入れる以外道はないのだ。その事に哀しみを抱く余地すらなくて。
…ましてや、怒りや憎悪など。
そんな感情を持つ事が出来ていたならば、きっとルシカの人生は大きく変わっていたに違いないのだけれども。
（助けてあげたいって、思ったのに……）
ムージェンの国王、ソファル＝タミウ＝ムージェン。彼は与えられる事を知らない自分に、いろんな物を与えてくれた。
もう二度と目にする事なんてないと思っていただけに、再び目にしたその青はルシカの心に焼きついて。
何故、その青だけ色がわかるようになったのか、実際の理由はわからない。けれどルシカはソファルがその色を与えてくれたのだと

思った。
ごく当たり前のように向けられた笑顔が嬉しくて。
――だから、助けてあげようと思った。
術的な知識などないに等しいものの、ソファルの命が狙われている事にはすぐに気付いた。
彼等の術ならば自分でも何とかなるかもしれない、という事にも。
それはおそらく、長年技を磨いてきた術者からすれば、傲慢(ごうまん)にも等しい認識だろう。
躊躇する理由は何処にもなく、ルシカは実行に移した。そしてそれは成功したかと思えたのに――。
出来る事ならそれで彼等が諦めてくれればと思った。けれど自分の行いは、逆に彼等を追い詰めてしまった。
何処からともなく入ってきた風がふわりと頬を撫でる。まるで慰めるように。
姿形がなく、捉える事も出来ないそれは、ルシカの唯一の『友達』だった。一人きりになっても、それだけは側に在った。
風はいつだってルシカを助けてくれる。ソファルの命を救ってくれたのもその力だ。
けれど今回ばかりは、その力に頼る事も出来そうにない。
無理をすれば、この呪縛から抜け出す事は不可能ではないけれど――その結果、何が起こるかルシカには予想も出来なかった。
もしその結果、助けたいと思う人が傷つくような事になってしまったら。
(…大丈夫、そんな事にはならないもの)
思わず想像してしまった最悪の事態を追い払うようにルシカは自分に言い聞かせる。
どんなにアルノーン達が命を削って術を組もうとも、成功しないだろう事にルシカは気付いている。だから今まで彼等におとなしく従っていたのだ。
彼等は誤解している。この身は『形代』にふさわしいものなのか

もしれないが、きっと彼等が考えているようなものではない。
影響を受けないのは、魔力的に絶縁状態だからではない。魔力的に『飽和』状態だから、他の術の影響を受けないだけなのだ。
その誤解に気付かない限り、彼等の術は必ず失敗に終わる。
（だから、大丈夫）
悪い事なんて起こらない。
己を含めて、この術に関わる人間が無事でいられるのかはわからないけれど――　少なくともこの国とそこに生きる人、そしてその国王は守られるから。
ルシカは瞳に、心に、空の青を刻み込む。
…誰の目にも明らかな形で、決着を。そうすればきっと――。
きっと、あの人はまた笑って日々を過ごせる。この優しい、青の下で。

第三十三章　夢幻の人

その夜に訪れた夢の中、ソファルはいつもの場所に一人、無防備に寝転んでいた。
何で夢の中でまでこんな事やってるんだろう。
自分にちょっと呆れたりもしたものの、空は綺麗に晴れていて、太陽はぽかぽかと心地よい熱を届けてくれるし、時折肌を撫でる風はとても優しい。
あまりにも気持ちが良かったので、そのままぼーっとしている事にした。大体、この数日の間にまとめて事が起こり過ぎだと思う。
だから夢の中くらいのんびりしてもいいじゃないかと自己弁護してみる。
同時に夢の中でさらに転寝するなんて変な話だなどとも思いつつ、ゆったりと流れる静かな時間に身を委ねていると、ひょいと突然何者かが顔を覗き込んできた。
「！？」
思いがけない出来事にぎょっと目を見開いて身を竦めると、顔を覗き込む人影が慌てて身を引いた。
「ご、ごめん！」
聞こえてきた声は聞き覚えのない男の声。
逆光になっていたので顔立ちなどがよくわからなかったが、ぱっと見た感じ、見覚えがないような気がする。
（な、何だ？　これって夢じゃなかったのか？）
夢は夢でも場所があまりに身近な場所だった事もあり、第三者の出現はまったく予期していなかった。夢の中なら常識を超えた事が起こってもまったく不思議ではないと言うのに。
混乱しつつも声の主を確認しようと身を起こすと、少し距離を置いた場所にその人物は戸惑ったような表情で立っていた。
年の頃は二十歳前後、トラムと同世代くらいだ。ずば抜けて背が

高い訳でもなければ、痩せすぎでも太ってもいない。いわゆる中肉中背というのだろうか。
年齢的に王宮付きの衛兵かと思ったものの、服装はなんだか普段の自分を見るような、地味で飾り気のない、いかにも普段着っぽい様子で、何より衛兵ならば必ず所持しているあの杖が何処にも見当たらない。
それに――　自分よりは遥かに引き締まった、労働を知っている感じを受ける体つきなのだが、何と言うか、そういう手荒な事には向いてなさそうだった。
万が一、不審者がいたとしても怪しんで引っ捕らえる代りに、『きっとあなたにものっぴきならない事情でもあったんでしょう』とか言って、そのまま人生相談に乗り、あまつさえ相手を改心させそうな、人の良さそうな雰囲気が全体的に漂っているのだ。
「…ええと……」
自分の記憶を思い起こし、やっぱり知らない人だと結論する。こんな人は多分、一度会えば忘れない。
何とも気まずい沈黙が漂う。
男の申し訳なさそうな顔に、何か言わなければと思ったのだが、取りあえず出てきた疑問はこれだった。
「――　…どちら様で？」
その質問があまりにも直球だったからか、尋ね方に国王らしさの欠片もなかったからか。それともこういう状況なら、もっと違う言葉が出ると思っていたのだろうか。
目の前の男は軽く顔を背け、苦しげに肩を震わせた。――　笑いを堪えているのがモロわかりだ。
「…ご、ごめ…くっ……あの、…っ」
「……笑い終わってからでいいから」
正直愉快な反応ではなかったが、こういう反応はトラムで慣れている。
もっとも、トラムは男のように隠そうとは最初からしないで遠慮

なく爆笑してくれるので、よく考えたらトラムの方が相当に失礼な反応かもしれない。
見た目によらず笑い上戸だったのか、ひとしきり肩をぷるぷるさせた後、酸欠でか顔を赤くしながら男が再びソファルに向き直った。
その目元にまだ涙が浮いている気がするけど気にしない事にする。
「あー…、ごめん。笑うつもりはなかったんだけど……」
照れくさそうに、赤というよりは日に焼けて色が明るくなったような茶色の頭を掻きつつ、男は素直に謝る。
「寝ているのかと思って様子を見ようとしただけなんだ。まさか、そんなに驚くと思わなくて……」
言われてみれば、人が地面に直接横たわっていたら何事かと思うのが普通かもしれない。
そう思ってから、おやと思う。
（この人、俺の事わかってない？）
見ない顔だが、ここが王宮である以上まったく関係のない人物というのも不自然な気がする。
なのに、この砕けた口調。少なくともソファルの事を『国王』だと思っている風ではない。
夢だから何でもありとまとめる事も出来るが、それを差し引いても何とも不思議な感覚だった。
思い返してみるに、身近な人間以外でこんな風に遠慮のない物言いをされた事はない気がする。思わずまじまじと目を向ければ、にこにこと屈託のない笑顔が返って来た。
やっぱり人が良さそうな人だなあ、と自分も周囲にお人好しだと思われている事を棚上げした感想を抱く。
そのまま男はすとんとその場に腰を下ろした。視線の高さが近付いて、今まで気付いていなかった事にも気付く。
男の瞳は、明るい青色をしていた。
（…あれ？）
何だかその事にすごく引っかかった。だが、何故その事に引っか

かるのか理解出来ずに首を傾げる。
青い瞳の人間なんて、ムージェンにいくらでもいる。多分、地上にはそれ以上。
ありふれた色だと思うのに――　どうしてこんなに気にかかるのか。その色にとても見覚えがある気がして……。
何処かで会ったような覚えもないのに、不思議と黙って向かい合っても、昔から知っている相手のように気まずさはなかった。むしろ、そんなはずもないのに居心地の良さすら感じる。
そういやまだ名前を聞いていないな、とぼんやり思っていると
「ソファル」
不意打ちのように男が名を呼んだ。
驚いて我に返れば、ほんの少し口調を改めた声が尋ねてくる。
「この国をどう思う？」
それはフィリーが国王になった事を後悔していないかと尋ねた時のものと、何処か近い響き。
見つめてくる瞳は何処までも優しい。けれど同時に真っ直ぐで、深くて――　底が見えない。
どうして名前を知っているのかとか、一体何者なのかとか、疑問は尽きなかった。
けれどその視線に、ソファルは思うままに答える。
「好きだよ」
それが男の求める答えであるとは限らなかったけれど、どう思うかと聞かれて出てきたのはそれだけだった。
「…いろいろ面倒な国だよ？」
何処となく面白がるような口調で問い返される。
その言葉も真実だ。実際、過去に償いようのない罪をたくさん犯しているし、そのせいで命を狙われるような羽目にも陥った。
過去の栄華はもはや昔話。国はまだ建て直しの真っ最中で、ついでに国庫も赤字だったりするし、百人程度の使節を迎えるだけでもやっとだ。

――　それでも。
ソファルは空を見上げた。
空は綺麗に晴れていて、太陽はぽかぽかと心地よい熱を届けてくれる。時折肌を撫でる風はとても優しい。
この場所はソファルにとっては一番美しくて、そして何よりも大事にしたい場所だ。
ここで生まれ育ち、この国しか知らないけれど。…多分、これからどんなに時間が経ってもその思いは変わらないだろう。
「面倒だけど、でも嫌いにはなれないんだ」
再び視線を戻して正直に答えれば、男は何故かとても嬉しそうに笑った。
何だかとても――　ずっと聞きたかった言葉を貰ったように。
その手が伸び、まるで小さな子供に対するように頭を撫でられた。予想外の行動に反応が遅れてされるままになる。
トラム相手なら即座に何をすると抗(あらが)えるのに、不思議とそうする気は起こらず――　代りに何故か唐突に胸が詰まった。
（…？？）
何だろう、この気持ちは。どうしてこんなに――　締め付けられるような、息苦しい気持ちになるんだろうか。
泣きたいような気持ちに、なるんだろうか。
別に悲しい話なんてしていない。知らない人間に子供扱いされて、失礼だと腹を立てたっていいはずなのに。
困惑をそのままに、触れてくる掌を受け入れる。
…この手を、声を知っているような気がするのは何故なんだろう。
「大丈夫、ソファルならやれるよ」
穏やかな声が背中を押してくれる。主語が抜けているのに、何の事を言っているのか何故かわかった。
「…そうかな」
出来るだけ誰にとってもより良い結末を。そんな都合の良い事が、本当に出来るんだろうか？

何とかしてやると意気込み、心も決めたけれど、あまりにも不確定要素があり過ぎて、自信なんてとても持てそうにないのに。
そんな思いを読み取ったように、男の笑みが深くなる。
「保障する。この国が好きなんだろう？　なら、この国は…世界は、きっとその思いに応えてくれる」
それは一体、どういう意味だろう。
不思議に思って持ち上げた目に見えたのは、自分を見下ろす見覚えのある色。このムージェンを包む空と同じ――　『自分と同じ』色。
（…！）
ようやく男の正体に思い当たり、ソファルは目を見開く。
もう決して会う事はないけれど――　ずっとずっと、心の奥底で会いたいと思ってた人だ。
「…っ」
反射的に手を伸ばしたものの、ソファルの手は空を掴む。
もうそこに、その人の姿は何処にもなかった。代りに何処からともなく、声だけが届く。
大丈夫だと、声は繰り返す。

大丈夫。
天の祝福はソファルと共にあるから、と。

第三十四章　前進

四日目の朝が訪れた。
いつもと変わらない静けさに包まれ、徐々に明るさを増す透き通った空。今まで幾度となく、ムージェンに訪れた一日の始まり。
ただ違ったのは、その日の夜明けを見つめていた瞳が常よりも少し多かったこと。
その中の一人であるソファルは、非常に珍しい事に誰にも起こされる事なく目覚めを迎えていた。自分でも驚くくらいに、それは随分すっきりとした覚醒だった。
恐れていた悪夢は訪れず、代りになんだかとても懐かしいような夢を見た気がする。懐かしいと言うのも何か違う気もするが、それが一番近い。
その夢がどんな内容であったかと思い返しても、残念ながら具体的な内容はまったく残っていなかった。ただ、その夢は普通の夢とは少し違ったような気がしてならなかった。
誰かに大丈夫だと励まされたような。
昨夜は月を眺めた窓から、少しずつ昇ってゆく太陽を眺め、その思いは確信に変わる。何かとても良い事が起こった後のように気分が良かった。
きっと、とてもいい夢だったのだろう。
内容を欠片も覚えてない事が少し口惜しくて、しばらく考え込んだものの、やはりどうやっても思い出せなかったので考える事を諦めた。
泣いても笑っても今日が最も忙しく、そして何らかの決着が確実に着くであろう事は確かで。やらなければならない事も、考えなければならない事もたくさんある。
今夜の晩餐会が終われば、明日の午前中には使節団はムージェンを辞する。彼等が何か起こすとしたら今日だとソファルも思う。

今日は一日、使用人達もほぼ全員が準備等にかかりきりになり、彼等の動向まで仔細漏らさず見てはいられない。
元々、王宮内にいる使用人達は使節団を迎える為に半数以上が臨時で雇われた者なので、与えられた以上の事にまで気が回らないだろう。
秘密裏に動くのであれば最後までわからないが、もはや相手は動いている事を隠していないも同然だ。
単純に隠さずともこちらには何も出来ないと思っているのかもしれないし、実際具体的な対策など立てられなかった。
…つまり最悪の場合、自分は死に、ムージェンにも何か大きな災厄が襲いかかるのだろう。
そんな状況だと言うのに、不思議と気持ちは落ち着いていた。不安や恐怖より、何とかしようという気持ちの方が強い。
ディネアやトラムが言う所の、『変な所で前向き』な部分が出ているのかもしれない。
でも――　多分、自分はそれでいいのだと、特に理由もなく思った。
「…よし！」
気合いを入れるように立ち上がり、ぐっと伸びをする。何かが吹っ切れたように、心は軽かった。

＋　＋　＋

人々が動き出すにつれ、ムージェンの王宮はレサイアの使節団を迎えた日よりも慌しくも華やかな空気に包まれていった。
かつての時代を知る者にとっては、それもまた懐かしいものだっただろう。
だが、そんな時代を知るよしもない人間にとっては、王宮を上げての晩餐会など初めての事であり、楽しむ以前に不安と緊張の方が勝っていた。

かく言う、ソファルもその一人のはずだったのだが――。
「…ソファル様」
「ん？」
「落ち着いておられますね」
モランの少し意外そうな言葉に苦笑する。簡単な朝食を終え、執務室へと顔を出した矢先の事だった。
使用人達の半数が大災厄以降に雇われた若い世代が多い事もあり、浮き足立っているという報告を、ソファルも朝食の席で給仕ををしてくれた女官から耳にしていた。
多分、これが本当に単なる晩餐会であるなら、きっと主催者となる自分も緊張の余りに食欲くらい失せていたに違いない。
けれど――　今回は単にレサイアの使節団を歓待する為だけのものではない。
「その様子だとしっかりお休みにもなれたようですね」
モランの少し安心したような言葉に頷く。
「何かいい夢見たみたいなんだ。内容は覚えてないんだけど」
「左様ですか。それは何よりです」
緊張していたからか、なかなか寝付けず熟睡出来たとは言えないものの、昨夜はそれより前の二日に比べれば休めたと思う。
起こされる前に目が覚めたものの、睡眠が足りなかったという感じもない。
「正直、三日前のような事になっているのではと思っていたのですが…杞憂(きゆう)でしたな」
三日前――　レサイアの使節団がやって来た日だ。その日の事を思い出し、ソファルは視線を何となく反らした。
その日、まともな外交などした事がなかった事もあり、落ち着けなかったソファルは昼まで執務室を無駄にうろうろしていたものだ。
落ち着けと言った所で落ち着くとは思わなかったのか、モランは何も言わないでくれたが、その様子はさぞ一国を背負う者としては心許なかっただろう。

「仕方ないじゃないか。ここまで来たら、腹を括らないと」
緊張していないと言えば嘘になる。明確な打開策がある訳でもなく、不安を感じていないとも言えない。けれど、それは晩餐会の成否に対してではなかった。
その意図を察してか、モランも頷く。
「仰る通りです。…出来る事は限られていますが、最善を尽くしましょう」
早速、モランが昨日アルノーンと打ち合わせた内容をまとめた物をソファルに手渡す。
「今回は人数が少ない事を考慮して規模もさほど大きくありません。こちら側とレサイア側を特に分けず、どちらも自由に動き回れるような形式としました」
謁見の時のように上座がある訳ではなく同じ高さで歓談出来るようにする形式は、以前のムージェンでは小規模の晩餐会の際によく用いられた形式らしい。
相手に対する信頼を示す形式でもあるのだが、同時に不特定多数に囲まれる事も意味する。
「つまり…狙われ放題って事？」
ソファルの問いに、モランは苦笑を浮かべつつ頷いた。
「流石にお一人で放置はいたしませんが、護衛をあからさまに近くへ置くのも相手側に失礼に当たりかねません。ソファル様の位置が定まっていませんから、前もって何かしら仕掛けておいて暗殺するという危険性は少ないと思われます。…もっとも、そんなありふれた手段を使うとは考えられませんが」
「…確かに」
普通の暗殺手段などを使う相手なら、そもそも夢の中で呪い殺そうなどするはずもない。
相手にとって有利にも見えるが、行動の規制がないのはソファルにとっても同じだ。
流石にきちんと訓練を受けている訳ではないのでトラムのような

動きは期待出来ないが、初歩的な護身術くらいなら使える。相手によるが、いざという時に自分で自分の身を守る事も不可能ではないだろう。

（後はあちらがどう出るか…）

ルシカの身柄を拘束した理由もまだわからない。晩餐会には出られると言ったという事は、一度戻すという事だ。

一度拘束しておいて、今のこの時に解放する事に一体どんな理由があるのだろう。何かこちらにはわからない事情があるに違いない。

リヨにはルシカが戻ったらすぐに報告してもらうように頼んでいる。だが、直接ルシカに尋ねた所で、彼等の狙いがわかるかどうか――。

そこまで考えて、ソファルは唇を噛んだ。

「ソファル様？」

「あ、いや…何でもない」

怪訝そうなモランに慌てて表情を改めながら、思い至った事に思考を巡らす。

もしそれが口が利けない彼女に『文字』を与えなかった理由だとしたら、今回の事はレサイア皇帝本人も関与しているという事だ。

実際の所はわからないが、仮にも『父』に利用されるというのは、どんな気持ちなのだろう。

（ルシカは…知っていたのか……？）

きっと、知っていたのだろう。知っていてここまで来た――そんな気がした。幼い彼女に最初から選択の余地など、なかったのかもしれないけれども。

もし自分がその立場なら、きっと自暴自棄になっただろう。

必要とされる事と、利用される事は似ているようでまったく違う。後者は本人の人格や意志を無視したものだ。

そんな道具のように利用されても、レサイアへ帰りたいのだと頷いたのは何故なのだろう。本心からではなかったのだろうか。

もしかしたらこちらが困っている事を見越して、そう応じた可能

性もある。ある、どころかそれが正解のような気がしてならない。
（…待てよ？）
そう言えば、ルシカとはほとんどまともに接していない。もしかすると、会話らしい事をしたのは最初に顔を合わせた時くらいではないだろうか。
次に顔を合わせた庭園の時は、ソファルにまったく余裕がなかったし、その直後にルシカは身柄を拘束されてしまったのだから。
（無関心だったのは、俺もじゃないか…）
ルシカの何もかもを諦めたような姿を思い出す。ルシカが心の内で何を思い、何を願っているのか――　もしかすると、今まで誰一人理解しようとした者はいないのではないか。
ソファルは初めて、ルシカの事を知りたいと思った。
自分よりもずっと幼い身で、自分とは比べ物にならないほど厳しい生き方をしてきたであろう彼女の事を。
それが同情からなのか、友情からなのか――　それとも別の何かからなのかわからないけれど。

第三十五章　芽生え

アルノーンがルシカの前に姿を現したのは、夜明けからかなり時間が過ぎた、どちらかと言えば昼時に近い頃だった。
歓待を受ける側とは言え、百人近い使節団の代表者となれば何かと多忙なのだろう。実際、昨日までは静かだった周囲も、今日は朝から何かと騒がしい。
「お身体の調子はいかがですか、ルシカ様」
すでに足元の術力を強化する文様に魔力は感じず、その用途を終えた事を伝えていた。おそらく、彼の言う術は完成したのだろう。
問いかけた彼の方が見るからに憔悴（しょうすい）していた。目の下には薄く隈（くま）が浮き、顔色も冴えない。まるで一睡もせずにいたか、重労働でも課せられた後のような雰囲気だ。
しかし、その瞳には今までにない強い意志の光が宿っている。
夜明けを見ながら昔を思い返した為かもしれないが――　その光は何処かティスカを想わせた。追い詰められてなお、望みを、望みだけを追い求める者の……。
「動けますかな？」
問いかけるその瞳を見つめ返し、ルシカは返事が出来ない代りにゆっくりと立ち上がった。
軽い倦怠感（けんたいかん）はあるものの動けないほどではない。一晩経って身体が負荷に馴染んだのか、歩くのにも支障はなさそうだ。
その様子をじっと見詰め、アルノーンはやがて小さく吐息をついた。
「…正直な所、あなたには驚かされるばかりですよ」
「……？」
苦みの混じる言葉に首を傾げる。彼が何に驚いたのかまったくわからなかった。
アルノーンはルシカの疑問を感じ取ったのか、無感情な視線を向

けながら言葉を続ける。
「この状況で…普通の子供なら、泣いたり喚(わめ)いたりするものです。なのにあなたは取り乱しすらしない。それどころか――　普通の人間ならとっくに廃人になっているほど負担のかかる術の中心にいながら、それだけ動けてしまう」
「……」
「それが『才能』と言うものなのかもしれませんが…失礼ながら――　本当に人なのかと思う程です」
アルノーンの言葉は、ルシカの心に針のように刺さった。
チクリと、広がる小さな痛み。血は流れないけれどいつまでも疼(うず)く――　そんな類(たぐい)の痛みだった。
呼吸して食事して、動いて眠って、――　生きて。もしそうする事が人である条件なら、ルシカは確かに『人』だろう。
けれど、泣いたり笑ったり怒ったり喜んだり悲しんだり――　そんな『人らしい』部分はきっと普通の人よりもずっとずっと少ない。
母として共に暮らしていたティスカが死んだ時も、この目から涙は一粒も落ちなかったのだ。親子として暮らしながら、そこに親子らしい情などなかったけれど。
その死を喜ばない代りに、悼(いた)みもしなかった。その死をどう受け止めて良いのかわからなかったから。
自分はティスカの望みを叶える為の『道具』となるように育てられた。だから、きっと人としての感情が育たなかったのだろう。アルノーンの言葉はあながち間違いでもない。
実際、これから死ぬかもしれないのに、怖いとも思わないのだ。何も、感じない。恐怖も、不安も――。
人が何故それを恐れるのかも、本当の所はよくわからない。
『…今度は、お前の番だ』
また、ティスカの言葉を思い出す。

その言葉は、いつまでもいつまでも、解く事の出来ない呪詛（じゅそ）のようにルシカの中から消えようとしない。
今度はお前が己の為に誰かを殺すのだと、その言葉は言う。
（…わたしは、違う）
死に抗って抗って、それでも足りずに苦しみ抜いて死んだティスカとは違う。そんな執着は自分にはない。
（わたしは違うもの……）
己の望みを叶える為に、自身の死すら毒と成せたティスカとは違う。
死すら覚悟して、復讐を遂げようとするアルノーンとは違う。
命がけで何かを成したいと思うほど、心を占めるものは今まで一つもなかった。ただ、生きているだけ。
人として生まれても、『道具』にしかなれない自分は、モノのように用途が終わったらただの役立たずになるのだろう。役に立たない道具に存在する価値はない。
ただのガラクタは誰からも惜しまれる事なく葬り去られる。それくらいは、ルシカも知っている。
…だから感情などなくてもいい。人のようでなくたって構わない。涙なんて一生流せなくてもいい。
生まれてきた事に意味なんて求めたりはしない。
それは『道具』には必要のないものだし、今までなくて困った事は一度もなかった。大切なものを一つも持てないままでも、問題など起こらなかった。
ただ、受け入れ流されるまま生きてきた日々。
――　チクリ、とまた胸の奥が痛んだ。
ホントウニ、ソレデイイノ？
心の奥底で、誰かがそんな事を呟いた気がした。
無意識に目を向けた窓の外には、澄んだ空色。

ルシカは思う。
きっとこれと同じ青を瞳に持つ人は、自分と違って最後の最後まで諦めたりはしないのだろう。
当たり前のように向けられた笑顔。あれは彼が今まで周囲から同じように与えられてこられたからに違いないのだ。
自分の全てを賭けてでも喪(うしな)いたくないと思うものを、彼もまた持っているのだろう。おそらく――　とてもたくさん。
だからあんなに眩しいのだ。だから、誰もが彼を愛するのだ。
自分とはまったく正反対の人。
たとえ抗っていたとしても、事態はきっと何も変わらなかっただろう。
自分に出来る事は限られていて、とても少ない。
待つ結果が同じなのならば抗うだけ無駄だ。声や色を喪った時のように受け入れればいい。結果をただ、受け止めればいい。ずっとそう思っていた。
でも――。
こんな自分でも、誰かの役に立つ事が出来るかもしれない。何か出来るかもしれない。
そんな事を、ここへ来て考えるようになった。
…それは今まで一度もなかったこと。

――　助けてあげたい。

自分から何かしたいと思ったのは初めてだった。
それは何故か、ルシカを突き動かす。ティスカに使用を禁じられてから、一度も使った事のない『風』の力を借りるほどに。
その明確な理由を、ルシカはまだ自分の中に見つけ出せていなかった。
ただ、嬉しかったから。それだけしか――。
その時、入り口から二人の女官が姿を見せた。昨夜も見た記憶が

ある。彼等も術者の一員なのだろう。
アルノーンは彼女達と軽く言葉を交わすと、ルシカに向き直った。
「この者達が部屋までお送りします。晩餐会まで少し身を休めるとよろしいでしょう」
その言葉にルシカは驚く。まさか解放するとは思わなかったのだ。
ほとんど面には出なかった驚きを読み取ったのか、アルノーンは薄く笑みを浮かべてルシカを覗き込む。
「…何故、身柄を解放するのかと疑問に思いましたか？」
「……」
「簡単な事です。目くらましですよ」
そう言われてもルシカにはよくわからなかった。
自分が自由になる事で、一体何から何の目が反らされるというのだろう。
「よくわからない、という顔ですね。…まあ、無理もありませんが」
アルノーンは何故か少し同情するような視線を向けて来る。
「ムージェンの国王と彼に仕える人々は、信じがたいまでにお人好しのようでしてね。あなたの事も随分親身になって心配しているようです。このまま身柄を拘束したままでは、流石に何か理由をつけて押しかけかねない。…それだと少々都合が悪いのですよ」
呆れを隠さない言葉にルシカは困惑した。
（…わたしを、心配……？）
何故、彼等が自分を心配するのだろう。レサイアからの客人だからだろうか。
彼等にとっては『予期せぬ客』で、おそらく扱いに困る存在に違いないのに。
きっと、ソファルにも得体が知れないと気味悪がられていると思う。彼から無理矢理死の呪いを引き剥がした時の反応がそれを物語っている。
自分は『死』を封じた道具で、誰かの助けになろうと思う方がきっとおかしいから、彼の反応が当然だと思う。

だからそんなはずはない。けれどそう思う一方で、アルノーンがこんな事で嘘をつく必要など何処にもない事も事実で――。

アルノーンはそれ以上言葉をかける事はせず、ルシカは困惑を抱えたまま、女官達に連れ出されるようにその部屋を出た。

その瞬間、全身に纏わりつくような倦怠感が薄れる。振り返れば、そこにはすでに閉じられてしまった扉。

『…それだと少々都合が悪いのですよ』

――　目くらまし。自分が解放されるのは、この扉の奥にある物を守る為。

魔力を視(み)るルシカの瞳には、扉を通してもその異様な光景がはっきりと見えた。

今にもはちきれそうな程に増幅された巨大な魔力の塊(かたまり)が――。

第三十六章　見えざる手

少しずつ、少しずつ。
それはおそらく何らかの異能を持つ者でも感じるかどうかもわからない、遅々とした変化だった。
理想的なまでに整っていた、ムージェンに満ちるあらゆる要素が乱されつつある。
「…無茶をやる事だ」
ムージェンの国王が居城、その天に向かって屹立する尖塔――
その屋根の天辺という、常識で考えれば到底人がいるはずのないそこに座って、『彼』は呆れたようにぽつりと呟いた。
見つかれば十中八九、衛兵に曲者と追われるだろう。
いや、それ以前にどうやってそこへ上ったのかと疑問に思う方が先かもしれないが――。
だが彼は人目など気にした様子もなく、落ちれば確実に命がないそこで冷めた視線を何処ともしれない中空に向けている。
「いくら『死神』純正の形代だろうと、『風』の力を借りようと…『天』に逆らうなど不可能だと言うのに」
ぶつぶつと呟きながら、その空を写し取ったような瞳が地上に向けられる。
その容姿は特に目を引くような特徴はなく、何処にでもいそうな若い男の姿。けれど、感情らしきものがないだけで、何処か作り物めいた不自然さが漂う。
あるべきものがない――　何かが、決定的に足りない。そんな感覚を抱かせる。
しかしその瞳が何かを見つけ出した時、無表情だったそこにやわらかな表情が生まれた。それは劇的な変化だった。まるで人形に魂が吹き込まれたような。
何かを慈しむようなその目は、一体何に向けられているのか――。

「…あの位は、約定に反してはいないはずだ。うん、そうだ。第一、私の正体に気付くはずもないし……」
どうやら独り言は彼の癖のようなものであるらしい。
誰も聞く相手などいないのに、まるで言い訳のように言葉を紡ぐ。
「でも、最後の方で様子がおかしかった。…いや、まさか。記憶すらないはずだ……」
言い訳めいた言葉の最後は、微妙に自信のなさそうな響きに変わる。合わせて、その表情も僅かに焦ったようなものとなった。
「――　それとも、分かるものなのかな？　私には到底理解出来ないが……」
まさか、と言いつつ、その表情はそれを裏切っている。それは半ば確信だ。
「分かったのか…この姿が誰の物なのか……」
――　生まれる前に死別し、顔どころか声すら知らないはずなのに。
「…これだから、侮れないんだ」
やれやれとため息をつきつつ、けれどその表情は楽しげだ。
中空を睨んでいた時までの無機質な雰囲気が、今ではもう何処にもない。楽しくて、嬉しくて――　幸せそうな。
さあ、これから祭りが始まる。
祭りと言っても、それは何かを奉るものではない。
ある者は犠牲を払い、ある者は戸惑い、ある者は命がけで戦う事になるだろう。
「人の事は人の手での決着が一番だと、言っていたし」
苦笑を浮かべて、とても残念そうに彼は呟く。
その言葉を最初に言っていたのは、果たして何代前だっただろうか。おそらく真面目に『思い出せ』ば該当する人物が誰かくらいわかるが、そこまでするつもりは彼にはなかった。
重要なのは、自分がその『言葉』に従うということ。
彼の選ぶ人間は、大抵が彼の介入を嫌がる。そして多少言葉は違

えども、言うのだ――　誰かに代わりをしてもらうのは御免だと。
そうして敢えて茨の道を行く。

『「神」というのは、そういうものだろう？』

それは、本当にどうしようもない時に縋るもの。だから、どうにか出来る間はその手は借りないと言う。
愚かだと言う事は簡単だ。けれどそういう人間にこそ、『彼』は惹かれる。
たとえば今の姿の本来の持ち主。たとえばその血を引いた若き国王――。
これから何がどう動くのか、彼でも予測は出来ない。
状況と場合によっては、今度こそ世界は滅んでしまうだろう。何しろ『今回』は、何一つ手を下していないのだ。
そうなるといろいろ都合が悪いので、本当は手助けしたくて堪らないのだけれども――　本当にどうしようもない時まで、手を出さないと約束してしまったから。
「…頑張れ」
何より、見守る対象自身がまだ諦めていない。それに状況は全てが悪い方向に動いている訳でもない。
『風』が良い方向に吹きつつある。もっとも、それがどう転ぶかで事態はまた変わってしまうのだろうけれども。
だから今は――　ただ見守る。
本当にどうしようもなくなった時、いつでもこの手を差し出せるように。

＋　＋　＋

晩餐会に向けての最終的な打ち合わせが終わり、解散が告げられると何処か緊張した面持ちで王宮を守る衛兵達はそれぞれの持ち場

へと散ってゆく。
使用人達同様、彼等にとっても王宮を挙げての晩餐会など初めてだ。普段と勝手が違うだけに、落ち着かない気持ちになるのも無理はない。
いつもと違い、目に付くような場所に立つ事は控えられるが、仮にも他国の客人がいるというのに警備に穴があってもならず、警備の責任者達はその配置に相当苦心したらしい。上座にいる彼等は一様に疲れを滲ませた顔をしていた。
その苦心の賜物(たまもの)である配置図を手に、衛兵の一人であるトラムも他の同僚と同様に、指定された持ち場へ向かおうとした時だった。
「ああ、トラム。ちょっと待て」
背後からのそんな声が彼を呼び止めた。
「…はい？」
何事かと思いながら振り返れば、彼の直接の上司に当たる人物が、何処か渋い顔をして手招きしている。
（――　オレ、何かやったっけ？）
ここ数日は心当たりも身に覚えもないが、普段の素行が素行なので、ついそういう発想をしてしまう。
オーグル＝ジェストという名のこの上司は、どちらかというと口うるさい方ではないのだが、こういう顔をしている時は大抵あまり良い事は起こらない。
心の中で身構えつつ引き返すと、オーグルは探るような目を向けてきた。
「…お前、ソファル様と親しいよな？」
徐(おもむろ)に言われた言葉にトラムは面食らった。
ソファルとトラムが兄弟同然の仲なのは、もはや周知の事実だ。
流石に今はトラムもソファルの立場を考えて公の場でそうした態度は出さないようにはしているが、一国の王と一衛兵という身分を考えると本来ならありえない関係だとは思う。
だが、それを今更確認されるのも変な話だ。

「はあ…、まあ親しいと言えばそうなりますが……。それが何か？」
「俺は結構お前を評価してるんだ。こういう仕事は年季も必要だろうが、本人のやる気と実力の方が大事だと思っているしな」
トラムの質問には答えず、オーグルは渋い顔のまま神経質な動作でトントン、と机の上に広げられた紙面を叩く。
そこには先程渡された今日の配置図があった。
広大な王宮を大雑把に分け、それぞれの担当地区と責任者などが記されている。オーグルの指はその中の一箇所――　トラムの名前の上を叩いていた。
「――　お前、わざと外れたな？」
ぴたりと叩くのを止めると、一気に核心を突いてくる。
「今日の晩餐会で、国王の身辺警護は特に精鋭をと宰相殿からも要望があったと聞く。お前はまだ衛兵になって日は浅い方だが腕は立つし、何よりソファル様もよく知るお前が側にいれば心強いだろう。当然、その中に入ると俺は思っていたんだがな」
「買いかぶりですって。その計画表組んだの、お偉方でしょ。オレの意志なんて何処にも入る余地はないじゃないですか」
表面上は笑顔を保ちつつ、トラムは内心オーグルの鋭さに舌を捲いていた。
その読みに、実際の所間違いはない。トラムはソファルの身辺警護の任の打診を受けていたし、最初は受ける気でいたのだ。
だが――　気が変わった。
近くにいた方が小さな変化にも対応出来るし、守りやすいのではないかとも思いもした。
しかし、相手はどんな手段を講じてくるかわからない。直接ソファルの命を狙って来るかも怪しいのだ。
熟考した結果、トラムはソファルの身辺警護を辞退した。代りに彼に割り振られたのは、元々与えられていた仕事――。
「…こんな時にお前が、人がほとんど出払う離宮の警備を真面目にやるとはとても思えないんだが？」

何か裏があるだろうと言わんばかりの言葉に、トラムは心の内で冷汗をかく。
実際、真面目に警備するつもりはさらさらなかった。だが、その理由をオーグルに正直に言う訳には行かない。
ソファルが何者かに――　十中八九、レサイアの使節団だが――命を狙われている事は、ソファルの身の回りにいる者以外は知らないのだ。
王宮の警備を担う衛兵達に話を通していないのは、明確な証拠が何処にもないからだろう。
証拠もないのに拘束する事は出来ないし、建前だろうと使節団の目的は『国王ソファルの即位を祝う為』だ。
そもそも表立って敵対している相手でもない。むしろムージェンは敵対する以前に、世界情勢から取り残されているに等しい状況である。
（こういう時は――）
正直に話せたらそれに越した事はない。けれど、話せないとなれば。
（逃げるが勝ち！）
「勘繰り過ぎですよ。そりゃまあ、ソファル様の事は心配ですよ。でも晩餐会って、ただの食事会じゃないでしょ。警備だと食える訳じゃないし、堅苦しいのは苦手なんで」
こうなったら、白を切り通すしかない。それらしい言い訳を口にすると、オーグルはまだ疑わしそうな目を向けるものの、一応は納得したようだった。
「…まあ、お前の事だからそんな理由だろうな」
「――　オーグルさん…オレの事、すごくばかにしてませんか？」
「何だお前、賢いつもりだったのか？」
「うわ、ひでえ」
言外にそこまで難しい事は考えていないだろうと言わんばかりの言葉に、あえて突っかかりつつ、トラムは内心ほっと安堵した。

…敵を欺くには、まず味方から、だ。
「じゃ、オレはこれで」
「おう。いくら暇だからってさぼるなよ」
少々耳が痛い言葉に手を振りつつ、トラムは部屋を後にした。
オーグルには申し訳ない事ながら――　さぼりはしないが、職務放棄する気は満々だった。

第三十七章　譲歩

逃げるように離宮の持ち場へ向かっていたトラムの足が、不意に止まる。
（あれは…）
進行方向に見覚えのある立ち姿。ディネアだ。
自分より明るい赤い髪。ムージェンでは珍しくもない色だが、そのせいで子供の頃は似ていない兄妹と思われる事もあった。
――　それぞれにとって不本意だったのは言うまでもない。
まだ距離があるからか、こちらに気付いた様子もなく、じっと窓の外を眺めている。
トラムは道を変えるべきかしばし悩んだ。
トラムとしても、ディネアが自分を毛嫌いするようになったのは頭の痛い事だった。今では顔を合わせれば口喧嘩だが、昔はそれなりに仲は良かったのだ。
そう、一緒にいて『兄妹』と思われるほどには。
（何でこうなったんだかなー…）
この問題は今までに幾度となく思案してきたが、何度思い返しても決定的にこれという事が思い当たらない。
女癖が悪いと言われても、付き合っている間は二股かけたりはしていないし、第一、自分が誰と付き合おうとディネアには直接関係のない事のはずだ。
王族の血を引く宰相の娘と一衛兵という関係を考えると不自然なのかもしれないが、今もトラムにとってはディネアもまたソファル同様、妹同然――『守るべき存在』なのだが。
（…まあ、かと言って黙って守られるような性格じゃねえが）
心の中でため息をつきつつ、トラムは諦めて口を開いた。
「よう、ディネア。そんな所で何やってるんだ？」
「！？」

余程深く考え込んでいたのか、トラムの声にびくりと全身で驚きを表して、ディネアが身構える。
わざわざ道を変えるほど嫌っている訳でもないし、このままこの道を行くなら無視するのは不自然だ。そう思っての事だったのだが、予想外の過敏反応で逆に面食らった。
「ト、…ト、トラム…！？」
「おう。…何だよ、そんなに驚かなくてもいいだろ？」
「きゅ、急に話しかけてくるからでしょ！」
噛み付くように非難しながら、ディネアはその豊かとは少々言いがたい胸を撫で下ろす。
「ああ、本当に驚いた……」
「オレはお前が声をかけたくらいでそんなに驚く事にびっくりだ」
トラムにしても、別に気配を断っていた訳でもないし、驚かせようと思って声をかけた訳でもないのに一方的に非難される謂(いわ)れはない。
流石にむっとして言い返せば、ディネアも思う所があったのか口ごもる。
――今までなら、このまま確実に不毛な言い争いに発展する。だが、珍しくディネアは黙り込んで反論して来ない。
居心地の悪い沈黙が落ち、それに耐え切れずにそのまま立ち去ろうとした所で、ディネアがようやく口を開いた。
「わ、悪かったわ…よ」
それは今までの事を考えるに、滅多にないディネアが譲歩した瞬間だった。
こちらに戻ってきてからというもの、顔を合わせば何だかんだと口論になっていた事を考えると、かえって何かありそうで不気味だ。
思わずトラムはディネアの顔をまじまじと見てしまった。
「…な、何よ」
「いや……」
何か良からぬものでも食ったのか？　とうっかり口走りそうな口

を意志の力で押し留めて、トラムは視線を反らした。
この状況でそんな事を言おうものなら、後の事は推して知るべしである。
ふと視界にこれからトラムが向かおうとしていた離宮の姿が入る。ディネアがトラムの接近に気付かないほどに考え込んでいた時に、じっと見つめていたものだ。
「…お前、何か無茶な事を考えてないか？」
嫌な予感がして鎌をかける。
こういう時のトラムの勘はまず外れない。相手が子供の頃から知っているディネアならばなおさらだ。
「何を考えるって言うのよ」
案の定、トラムの問いにディネアは無表情にしらを切る。
――　本人はそれで誤魔化しているつもりなのかもしれないが、トラムは騙せない。そこまで浅い付き合いではないのだ。トラムは心の内で深々とため息をついた。
（…なーんで、こういう所は似てるのかねえ）
おそらく、ディネアが考えている事はトラムが考えている事に限りなく近い。
わざわざソファルの身辺警護を外れてまでやろうとしている事を、ディネアもやろうと考えているのだ。
「――　ディネア、お前はやめとけ」
「！？　な、何の事よ？」
「離宮に忍び込んで国王暗殺の証拠を掴もう、とかその辺りの事を考えてるんだろ？」
誤魔化しを許さずに断言する。
今まで思い切った事が出来なかったのは、ソファルを殺そうとした確固たる証拠も裏づけもないからだ。
逆を言えば――　証拠さえあれば、こちらが一気に優位に動けるようになる。
それを探るには、人がほぼ出払う晩餐会の最中が狙い目だ。もち

ろん、相手もばかではないだろうから、言うほど簡単に行くと思えないのだが。
　トラムの考えが正しい事を証明するように、ディネアが言葉を飲み込むように唇を噛み締めた。そして一呼吸置くと逆に挑むように口を開く。
「…つまり、トラムはそんな事を考えてる訳ね？」
「そういうこった。…ろくに身動き取れない堅苦しい場所で、何処から来るかもわからない相手を警戒するよりか、こっちの方がいろいろと都合が良さそうだったからな。お前もそう考えたんだろ？」
「ええ…そうよ」
　あっさりとトラムが同意したからか、何処か毒気を抜かれたような顔でディネアも頷いた。
「…何よ、普通に会話も出来るんじゃない……」
　ディネアはディネアで、毎度のように売り言葉に買い言葉で口論になるのではと身構えていたらしい。
　何処となく拗ねたような口調での呟きに、トラムは苦笑せずにはいられなかった。それはこちらの台詞だ。
　確かにその場の勢いでディネアの怒りを招くような言葉を吐いたりはするが…、トラムだって決して毎度口喧嘩をしたい訳ではないのだ。
「同じように考えているのなら、どうして止めるの？　トラムも晩餐会の時が絶好の機会だと思うんでしょ？」
「思うけどな…お前、自分の立場を忘れるなよ」
「…立場？」
　不思議そうに反芻（はんすう）され、トラムは眩暈（めまい）を覚えた。
　ソファルといい、ディネアといい…どうして己の『妹弟』は責任感は強いくせに、自分自身の事には関心が低いのだろうか。
「おいおい……――　お前は主賓（しゅひん）の一人だろうが。晩餐会に欠席してどうするよ」
「私が主賓？　宰相の娘でしかないのに、どうしてそんな扱いにな

るのよ？」
飽きれかえって指摘しても、ディネアの顔から疑問符は消えない。本気で頭痛がした。
「…仮とは言え、お前、『正妃候補』なんだろうが」
これでもかと理由を突きつけると、ものの見事にディネアが固まった。
自分で決めた事だろうに、どうやらすっかりその事を忘れていたらしい。やれやれと、トラムは今日何度目になるかわからないため息をついた。

第三十八章　共同戦線

――　お前、『正妃候補』なんだろうが。

「な…っ」

ずばりと突きつけられた言葉に固まったディネアは、その目を大きく見開き――　やがて青くなり、次に赤くなった。

実にわかりやすい感情の移行具合だが、トラムからすれば意外な反応だった。

「何でその事――ッ！！！」

「おい、ディネア…声が大きすぎるぞ」

「っ、ちょ、ちょっとトラム！　何処から聞いたのよ、その話！？」

トラムの注意に慌てて声を抑えながらも、鬼気迫る形相で詰め寄ってくる。

ちなみに情報元は母であるリヨからだ。聞いた話も世間話の延長のようなもので、『そういう事になったみたいよ』程度だったが。

だが、ディネアが結婚問題に関して過敏反応をする事はわかっているし、本人こそ明確な理由まで口にしないが、半ば本気で結婚する気がない事もトラムは知っている。

そんなディネアがあっさりと婚約など了承するはずもなく（しかも相手が『弟』同然のソファルだ）、状況から考えても形だけ、一芝居を打つ為だろうという事は簡単に想像はついていたのだが……。

「何処からって…決まってるだろ？　話が話だし、てっきりお前の了承済みでの話だと思ってたんだが、違ったのか？」

「ち、違わないけど…っ！　それにしたって、リヨはどんな耳してるのよ……」

話が伝わった経路がわかったからか、ディネアの口調がいくらか治まったものの、表情は複雑そうだ。

トラムの母であるリヨがいわゆる『地獄耳』で、王宮内の事なら

大抵筒抜けである事はディネアも当然知っている。同時にその口の堅さも折り紙付だ。
単に噂好きであるなら困った事だが、リヨは本当に重要な事ならば、知っていたとしても決して自分からは話を広めたりはしない。
逆に話したという事は、相手にその情報を伝えておくべきだと考えたという事だ。
だからこそ信頼され、特に身分もないのに前王妃の側仕えに抜擢されたのだし、今までもリヨのその情報収集能力は、何かしらとエラージュやモラン達を助けてきたらしい。
だが、今回ばかりは内容が内容だけに、相手が誰であれ知られたくなかったのだろうとトラムは勝手に結論付けた。
「リヨが言っていたのなら、ある程度の話は聞いてるんでしょうけど…あくまでも『そういう存在がいる』事を匂わす事に協力するという話だったの。でも事態が変わったから、私がそんな事する理由もなくなったのよ」
ディネアは終わった話だとばかりにそう言うが、トラムにはそうは思えなかった。
「そうか？　万が一、晩餐会で何も起こらなかったら、結局、最初の問題に戻るんじゃねえの？」
そもそも、ディネアが地方から戻ってきたのも、ソファルがルシカを何とか角が立たない形でレサイアに戻したいと願った為である。
ソファルの命が狙われ、確かにそれどころではなくなったものの、その問題自体は残ったままだ。だが、その指摘にディネアは断言した。
「『何か』は起こるわよ、…絶対」
「ほう、その根拠は？」
「ないわ」
「…――　オイ」
「ないけど、…今朝、目が覚めてからずっと、何か変な感じがするのよ」

それは、どちらかと言えば現実主義者のディネアにしては珍しい物言い。
「嫌な予感というのも何か違うんだけど…胸騒ぎというのかしら。ともかく落ち着かないの。着飾って作り笑いして、のんびり談笑なんてやっていられそうにないわ」
だから止めても行くのだと視線で訴えてくる。
「…相手は妙な術まで使うんだぞ」
もはや何を言っても無駄だろうとは思いつつ、それでも悪あがきを試みる。
――ディネアの言う、『胸騒ぎ』と似たようなものはトラムも感じてはいた。もっとずっと、以前から。
そう、ソファルの腕に痣を見つけたあの朝から。
ソファルが夢で襲われたのだと告げた時、トラムの脳裏に浮かんだのは、思い出の中にある懐かしい人の事だった。

『トラムはすごいな。もう、そんな事まで出来るんだ』

もう、顔も声もほとんど覚えていない。けれど、その人に誉められて誇らしく感じた気持ちはまだ残っている。
――ルフト＝スライ＝ムージェン。
ソファルの父親であり、トラムが衛兵になる事を志した切っ掛けの人だ。そして、今は生死も知れないトラムの父が心から忠誠を誓っていた人でもある。
幼い子供相手だろうときちんと向き合ってくれるその人の事を、『王』なのだという意識もなしに純粋に慕っていた。
当たり前のように、いつか大人になったら父のように仕え、有事の際は支えるのだと思っていた。
その突然の死は、十五年経った今も謎に包まれたまま。けれど、もし――その死因が自然死でないのなら。
原因が、あるのだとしたら……？

（…無関係であるはずがない）
偶然なのかもしれない。ただ、理由が欲しいだけかもしれない。
しかし、ソファルが夢の中で体験した事は、あまりにも前王ルフトの死を連想させずにはいられなかった。
状況があまりにも似ている気がするのだ。
何とか事なきを得たが、下手したらソファルも目覚める事なく死んでいたかもしれない。想像するだけでもぞっとする。
あまりにも突然だったルフトの死後、悲しみが消えきれぬ中でソファルが生まれた時にトラムは誓ったのだ。
今度は絶対に、どんな事からも守るのだと――。
「何が起こるかもわからない。第一…万が一、何もなかった上に見咎められた場合、こっちが不利になるだけじゃ済まないかもしれないんだぞ」
「そんな事はわかってるわよ。それはトラムだって一緒じゃない」
「オレなら怪しい人影があったとか適当な理由がつけられるし、それがダメでもオレの首一つで解決だが、お前はそうは行かないだろ？」
わざわざ身辺警護を離れてまで、使節団を探ろうとしたのはそんな目算があった為だ。
自分だけなら証拠が見つからずともどうとでもなる。トラムの代わりになる者などいくらでもいるのだ。
だが、一衛兵と宰相の娘では、相手方であるレサイアの対応だって違うはずだ。
…ややこしい事になるのは目に見えている。場合によっては国交問題に深く影響しかねない。
冷静に考えれば、ディネアが動くのは得策ではない。正論を突きつければ少しは落ち着くかと思いきや、逆にその言葉でディネアの瞳に炎が灯った。
「――　それ、本気で言ってるなら許さないわよ」
感情を押し殺したような言葉には、怒りだけでない何かがあった。

「人の立場をどうこう言うなら、あんたこそ自分を軽く扱わないで。ムージェンにとって、トラムは衛兵の一人かもしれないけど…ソ、ソファルにとっては、『兄』に等しい存在なのよ。簡単に切り捨てられると思ってるの…！？」
ぎゅっと握り締めた拳が微かに震えている。ソファルにとっては、とわざわざ前置きしていたが、それだけではないのだと表情が語っていた。
トラムがソファルとディネアを弟妹と等しく思っているように――
彼等も同じように想ってくれている事はわかっている。
今までの付き合いの中、言葉にしなくてもそれは感じられた。
いつの頃からか顔を合わせれば喧嘩ばかりでも、ディネアを心底嫌えずにいるのは、それがわかっているから。
トラムはしばし沈黙し、やがて諦めたようにため息をついた。
「悪い、…オレが悪かった」
「…わかればいいのよ」
トラムが折れた事で、ディネアがほっとしたように表情を緩める。
何となく今なら、どうして普段は自分に対して喧嘩腰なのか聞けそうな気がしたものの、久し振りの口論なしの会話がもったいないような気もして、トラムは話を進める事にした。
「それじゃあ、不本意だが…共同戦線と行くか」
「不本意って何よ。別にトラムまで出て来なくたっていいんだけど？」
「そうは行くか。安全とは限らないんだぞ？　お前に怪我させる訳には行かないだろうが」
相手だってこの状況で無防備とは思えない。当然、何かしら仕掛けている事だろう。
それは極自然に、トラムにとっては当たり前の事としての言葉だったのだが、ディネアは何故かそこで沈黙した。
「…ディネア？」
何か変な事を言ったかと問いかければ、ディネアは我に返ったよ

うに大袈裟なくらいに首を振った。
「な、何でもないわ！　さ、離宮に行きましょ！」
まだ具体的な話もしていないのに、先に立って歩き出す。仕方なくその後に従いつつ、トラムは何なんだと首を傾げた。
「離宮に行くったって、晩餐会までまだ時間があるぞ？」
「そ、それくらいわかってるわよ。だからその…そう、ルシカ様よ」
トラムの追求に苦し紛れのように出てきたのは意外な名前だった。
「…姫様？」
昨日一日探し回った挙句、結局使節団側に身柄がある事が判明したが、その名前がここで出てくるとは思わなかった。
「そう。晩餐会には出られるって言ってたわ。身支度をする必要があるはずよ。もしかしたらもう戻ってるかもしれないでしょ？」
くるりと振り返ってこちらを見る視線は、当然のように同行を求めている。
確かに持ち場に行ったとしても、時間までは暇を持て余すようなものだ。
今もルシカが完全に無関係だとは思い切れないトラムとしては、あまり顔を合わせたい相手でもないのだが――。
「へいへい、お供しますよ」
何処か投げやりなトラムの言葉に、満足そうにディネアは微笑んだ。

第三十九章　リヨ＝イルマース

「…ルシカ様！」
レサイアの女官に連れられ、与えられた部屋に戻ったルシカを迎えたのは、ムージェンから側付きにと与えられたリヨという名の女官だった。
「体調が優れないというお話でしたが、もう宜しいのですか…？」
駆け寄ろうとしかけるのを、レサイアの女官の目を気にしてか踏みとどまり、軽く一礼をしてから心配そうに尋ねてくる。その様子を、ルシカは不思議な思いで見つめた。
「軽い過労です。今夜の晩餐会の参加に支障はないと医師から承っております」
淡々と返す女官の言葉に、リヨは驚きを隠さなかった。
「こんなに顔色がお悪いのに、晩餐会に出席させるのですか！？」
「今夜の晩餐会は、我が国と貴国の親睦を深める為のものだと伺っております。皇帝陛下の息女として、その席に欠席する無礼は許されません」
「お待ち下さい。今回は立食式なのですよ？　体調が悪い時にそのような無理をしては……」
「ご心配はありがたく受け取らせて頂きますが、出席か否かはそちらが決める事ではございません」
「…っ」
言外にこれ以上差し出た真似をするなと釘を刺す言葉に、リヨが言葉に詰まる。
確かにいくら体調が心配だからと言って、一介の女官が口を出してよい問題でもない。
そもそも、リヨは臨時でルシカ付になっているだけで、レサイアとは何の関わりもないのだ。元からそんな権限は何処にもなく、余計な事と言われればそれまでだ。

ルシカはそれでもまだ物言いたげなリヨに歩み寄り、その手に触れた。
「ルシカ様…？」
何事かと怪訝そうな目を向けてくるのへ、ルシカは小さく首を横に振った。
大丈夫だと伝える為に、その手を握る。
これ以上会話しても、レサイア側の態度は変わらない。リヨの立場が悪くなるだけだ。
「それではまた後ほどお迎えに上がります」
レサイアの女官達はそれで用が済んだとばかりにさっさと退室して行く。支度を手伝う様子すらない。
その姿が扉の向こうに消え去ってから、リヨは深くため息をついた。
それはレサイアの女官に対する憤りと、ルシカが無事な姿を見せた事への安堵からだった。
「…ご無事でようございました。本当にもう具合は宜しいのですか？」
そっと、気遣うように問いかけられ、ルシカは先程のアルノーンの言葉を思い出した。

『ムージェンの国王と彼に仕える人々は、随分とお人好しのようでしてね。あなたの事も随分親身になって心配しているようです』

あの時はまさかと思った。
そうされる理由も、価値も、この身にはない。けれど、リヨの言葉にはアルノーンの言葉を裏付けるような温もりがあった。
今までを思い返しても、誰かに心配してもらうなど初めてだ。
心底不思議で、反応を返すのも忘れてまじまじと見てしまう。不躾とも取られかねないその視線に、リヨはその目を細めて微笑んだ。
「ソファル様もとても心配なさってましたから、ご無事だとわかれ

ばきっと安心なさいますわ。自分も探すと言い出して、周囲の人達を困らせたりもしていたようですのよ」
その言葉にまた驚く。その驚きが伝わったのか、リヨの笑顔が深まった。
「我が君…ソファル様は先代に似てか、とても人が好い方で…正直に申し上げますと、国王としてはあまり誉められた事ではないと思います」
その率直な言葉は、一介の女官にしては過ぎた物言いと取られかねない。けれどその瞳にあるのは、何処までも穏やかな慈しみの光。
言葉よりも雄弁に、リヨの深い忠誠と敬愛が伝わってくる。
この人も彼の事を心から大切に思っているのだ。この王宮にいる人間の多くが、ソファルを仕えるべき国王としてだけでなく、そのように想っているのだろう。
…それは、ルシカの知るレサイアの宮廷ではなかったもの。
「お会いして間もない上に、ろくに話した事もないでしょうから信じがたいかもしれませんが…ソファル様はルシカ様の事を、本心から心配なさっていました。出来る事ならそのお心を疑わずにいて下さると嬉しく思います」
続いた言葉に、ルシカは心から困惑した。
疑うも何も、ソファルが優しい人なのはルシカにもわかっている。
…ただ。ただ、その優しさが自分にも向けられている事が不思議で――。
気味悪がられていると、得体が知れないと思われているのではないかと思っていたのに。
（…なんだろう）
胸の奥がほんのりと熱を帯びた。
（――　嬉しい……）
初めて笑顔を向けられた時にも感じた、暖かな熱。
――　今なら、少しわかるような気がする。
今まで『死』を恐れた事はない。今もまだ、自身の『死』に関し

てはどうでもよいと思っている。
…でも。
死とは――　その人が永遠に喪われてしまうのだということ。
甦るのは、真っ直ぐにルシカを見て笑った、空の青。色を喪った世界に、再び与えられた色。
（あの人が、死ぬのは…嫌だ）
その思いを再認識する。生まれて初めて、誰かを助けたいと思ったその気持ちを。
そう思う感情が、何処から来るのかルシカにはわからない。感情というものが、己にもある事に戸惑うほど。
ただ、彼が殺されるのは見たくないのだ。理屈などなく。
彼は――　ソファルは、こんな形で死んで良い人間じゃない。
接した人数は決して多くはないが、リヨを筆頭にムージェンの人々はルシカに対して親切だった。だから、彼等も死んで欲しくない。
…壊したく、ない。この場所を。この国を。
この場所に来てから――　否、ソファルと直接会ってから、自分は何か変だと思う。
自分から助けようとしたり、守りたいと思ったり――　今までならば、そんな事を思わなかっただろう。
自分でもそんな心の動きが不思議だった。不可解だけども、それは決して嫌ではなくて。胸の奥の、微かな熱を消したくなくて。
この自分にも出来る事がある。自分には、彼等を助けられる術がある。それが嬉しい。そう、これは――『喜び』なのだ。
「軽いお食事もご用意してますが、お召し上がりになりますか？それともまだ、晩餐会までお時間がありますから、少し横になっておかれます？」
余程顔色が冴えないのか、椅子を勧めながら甲斐甲斐しくリヨが問いかける。
勧められるままに椅子に腰を下ろしながら、どうしたものかと考える。

確かに昨日からろくな食事はしていないが、あまり空腹自体は感じていなかった。元々、食べる事自体に関心が薄いという事もあるだろう。
今まで、ルシカにとって食事とは、単なる生命維持の為のものでしかなかったのだ。
レサイアの宮廷で過ごした二年の間、食事は与えられていたし、それまでの草の根を食むような生活からすれば豪華なものだった。
だが、それを『美味しい』と感じた事はない。
美味しいとか不味いとか、それは二の次で、無意識にそれが『食べられる』か『食べられない』かだけで判断してしまう。
だから特に食事を必要とは感じなかったものの、かと言って睡眠が必要でもない。
しばし考え込んでふと視線をリヨに戻すと、その手にはいつの間にか身体を締め付けない室内着が用意されていた。
「お休みになるのならこちらをどうぞ。お食事でしたら一度頷いて下さいませ」
口が利けず、意志を伝える文字も知らないルシカの為に、選択肢を用意してくれる。その心遣いに少し戸惑いながら、ほとんど反射的にルシカは頷いていた。
「お食事ですね。すぐにご用意いたします」
食欲がある事に安堵したのか、リヨがほっとしたような笑顔になるのと、ルシカの部屋の扉が叩かれたのは同時だった。
すぐに扉の近くにいた別の女官が向かう。誰何のやり取りが交わされ、その顔はリヨとルシカの方に向けられた。
「ディネア様とトラム殿です。ルシカ様がお戻りなら一度お目通りなさりたいという事ですが……」
どうすると視線で問われ、リヨは心配そうにルシカに目を向けた。
「あらまあ…、どうなさいます？　お会いになりますか？」
問われて少し考える。
ディネアという名前には聞き覚えがない。名前からして女性のよ

うだが……。
トラムという名前は前にソファルから聞いた記憶がある。確か、先日夜の庭で遭遇した人物だ。
拒否する理由もないが、彼等が会いたがる理由もよくわからない。どう対応すればよいのかわからずにいると、リヨがその困惑に気付いたように言い添える。
「どちらもソファル様に身近な方ですから、お断りしてもさほど支障は出ませんわ。…片方はわたくしの不肖の息子ですし……」
少し気恥ずかしそうなリヨの言葉に、ルシカの迷いは失せた。会うと伝える為に、リヨの手に触れ、一度頷く。
リヨはその意図を間違う事なく察して、何処となく気乗りしない様子ながらも扉の元にいる女官に入室を許可した。

第四十章　対面

ルシカの部屋の前で入室の許可を待ちながら、ディネアはほっとしたように呟いた。
「無事に戻ってるのね。良かった」
「ああ、そうだな」
応対に顔を見せた女官から、ルシカの体調があまり良くなさそうな事を聞き、それだけは心配ではあるものの、アルノーンが嘘を吐かなかった事に少しだけ安堵する。
正直、口先だけの約束で終わるのではないかと危惧していたのだ。
もちろん、無事に帰されたなら帰されたで、どうしてわざわざルシカの身柄を一晩拘束していたのかという謎が残るのだけども――。
「…それで？　直接会ってどうするんだ。尋問でも？」
まさか顔を見るだけじゃないだろうと言外に言われ、我に返る。反射的にトラムを見れば、何処か探るような視線を向けられた。
「尋問って…そんな事はしないわよ。第一、確か口が利けないんでしょ？」
「それはそうだが、それなりにやりようはあるだろ」
「そうだけど……」
確かに口が利けないとしても、何があったのか、ある程度の事は確認出来るだろう。
昨晩、何処でどのような扱いを受けていたのか――　おそらく、敵の思惑の一端をそこから読み取る事も出来る。
だが、トラムに指摘されるまでディネアの頭にそんな考えはほとんどなかった。
ディネアにとって、ルシカはあくまでも事態に巻き込まれた『被害者』であり、ソファルが助けたいと望んだ人物という認識しかない。
立場も忘れて自ら助けようとしていた位だ。お人好し過ぎる所の

あるソファルではあるが、全てを鵜呑みにするほど愚かでもない。
何かしら理由があっての行動だと思ったからこそ、ディネアも協力しようと思えたのだし、ソファルの為にもルシカが無事であればいいと願っていた。
だが――。
（――　何？　トラムは何か知ってるの？）
トラムの言い分に違和感を感じ、ディネアは考え込む。
無事を確かめるだけでなく、『尋問』などというあまり穏やかでない表現を口にする辺り、トラムが自分のように単純にルシカの無事を喜んでいる訳ではないとも言える。
（…被害者ではなく、関係者、ということ？）
つまり――　『敵』である可能性もあるという事だ。
そう考えればトラムの態度にも納得が行く。
何故そんな疑いを抱いているのかはわからないが、基本的に女子供には親切なトラムが『女の子』であるルシカを理由なく疑うとも思えない。
「トラム、あんた一体――」
何を知っているのか、と問い詰める前に目の前の扉が再び開いた。
「お待たせいたしました。お会いになられるそうです」
「…っ。そう、ありがとう」
女官の言葉にディネアの問いは中断される。
正直気になって仕方がないものの、この場で問い詰める訳にも行かない。
結局、話は保留されたまま、二人はルシカと対面する事となった。

＋　＋　＋

開かれた扉から二人の人間が入室してくる。
一人は見覚えのある長身の青年。そしてもう一人は、青年より幾分若い女性。

リヨの息子らしい青年――　トラムはそのまま入ってすぐの場所に控え、女性だけが進み出る。髪や瞳の色はわからないものの、綺麗な人だと素直にルシカは思った。
「初めてお目にかかります、私は――　…！？」
何故かディネアという名の女性は、ルシカを目にした途端に固まった。
だが、それは一瞬の事で、すぐさま我に返ったように挨拶を口にする。
「…し、失礼いたしました。私はディネア＝ドゥジニ、現宰相モランの娘です。お会い出来て光栄です」
そして優雅に一礼。背後に控えていたトラムも同様に頭を垂れる。
何事もなかったかのように取り繕ったものの、目の前での事だ。流石に誤魔化せない。
何をそんなに動揺したのだろう。不思議に思いつつ、ルシカも立ち上がり、口上を述べられない代わりに一礼する。
すでに口が利けない事は知っているのか、ディネアは特に何も言わずに微笑んでくれた。
「いろいろお尋ねしたい事もございますけれど、お疲れのご様子ですし、今回はご挨拶だけにいたします。…晩餐会には出席を？」
頷けば、心配そうな目が向けられる。リヨの心配と言い、余程顔色が優れないらしい。
「無理はなさらない方がいいですわ。主賓（しゅひん）としての勤めもあるでしょうが、体調に差し障りがあってはいけません。ご自身から申し出にくいのであれば、こちらから代表者の方にお伝えしても構いませんのよ」
ディネアの言葉には純粋な思いやりが込められていた。
実際、体調が万全かと言われれば否と言わざるを得ないが、かと言って欠席する訳には行かない。
レサイア側はどんな理由をつけてでも強行に出席させようとするだろうし、ルシカも欠席するつもりはなかった。

全身を縛(いまし)める、不可視の糸を意識する。
この糸の先にいる人々の悲しみ、怒り…そして嘆きを、ルシカは知らない。彼等には彼等の正義があって、この大地を滅ぼそうとしているのだろう。
おそらく、彼等もまた『悪』ではないのだ。それでも――。
（ごめんなさい……）
彼等の痛みがわからないから、ただルシカは心の内で謝罪する。
理解すら出来ないまま、彼等の障害になろうとしている己には、ただ謝る事しか出来ないから。
捨て身の彼等相手に、手加減など出来ない。手加減できるほど、ルシカには術者としての知識も経験もない。場合によってはおそらく最悪の結果になるだろう。
すなわち――　ルシカを含む、この術に携わった全ての者の死。
己の内に全てを犠牲にして閉じ込めてあるのは、そのような『毒』だ。けれどその代わり、この大地に生きる人達は守られるはず。

『…今度は、お前の番だ』

ふと思い出す、ティスカの今際の言葉。
ああ、本当にその通りだった。
ティスカが言うように、自分の願いの為に多くの人を道連れにしようとしている。あんなに違うと、思っていたのに。
自分がそんな風に何かを望む事なんて、ないと思っていたのに。
心の内で自嘲する。わかっている、これは自己満足だ。
こんな助けられ方をしても、きっと誰も喜ばない。それでも、自分には彼等を災禍から守るにはこんな方法しかないのだ。
だから、晩餐会には出席しなければならない。
自分が行きたいのだと確かな意志を込めて見つめ返すと、ディネアは少し驚いたような顔をした。
晩餐会自体には興味はないが、会場には当然、ソファルも出席す

る。
術的な知識に不安がある状況で、守りたいと願う対象が目の届く場所に――　身近にいてくれた方が、うまく行くような気がした。
やがてディネアの顔が先程の微笑とは違う、確かな笑みを浮かべる。何処となく楽しそうな、また同時に挑発的な――。
「…あなたは味方だと思ってよろしいの？」
やがて唐突に問われた言葉は、簡潔ながらもとんでもないものだった。
横で聞いていたリヨだけでなく、控えていたトラムもぎょっと目を見開く。その問いにどう答えても、ルシカの身の上は危うくなりかねない。

――　試されている。

頷けば『裏切り者』、否定すれば『敵』に。
けれどどうして、そう呼ばれる事を恐れる理由があるだろう？
そもそも、レサイアに誰一人ルシカの味方などいなかったし、居場所自体なかったのだから。
事実、ルシカはもうとっくに選んでいる。

『今度は、お前の番だ』

何度、その呪われた言葉が心を縛っても。答えはもう出ているから。
――　あの青を守るのだ。
何処よりも天に近い、穢れなき青を。その青に重なる笑顔を。
たとえそれが、己を含めた多くの死を招こうと。それだけがルシカの願い。
心の内の答えに導かれるまま、ルシカは躊躇（ちゅうちょ）なく頷いた。

断章　ー十八年前（1）ー

葬列は予想以上に寂しいものだった。
手向ける花もなければ、見送る人も疎ら、しかも空は今にも雨が降りそうなほどの曇天――。
《災厄》以来、珍しくもなくなった天を覆う厚い灰色の雲は、ただでさえ重苦しい空気をさらに重くする。
三日前の夜、生き残った王族だけで話し合い、その場で急遽執り行った仮の戴冠により王位を受け継ぐ事が決定した新王は、ひっそりと吐息をついた。
正式に王位を継ぐのは喪が明けてからだが、すでに誰もが彼を『王』として扱っていた。その責任が、重く肩に圧し掛かる。
おそらく、歴代の王でも最もみすぼらしい葬儀に違いない。仮にも、かつては『神の代行者』と呼ばれた国の王の葬儀だというのに。
…だが、その事に対する不満の声はない。
墓所へと運ばれてゆく棺を見送る視線は、いずれも無感情で無機質なものだ。
それもそうだ。今は誰もが自分の事で精一杯、明日棺に収まるのは自分かもしれないような状況で、他人の死を悼む心の余裕などあるはずもない。
――　人が死ぬ事が日常的な出来事になって久しい。
最初こそ、人が嘆き悲しむ声や、断末魔の苦しみの声が聞こえない日はなかったのに、今ではそんな声に同情する者も、次は自分ではと怯える者も随分と減っていた。
人は何事にも慣れてしまう生き物だから、国を襲った悲劇的な災害によって齎された不幸にすら慣れてしまったのだろう。
しかも、日常生活において特に関わりのなかった国王が死んだ所で、彼等の生活は何も変わらない。
それに――　きっと父は人々からは慕われ、惜しまれるほどの人

望に恵まれてはいなかった。
だからこそ、せめてその血を引く自分だけはかの人の死を惜しみ、嘆くべきだと思うのに――　涙など出る気配もない。彼はその事実に途方に暮れていた。
「ルフト様…大丈夫ですか？」
背後から聞き覚えのある声がかけられる。
はっと我に返って振り向けば、そこには自分より頭一つは高い男の姿。
「…カレットさん」
名を呼べば、普段は何処となく抜き身の刃を思わせる鋼色（はがね）の瞳が微かな苦笑を漂わせた。
男の名はカレット＝イルマース。二十五という若さながら、国王直属の私兵である護衛官の、筆頭と見なされていた人物だった。
何人かいた護衛官の中でも一番年齢が近いだけでなく（正確に言うなら、カレット以外は四十前後のいかにも熟練者といった者ばかりだった）、数多く存在する王宮の使用人の中で一握りにも満たない、彼を『王の子』として扱う人間の一人。
「カレット、とお呼び捨て下さい。…一応、ここは公の場ですから」
言われてその事実を思い出したものの、今までずっと『さん』付けしていた相手を呼び捨てるには躊躇（ちゅうちょ）が先に立った。
ただでさえ、ここ数日で周囲の自分に対する態度が急変して戸惑っていたところだった。
生まれてからずっと『スライ』と呼ばれていたのに、今は誰もが『ルフト』と呼ぶ。亡き母を除けば、ごく限られた近しい人々しか呼ばなかった名前を。
そんな彼の内面を察してか、カレットは呼び捨てる事を強要はしなかった。代りに抑えた声音でもう一度尋ねてくる。
「大丈夫ですか？　顔色が優れませんが……」
確かに、ここ十日ほど満足に眠れていなかった。
国王であった父が危篤となった事で、あらゆる事が一気にルフト

の上に降りかかってきたからだ。
先立つ母の異なる兄と姉の不幸の際に、このような状況を予測してしかるべきだったのだろう。父が倒れて、ようやく己の立場に気付いたというのも間抜けな話だ。
だが、それまで一度として『王族』としての自分を必要とされた事などなかったから、国の未来を担う立場になるなど有り得ないと思い込んでいた。
ましてや、自分がこの国を継ぐ事になるなど。
実の父とさえ、まともに会話をした事は数える程しかなかったのに――。
「…平気です。後は、火葬だけですし……」
葬儀に参加した事はあっても、自分が中心になって執り行った事など当然ながらない。慌てて叩き込んだ付け焼刃の知識だ。
本来なら、自ら先頭に立つ必要もない。そうした事を担当する部署に属する人々が取り仕切り、必要な所だけ動けばいいのだ。
だが、今の王宮はすでにまともに機能していない。
カレットが属する護衛官も、《災厄》により多くが命を落としており、組織として成り立たない事と次代であるルフトが必要としなかった事から、役職自体が消滅する事が決定している。
そのような状況だ。適した人材を寄せ集め、役割を振るよりはルフト自身が葬儀を仕切るのが一番手っ取り早かった。
それは速やかな葬儀の実行に結びついたものの、代わりに犠牲となったのはルフトの睡眠時間だった。
いくら健康で若くても、眠らなければ身体がもたない。今のルフトは半ば気力だけで立っているようなものだ。
正式な葬儀の手順に則(のっと)れば、遺体は火葬にされた後、灰は風に乗せ、骨は大地に埋める。
それは神がこの世界を創造した際、命を己の息吹から、血肉を大地から創り出したとされ、それぞれの由来する場所に戻す事で、魂が迷いなく死者の世界に行けるようにするという目的があっての事

だ。
だが、今は火葬を執り行う人の手の方が足りないような状況だ。一般の民はもはやそんな葬儀の手順など関係なしにそのまま遺体を埋めてしまう事も多いという。
今回の葬儀も火葬こそ行うが、その後の灰と骨を世界に還す儀式は後日王族だけで行う事になっていた。
あと、少し。それまでは倒れる訳には行かない。
――　それに寝不足なのは、そうした知識を得たり、慣れない準備をしていた為だけではなかった。
ちらりとカレットに気付かれないように視線を彼の隣に向ける。
『ソレ』はその視線に気付いてか、くすりと皮肉な笑みを零す。
（……）
何度見ても理解出来ない。
喪服ばかりの中、一人無駄に豪華な服装――　正装をしているその男が、自分以外の誰の目にも見えていないという事実を。
年の頃は二十代後半、もしくは三十を少し超えた辺り。
カレットほど長身ではないが、ルフトよりは幾分背が高い。体つきも何処か骨太な印象で、決して太っている訳ではないのだが、何と言うか貫禄がある。
その身に着けた色は青。ムージェンにおける神聖にして、天に通じる色だ。
青と言っても微妙な違いで様々な色があるが、男の色は何処か灰色がかった冬の空を想わせるもの。
それは何処か冷たい印象を抱かせる男によく似合う。まさに、この国の王にふさわしい装いだと思う。
…おそらく自分には、まったく似合わないだろう。
自分は今でも自分に自信などないし、実際無力だ。そもそも、正装は自分には不釣合い過ぎて苦手だし、そのような装いをしたい訳ではないのだが。
「随分疲れているようだな、ルフト」

側にカレットがいる事などおかまいなしに、ソレは顔を覗き込んでくる。反射的に身を引きそうになるのをぐっと耐え、誰のせいだと視線で返す。

――　初めまして、と言うべきだろうな。私は《ニルヴァセレウ》。お前のような者が現われるのをずっと待っていた。

ニルヴァセレウ――　『十七番目』という名前にしては奇妙な名乗りを上げて、この男が姿を見せたのは、戴冠を終えて自室に戻った時だった。

――　私は親切だから先に忠告しておこう。私の姿も声も、第三者にはまったく見えないし聞こえない。信じないのも勝手だが、それで過去に狂人扱いされて投獄された者もいるから気をつける事だ。

今までにも女官達で確認済みだが、護衛官として人の気配に敏感であるはずのカレットが気付かない以上、自分以外に見えないというのは事実だろう。

その時のやり取りを思い返し、ルフトはしみじみ思う。

何故あの時、反応してしまったのだろう。見なかった事にしておけばこの奇妙な存在に付き纏われる事もなかっただろうに。

するとその思考を見透かしたように、ニルヴァセレウは冷ややかな笑みを浮かべた。

「さては気付かない振りをしていればとでも思っているだろう。無駄だ、ルフト。お前と私はある意味、運命共同体のようなものだと言っただろう。…いっそ、共犯者と言ってもいいかもしれない。場合によっては死ぬまで付き合う事になるのだから早々に諦める事だ」

何処か楽しげに告げる言葉は、顔を合わせた最初の時にも聞いたものだった。

そう、『運命共同体』――　この先、ムージェンがどう転ぶかは

自分自身次第なのだと。
（…モランやフィリーがこの話を聞いたら、『またか』って言いそうだなあ……）
いろんな出来事で飽和状態の頭でぼんやりそんな事を思う。
年上の親友と年齢が近すぎる叔母は、幼馴染のような間柄であり、ルフトにとっては最も身近な、家族同然の存在でもあった。
…自分では自覚はないのだが、彼等が言うにはどうも自分は『厄介ごと』に巻き込まれやすいらしい。
このニルヴァセレウについてはその最たるもので、しかもとんでもなく根深い問題と言えそうだった。
今回ばかりは流石に、自分でも厄介だと思う。
即位したのも、特に何かの希望があってという訳ではないし、国王としての自覚など当然まだない。
そんな状況で、簡単に国を――　否、世界を左右する秘密を抱え込んでしまった。
その上、困った事にこの事について誰にも…モランやフィリーにも相談出来ないのだ。

――　ニルヴァセレウが、真実、『ムージェンの意志』であるならば。

断章　ー十八年前（2）ー

――　私が何かと言うとだな、単純に言えばこのムージェンの意志みたいなものだ。

実際は、『意志』ともまた微妙に違うらしいのだが、詳しい話をしても確実に理解出来ないのでわかりやすく表現した、とは本人の談だ。

――　本来なら『三番目』のお前に『天の青』が出るはずがないんだが、…どうやら突然変異らしいな。そんな訳でこれからよろしく。

そう言って、どう応じていいのかわからないまま立ち尽くすルフトを他所に、ニルヴァセレウは勝手に話を進めた。

語られた事と言えば――　そのまま寝台に直行して夢として片付けたいと思うほど、突拍子もなければ、信じがたい話ばかりだった。

そしてその、突拍子もなければ信じがたい、けれど事実だという話の『共犯者』に一方的にされてしまったのだ。

多少の事には大抵動じない彼も、これには少々参った。事があまりにも重すぎる。

再び口をついて出そうなため息をかみ殺して、ルフトは横に控えるカレットに目を向けた。

自分よりもずっと大人の男。前王の護衛官だった事以外、彼について知る事は少ない。親しく口を利くようになったのも割と最近の話だ。

そんなあまり深いとは言えない間柄ながらも、ふと尋ねてみたくなった。

もし、とんでもない秘密を――　知れば、その人間の人生を狂わ

せかねない秘密を抱えた時、カレットならばどうするのだろう。
国王の間近で仕えていれば、人には話せないような秘密を一つや二つは抱える事になったはずだ。知る限り、前国王であった父は清廉潔白な人物ではなかったのだから。
相手を巻き込む事を承知で誰かと共有する？
それとも、一生死ぬまで己の内に抱え込むのか――。
けれど、結局ルフトはその問いを向ける事はしなかった。問えば、そんな秘密を自分が抱えていると言っているようなものだ。
問いかけを飲み込んで視線を落としたルフトに、ニルヴァセレウは物言いたげな目を向ける。やがて開かれた口から出たのは、今までになく心配そうな言葉だった。
「…ルフト、お前はそうやって何でも受け入れてしまうが、気をつける事だ」
「……？」
何を、と視線で問い返せば、ニルヴァセレウは珍しく言葉を選ぶように僅かに沈黙する。その事自体、今までのやり取りにない事だった。
ルフトにはニルヴァセレウが自分の何をそんなに危惧しているのか、まったく想像も出来なかった。心配されるほど、何もかも受け入れてきた自覚もないのだ。
やがてニルヴァセレウはぽつりと言葉を漏らした。
「お前は…『三番目』だからな。『闇』の影響が強く出る」
（…闇……？）
王位を継ぐ事が決まるまで、ほとんど全ての人間が『スライ』と己を呼んできた。単に生まれてきた順番と言うよりも、第二の名前と言った方が近い。
それが何故、『闇』などというあまり良い意味のなさそうな言葉と結びつくのか――。
反射的にカレットの存在を忘れて問い詰めようとしかけた矢先、まるでその言葉を封じるようにニルヴァセレウが再び口を開く。

「そう…とても深い、何もかもを覆い隠してしまえる闇だ。…自分自身の痛みすらも。『天の青』があっても、そもそもの宿業には左右されるという事か……」
何処か苦さを漂う言葉に、ルフトはただ困惑する。
いつも飄々として、こちらの反応を楽しむような態度だっただけに、その言葉をどう受け止めるべきかわからない。
空の色を映した自分と同じ色の瞳が、どうしてそんなに沈痛の色を浮かべているのか、その理由も思いつけない。
ただ、わかるのは――　ニルヴァセレウが自分を案じているらしいという事実だけ。
「…おそらく隠蔽されてしまっているか、記録自体ないだろうが、気になるなら調べてみるがいい」
まるでその場にいるのが耐えきれなくなったかのように、すうっとその姿が周囲に溶け込んで行く。
この傍迷惑な自称・『ムージェンの意志』は、いかなる時も神出鬼没だ。
「『スライ』の名を持つ直系王族がほぼろくな死に方をしていない事がわかるだろう。私は結構、お前を気に入っているんだ。だから…出来れば不幸な結果にはなってもらいたくない」
こちらが人目を気にして引きとめられない事を承知でか、最後の最後で不吉な言葉を残してその姿は完全に消え去った。
「ルフト様？　どうしましたか？」
呆然とするルフトに気づいてか、カレットが気遣うような声をかけてくる。
「墓所はもう間もなくです。着きましたら少し休息を取りましょう。やはりお疲れのようですから」
「あ、いえ、…大丈夫です。葬儀を進めましょう」
ニルヴァセレウの不吉な言葉を振り切るように、努めて明るい声を出すものの、その試みは失敗に終わった。
無理をしているように受け取られたのか、カレットの表情が曇る。

「ですが…先程より顔色が悪くなっている気がします。無理はいけません。あなたに代わりはいないのですから」
「…わかっています。でも、早く終わらせてしまいたいんです」
それは正直な思いだった。
「まだまだやらなければならない事がたくさんあるから……。自分でも薄情だと思います。父親の葬儀なのに、まるで義務のように片付けている。涙すら出てこない。でも今は、立ち止りたくないんです」
一度でも立ち止ってしまったら、考えないようにしている事まで考えてしまう。
先行きが見えない未来や、見えない場所で死んでいく人々の事。いつ終息するかもわからない《災厄》――。
そして、抱え込んでしまった『秘密』の事を。
カレットはルフトの気持ちを理解したのか、小さく頷いた。
「わかりました。他でもないあなたがそう仰るのなら従います」
「…カレットさんは、どうして私をそんなに…その、立ててくれるんですか？」
兄や父の死がなかったなら、おそらく自分が王になる事はなかったはずだ。
そんな立場の自分を、カレットはモランやフィリーのように昔から近くにいた人間でもないのに、最初から『スライ』ではなく『ルフト』と呼んだ。
今まで不思議に思いながらも聞けなかった疑問が、ふと口をついて出た。
カレットはその問いに普段は鋭い目元を和ませた。
「――　それはあなたが、信用に足る人間だと思ったからですよ」
おそらくその場に他に誰かいたなら、無礼だと受け取られても不思議ではない率直な答えだった。
「薄々は気づいていらっしゃるでしょうが、護衛官の仕事は綺麗なものばかりではありませんでしたからね……。いくつもの仕事をし

ている内に、私はいつの間にか『人を信じる』事が出来なくなっていました」
「人を、信じる……」
「ええ。主君である陛下ですらも…私は信じる事が出来なかった。あの方もおそらく、誰も信じてはいなかったでしょうが」
仮にも仕えた王に対しても、カレットは言葉を飾らなかった。
だが、その言葉を否定するだけのものをルフトは持ち合わせていなかった。実際、最後の最後まで父王は他者は元より、血を分けた実の息子の言葉にすら耳を傾けようとはしなかったのだから――。
「いろいろと切っ掛けはありますが、何よりルフト様の周囲はいつも嘘がなかった。当然、隠し事くらいはあるでしょうが、見ていて…とても『正常』に感じました。人徳とでも言うのですかね。二度と人など信じないと思っていた私が、もう一度、信じてみたいと思える位に。…だから私は、あなたが国王となられた事を素直に喜んでいますよ」
「そんな…私はそんなできた人間じゃないですよ」
心から否定すれば、カレットは笑みを深めた。
「だからこそ、かもしれません。あなたは自分を完璧とは決して考えない方だ。不完全でも、自分のやれる事をやろうとする…そんなあなただから、皆、望んで手を差し出すのだと思いますよ。私もその一人になれればと思っています」
その表情は何かが吹っ切れたように清々しい。かつて父の下で働いていた頃には見た覚えがない、明るい表情だった。
その言葉が、表情が胸を突く。
何も知らなければ、きっとその言葉を素直に受ける事が出来ただろう。
代々の王が知らずに積み重ねてきた罪業の為に、今の彼等の不幸があると知らなければ。

――　全ての罪は、何処かで清算されなくては。

甦るのはニルヴァセレウが告げた言葉の数々。

――　最後の真なる王が没して、三百年が経過。状況が改善される事もなく、真なる王も現れず、約定に則り私は機能を停止させた。つまり……――　この《災厄》は自らが招いたものと言う事だ。

すなわち、ムージェンを襲った《災厄》には原因があると言うこと。

全ての始まりであった長雨も、『意志』であるニルヴァセレウが自らの役割を放棄した結果、起こったと言うのだ。

そして何故、彼がそんな事をしたのかと言えば、王族を筆頭に人心が荒廃した為という。

――　もっとも、今はそれに人災も加わってややこしい事になっているがな。だが、それも結局の所は自業自得だ。人の恨みを買うような行いを繰り返すから、こんな事になる。

言われた言葉を、ルフトは否定する事が出来なかった。全て事実だったからだ。

実際の被害の大きさこそわからないが、先々代、いやそれ以上以前から、地上に対して無体な仕打ちを繰り返していた事は知っている。

他でもない、ムージェンの王がだ。そして臣も民もそれを黙認し続けた。

ニルヴァセレウはそんなムージェンを見限った。存在し続けても、世界に対して有害でしかないとみなしたのだ。

――　だが、お前が王になった。正統な資質はなくとも、それに準ずる者。だから猶予（ゆうよ）を置く事にした。

一種の賭けだ、とニルヴァセレウは告げた。

――　一度壊れたこの国を、お前が新たに作り直せ。人災の方は私にもどうしようもないが、天災の方は一時的にだが終息する。その間に結果が出ればお前の勝ちだ。私はお前に従おう。

それこそが誰にも語る事が出来ない秘密。

これからの未来を決めるのは己次第だという、圧倒的に不利な賭け。

王になったのも成り行きに近いものなら、どうこうしたいという理想すらない。元々、愛国心など感じていなかった位だ。

どうすれば良いのか、手掛かり一つもないというのに。

やがて視界に墓所が見えてくる。ルフトは頭の中を切り替えた。答え一つ見つからずとも、時間は容赦なく過ぎて行く。

『そう…とても深い、何もかもを覆い隠してしまえる闇だ。…自分自身の痛みすらも』

たとえそこが闇の中であろうと、進んで行くしかない。飲み込まれて、身動きで出来なくなるかもしれないとしても…そこにしか道はないのだから。

希望の光は見えない。――　今は、まだ。

第四十一章　約束

…そして長い長い時が過ぎ、ついに『鳥』の時間に終わりが訪れたのです。
神は死に行く『鳥』に尋ねました。

「『鳥』よ、我が忠実なる最初の子よ。お前は私によく仕えてくれた。お前の働きがなければ、この世界はこうも早く形にはならなかっただろう。お前の命が尽きる前に、その働きを労(ねぎら)いたく思う。何か望みのものがあるのなら言うがいい」

『鳥』は神の言葉に涙を流しました。
それは苦しみからでも、悲しみからでもない、喜びの涙でした。

――　我が主様。欲しいものはありません。ただ、一つだけお願いがあるのです。

「聞こう。お前は私に何を願う？」

――　わたしはもうすぐ死にます。もう、主様のために働く事もできません。わたしはあなたのために働く事こそ、喜びでした。…ですからどうか……――。

＋　＋　＋

「…そういや、そういう話があったな」
尖塔の天辺という、足場の安定を心配する以前に、そもそも普通なら誰一人登ろうとも考えないような場所で、男――　ニルヴァセレウはぽつりと呟いた。

その姿は奇異を通り越してひたすら怪しい。だが誰一人、その姿を見咎める者はいなかった。
彼の姿は一般の人間には視認する事が不可能なのだ。
その名――　『十七番目』が司る事象故に、たとえ彼自身がどのように努力しても、特定の資格を有する者以外に己を認識させる事が出来ない。
その資格保有者が有する唯一にして無二の特徴を、『天の青』と言う。
指し示す通り、空を写すそれはほぼその資格者の『瞳』に現れる。その色と同じ…すなわち空色を有する瞳が向かう先には、王城と対になるように建てられた小ぶりの建物。
「――　『どうかこの命絶える時は、あなたのお側で』」
その口から紡がれるのは、ムージェンに伝わる昔話の一節。今ではほとんど知る者もない、古い古い物語。
地上に生きる数多の生き物の中で、何故『鳥』だけが空を飛べるのか――　もっとも、天に近しい場所にいられるのか、その理由を語る物語だ。
人ではないその目に届いた少女の決意は、彼にその物語を思い出させた。
生まれた時から死ぬ間際まで、ひたすら神に献身的であった『鳥』。見返りを何も求めず、ただ側で終わりたいと願ったそれを。
神はその願いを聞き届け、結果として鳥は何よりも天――　神に近い場所にいられるようになったという。
古くから語り継がれる物語には、何かしらの真実を含む場合が多い。『鳥』の話も、また然りだ。
その『真実』を思い返し、ニルヴァセレウの顔には何処か苦々しいものが浮かぶ。
（『鳥』か――　これは偶然か？）
このムージェンを取り巻く状況は刻一刻と変化している。放置すれば、取り返しのつかない状況になるのは必至だった。

…それでも手は差し出さない。否、差し出したくても差し出せない。
まだ、『どうしようもない』状況ではないからだ。
これからいくらでもひっくり返る。良くも――　もちろん、悪くも。
少女――　ルシカの存在は、これからに大きく影響するだろう。術核として取り込まれているというだけでなく、その生まれ持った力の為に。
「もっとも…自己犠牲で満足する位なら、その程度という事だが」
とても友好的とは言えない口調で、冷ややかに呟く。
ニルヴァセレウにとって、ルシカは実に厄介な存在だった。何しろ、今回の件がここまで面倒になったのも、ルシカがいた為なのだから。
ルシカという鍵がなければ、レサイアの人間はここまで思い切った事が出来なかったはずだ。
ルシカ自身に非はないが――　その動向次第でソファルの命運が左右されるのだから、楽観出来るはずもない。
（向かう方向は、悪くない）
ここに来たばかりの状態から考えれば、ルシカの変化は劇的と言ってもいい。だが、まだだ。まだ、足りない。
ソファルが思い描く『結果』――　未来には。

――…お願いだ、ニルヴァセレウ。

おそらく後にも先にも唯一の、『友人』が初めて口にした願いを思い出す。そしてそれが、最後の願いになった。

――　たとえ生まれてくる子が、お前が望み続けた存在であっても…本当に必要とするまでは、手を貸さないで欲しいんだ。

異端の王、突然変異の資格者――　気の遠くなる時間の果てに現われた、『共犯者』。
それは、その人物の今際の際に交わした約束だった。
今の彼の姿は、その生体情報を元に再現されたもの。というのも、彼にはそもそも実体というものがなく、人のような姿を取ろうとするには元となるものが必要となるのだ。
それも、もうそこから変更する事のないもの、すなわち故人となったものが。
結果として、彼は代々の資格者の姿を取り――　今はルフト＝スライ＝ムージェンと呼ばれた人物の姿になっている。
彼が若くして死ななければ、ニルヴァセレウがこれほど早く彼の姿を取る事もなく、ソファルの未来も随分と違うものになった事だろう。
「今だって、私はお前の選択を疑問に思ってるんだよ。ルフト」
いまさら言った所で、何かが変わる訳ではないとわかっていても、ニルヴァセレウは記憶の中の彼に語りかけた。
直系王族の『三番目』は『闇』の影響を受けやすい。闇と言っても、決して悪い意味はない。それは『夜』に通じるものだ。
全てを覆い隠し、眠りに閉じ込めてしまう夜に。
生き物は眠らねば生きて行けない。安心して眠れる夜こそ、誰もが欲するもの。
…故に『スライ』の名を持つ者は、客観的には人徳者のように思われる事が多い。
あらゆる事を泰然と受け止め、淡々と乗り越えて行くと思われる。総じて人当たりがよく、安らぎを感じる者も少なくない。
だが――　実際は違うのだ。
受け止めている訳ではない。飲み込んでいるだけだ。
自分の許容量がわからず、ただひたすらに痛みや苦しみなど飲み込んで…本来なら何かしらの感情をもって処理されるそれを、そのまま溜め込んでしまう。

…人の心には限界がある。
いつしかそれは、本人の自覚もないまま心身を蝕み――。
「…だから、言ったんだ」
ろくでもない死に方をする者が多いと。
もちろん、全てがそうなった訳ではないが、他と比べても確率が高い事を統計的に知っていたから。
ルフトは本来なら、まだ死ぬはずがなかった。二十歳の若さで、身重の妻を残して死ぬ未来はなかった。病気や怪我ならばともかく、あのような死に方だけはしないはずだったのに。
――　にもかかわらず、ルフトは死んだ。ニルヴァセレウの目の前で。
「……」
ルフトの死を思い返す時、ニルヴァセレウはいつも自分の内に不可解な感覚を覚える。
不愉快？　不満？　怒り？　…似ているようで、何か違う。
自分でもわからないそれを持て余しながらも、今度は視線を王城側に向けた。
誰もが忙しそうに動き回る中、一人目立つ存在がある。
父親と母親から長所も短所も引き継いだ、まだ幼いと言っても過言ではない若き国王。
本来なら座って適当に指示をすれば良い身の上だと言うのに、自ら率先して動きまわっている。落ち着かないのが半分、残り半分はそれが当然と思ってだろう。
出来る事は何でも自分でやりなさい――　幼い頃からエラージュにそのように育てられた結果に違いない。本人に自覚のないそんな姿に苦笑する。
「ソファル、お前は――　私が待ち望んでいた存在なのかな？」
無条件に愛おしく感じるのは、おそらくルフトのせいだろう。姿を写す際、外見だけでなくその精神的なものもかなり影響を受けるのだ。

『一度壊れたこの国を、お前が新たに作り直せ』

結局、ルフトはその賭けを達成する事が出来なかった。
あの時点ではまだどう結果が出るかわからなかった為、結果として状況は保留される事になったが――。

――賭けはどうする気だ。放棄する気なのか？
――……。
――お前の願いを叶えるにしても、これだけは譲れない。まさか、お前の妻に肩代わりでもさせる気か？
――…いいや。エラージュにニルヴァセレウの姿は見えないんだろう？　だから別の人間に頼もう。
――別の？

その時、確かにルフトは笑った。
自分が死ぬとわかっていながら、臆した様子もなく笑ったのだ。

――私の子は、直系王族だろう？
――…まさか……。
――そのまさか、だよ。生まれてくる子が大人になる頃、このムージェンを好きになれていたら私の勝ちだ。

まだ無事に産まれてくるかもわからないというのに、ルフトはそう言い切った。
ルフトが目指した新たな国――　それは誰もが自分の居場所を愛せる国。
そして――　そんなやり取りなど知るはずもないソファルは、夢の中でその答えを出した。――　実に、あっさりと。

『好きだよ』
『面倒だけど、でも何故か嫌いにはなれないんだ』

その時の喜びを、どう表現したら良いのだろう。
そう、ニルヴァセレウはこの賭けに負ける事こそを願っていた。
（お前の勝ちだ、ルフト）
尖塔の上からは、ムージェンの大地をぐるりと見渡せる。
荒れ果てた大地に混ざるのは、生命の緑。吹き抜ける風は清く、光は柔らかく降り注ぐ。
かつての栄華を極めた時代を知る者にとっては、嘆かわしい変化かもしれない。だがこれは、世界そのものが再び息を吹き返した証でもあるのだ。
「ムージェンの意志たる私は、前国王ルフトの遺児にして現国王ソファルに従おう」
ただ傍観するだけの時間は終わった。
…今でも、ルフトの無謀な賭けにも等しかった選択を納得はしていないけれども。
それでも結果だけ見るなら、決してそれは間違いではなかったのだ。もし、その選択がなかったなら――　長い事不在だった、彼の『真の主』に出会う事はなかったのだから。
「…――　我が主。もし、あなたがこの青を愛せるならば」
歌うように、囁くように。それは遠い昔に交わされた約定の言葉。
ニルヴァセレウは視線の先にいるソファルへと問いかけた。
「私はその行く末を祝福しよう。さあ、ソファル。…お前はどんな道を選ぶ？」

第四十二章　エルランシア

「…――？」

ふと、誰かに声をかけられたような気がしてソファルは足を止めた。

周囲をぐるりと見回してみるが、それらしき人影はない。気のせいだろうかと首を傾げている横を、晩餐会の準備に奔走する使用人達が足早に通り過ぎて行く。

すれ違う際に足を止めては一礼して行く姿に、何となく通行と仕事の邪魔しているような気分になり、ソファルは再び歩き出した。

（…疲れてるのかなあ）

疲れるほど今日は働いてはいないのだが、ここ数日の度重なる異常事態を考えると、自覚がないだけで疲れているのかもしれない。

先程まではモランと共に会場となる広間の最終確認を行っていたのだが（実際はこれも国王自らやる仕事ではないのだがやりたいと自分で主張した）、少し早い昼食を取る為に会場を後にした所だ。

正直、緊張も手伝って食欲どころではない。

しかしモラン曰く、こういった形式での晩餐会では主人格である国王はほとんど食事を口に出来ないらしい。

確かに言われてみれば接待する側なのだから、客人をそっちのけで食事に夢中になる訳には行かないだろう。

ならば時間的にも余裕がある今の内に、食事と休息を取っておくに越した事はないのはわかっているのだが――。

結局、ソファルの足はいつしか食堂とは違う方向へと進んでいった。

柔らかい陽射しが降り注ぐ中庭――　例の木陰に腰を下ろす。人目のない落ち着く場所と思うと、結局ここになってしまうらしい。

「…ふう」

腰を下ろすと同時にため息が零れ、そんな自分に少し呆れる。

朝からずっと気を張っているせいだろうが、ムージェンの滅亡を願う人々が動くとしたら今日しかない。いつ何時、何が起こるかわからない状況で緊張を緩めては意味がない。
これでは駄目だと自分に気合を入れなおしつつ、改めて軽く身体を幹に預ける。
流石にうっかり居眠りなどする訳には行かない。そのまま寝転がりたいのを我慢し、ぼんやりと庭園の方へ目を向けた。
木漏れ日を落とす葉蔭の向こうに、庭園を挟んで離宮が見える。
（…ルシカは無事に戻ったのかな……）
まだソファルの元に何の知らせも届いていない。
何故こんなにもルシカの安否が気になるのか、未だソファル自身にもよくわからなかった。
――　自分より幼いから？
最初に顔を合わせた時に『妹』がいたらこんな感じなのかと考えたから、一種の庇護欲のようなものを抱いているだろうか。
確かに今まで、自分より年下の子供などソファルの身近にはいなかったけれども。
だが、ディネアから尋ねられた時に答えたように、今は『妹』とか、そんな風には感じていなかった。当たり前の事だが、幼い時から一緒に育ったトラムやディネアと同じように思えるはずもない。
では、レサイアからの賓客、それも（実際の所は不明だが）皇帝の血を引く息女だから？
それもまた、違う。
少なくとも一国の王としての義務感だけではない。もっと個人的な感情からだ。
唯一言える確かな事は――　もし、何かに巻き込まれているのなら助けたいという事だけ。
その感情が何であるか答えを出すには、あまりにも接した時間が短かく、置かれた状況も特殊すぎるのだ。
アルノーンは昨夜、自らルシカの所在を明らかにした。

そこにどんな意図があり、一体何の為にルシカの身柄を拘束したのかわからないが、流石にお人好しなソファルもアルノーンの言葉を頭から鵜呑みには出来なかった。
体調を崩したなど信じられるはずがない。万が一そうであっても、たった半日休んだ程度で体調が戻るというのも不自然な話だ。
（…術者……か）
ルシカに何かしらの異能の力があるのは間違いないだろう。そうでなければ、腕に刻まれていた痣があんなに鮮やかに消え去るはずがない。
アルノーン達がそれを最初から知っていたのか、それとも後で知ったのかはわからないが――　後者であるなら、時期的にソファルの痣を消した事が理由となった可能性がある――　その事が多かれ少なかれ関係しているのではないか。
ムージェンでは『渡し守』以外の異能力を持つ者がほとんど見られない事も、今回の件で後手に回っている理由の一つだった。
実際は表に出てこないだけでたくさんいるのかもしれないが、今からそうした者を捜し出し、対抗策を講じる事など不可能だ。そもそも、見つけ出せた所で対抗する事が出来るかもわからないのだが。
「あと――　数刻か」
晩餐会には出られると明言したくらいだから、おそらく会場で姿を確認する事は出来るはずだ。だが、落ち着かない。
いっそこのまま、離宮に直接行ってみようかと思いもするが、今までの出来事を思い出して思い留まる。
彼らの目的には、ソファル自身の死も含まれるのだ。使節団のどこまでが関わっているのかわからない今、敵陣にも等しい場所に単身乗り込むのはいくら何でも無謀というものだろう。
自分に万が一の事があった時、王位そのものが宙に浮きかねないばかりか――　ルフト、そしてエラージュがその生涯かけて育んできたものが、場合によっては途絶えてしまう。
（それは、嫌だ）

両親の夢は、そのままソファルの夢でもある。
ただ引き継ぐばかりではなく、ソファル自身が成し遂げたいと強く思い描く夢だ。
だからこそ、ここで不用意な行いをする訳には行かない。再びムージェンを天の恩恵豊かな大地へ戻すには、どれだけの時間が必要かもわからないのだから――。
視線を離宮からぐるりと周囲に巡らせる。
十五年かけて王宮とその周辺の緑こそかなり戻ってはいるが、地方に出ていたフィリーからの報告では、中央から離れれば離れるほど荒廃は残っているという。
それも仕方のない事だろう。
地上の大陸に比べれば遥かに小さいだろうが、ムージェンも相応の国土を誇る。一時(いっとき)にその人口が大きく減少した結果、今もまだその国土に対して人の数の方が足りていない状態だ
ソファルを含む《大災厄》以降に生まれた世代が徐々に増えてきてはいるが、これぱかりはすぐにどうにか出来る問題ではない。
(まあ…それ以前に、目の前の問題をどうにかしないと将来も何もない訳だけど――…?)
結局、何がなんでも死ぬ訳には行かないという結果になり、思わず苦笑したソファルの目がふと見開かれる。
偶然視線を向けたそこに、見慣れない物が見えたからだ。
王宮と離宮の間にある庭園は、かつては専門の庭師が季節毎に整えていたが、今はそんな余裕もなく、ソファルがもたれる樹木のように《大災厄》を生き延びたものと、その後、痩せた大地でも育つ植物を見つけようとルフトとエラージュが実験的に植えたものが無秩序に生えている状態になっている。
流石に今回の使節団を迎えるにあたって、明らかに雑草とわかるものは撤去したが、中には見分けがつかない為にそのままにされている物もあった。
エラージュが存命であれば、何処に何が植えられているのか大体

の事はわかったのだろうが、今となっては確認のしようがない。必要が特になかった事もあり、記録すら残っていない状態なのだ。
目を向けた先は、庭園の外れ。そこにあったのも、そうした物の一つだった。
（見間違い……？）
木々が風に揺れた拍子に目についたそれが気になり、立ちあがるとその一角に足を向けた。
「……！」
改めて近寄ってみて、それが見間違いではないとわかり、ソファルは息を飲んだ。
細くなめらかな茎、目に優しい柔らかな緑の葉は若干厚みがある。その緑に混じって、数日前までは確かになかった色が風に揺れていた。
それはまるで空の色を溶かしこんだような、可憐な青い青い花――。
「この花って、もしかして……」
食い入るように見つめる先にあるその花に、かつて耳にした言葉が甦る。

『やっぱり咲かないわね……。私の一番好きな花なのだけど』

それは一体いつの事だっただろう。
ため息混じりにそう漏らしたのは、今は亡き母・エラージュだった。

『とても綺麗な花なのよ。昔はムージェンの何処でも見る事が出来たそうだけど、大災厄で全部枯れてしまったわ。もう一度咲いている姿が見たくて、なんとか種は残っていたからルフト様と育ててみたのだけれど…枝葉は育っても花が咲かないの。きっと…まだ、何かが足りないのね』

諦めの混じった、寂しげな微笑。
エラージュにとって、それは数少ないルフトとの思い出に繋がるものだったのだろう。
それがこの花であるかは、実物を知らないソファルにはわからない。だが、直感的に理解する。この花こそ、エラージュが見たいと望んでいたものだと。
「…――　エルランシア」
確か、そんな名前だった。
おそるおそる、幾重にも重なる花弁に触れ、指先に感じる草花特有のしっとりと冷たい感触に幻ではない事を確かめる。
咲いているのはたった一輪。
だが、よく見るとあちらこちらの枝に蕾がついている。つまり――
偶然、この一輪だけが花を咲かせた訳ではないという事だ。
（…母上…この花なんですね？）
答えがない事は承知で、心の内で問いかける。
あともう少しでも、エラージュの時間が長ければ直接見る事も出来たかもしれない。そう思うと胸の奥が痛んだ。
ソファルには花の良しあしはわからないし、そこまで身近なものでもない。
けれどエラージュが一番好きだと言うのもわかる気がした。初めてみるエルランシアの花を、ソファルも素直に綺麗だと思えた。
何処よりも天に近いムージェンの空を写し取ったようなその青は清らかで、見ているだけで心が救われるような気持ちになる。
永い間咲く事のなかったその花が、何故今になって咲いたのかその理由はまったくわからない。気候的な特別な変化など、この数日では見られなかったのに――。
だが、それはまるでルフトとエラージュの祈りと努力が実を結んだからのようにソファルには思えた。
僅かに躊躇い、ソファルはその一輪をそっと手折る。

（ごめん、一輪だけ貰うよ）

残る蕾が無事に開く保証は何処にもないが、何となく側に置いておきたいと思ったのだ。

奇跡のように咲いた花が、亡き両親の代わりに自分を応援してくれるような気がして――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1049d/

天上の国

2010年10月8日21時48分発行